パパが見た映画
365本

第二集
（下）

磐田　匠

はじめに

映画が大好きだった、父と

だんだん大きくなってきて、難しい映画とか見始めた二人の息子に。

そして映画を愛する全ての人々に、この本を捧げます

この本はこんな本

ブログをやってました。

過去形で書くってことは、現在休止中でございます。

そのブログのなかで、やれドラマだとか映画だとか、音楽だとかを、ランダムにご紹介しておりましたが…

一日一本の映画を毎日紹介していって、一年で365本の映画を紹介できたりしたら、かっこええやろなって思ったのが全てのはじまりでございました。

更新が遅れると一日二本とか三本とかの映画を紹介し続けて、連載は二年ちょっと続きました。
今週はこんな映画見ました、今週はテレビでこんな映画やりますよって感じでしたね。

で、コツコツと書きためた原稿をまとめたものがこの「パパが見た映画365本」シリーズでございます。

一年続くかな、どうかなって思いながら始めた連載ですが、けっこう映画って見てるものでございます。

そんな事情がある本ですので、シリーズもののご紹介順とか、けっこうぐちゃぐちゃでございます。
テレビオンエア情報みたいな感じで書いていた時期もありますもので。

御勘弁いただきたいと思います。

あと、表記上のご注意。
えっと。スターのみなさんにはなんせ「さま」をつけさせていただいております。
なぜかというと。
一応、私、元役者なんですよね。大阪の古い演劇人の人なんかだと、先生って普通につけちゃいます。
西山先生とか端田先生とか堀内先生とか志摩先生とか。
そうじゃないと「さん」づけ。
須永さんとか馬場さんとか柳川さんとか田中さんとか。
萬子さんとか南条さんとか鍋島さんとかシュン太郎さんとかいのうえさんとか。
辰巳さんはつみさん、生瀬さんはさんちゃんさんだったけど。

で。
西山先生を先生って呼び、シュン太郎さんをさんづけで呼ぶ私が、ハリウッドスターを呼び捨てにしたらあかんやろって思って。
さまづけで統一させていただいております。
ただし、文頭のスタッフキャストは、映画本の慣例にならい、あえて呼び捨てです。

あと、個人的にね。映画のあらすじって、すげえ読みにくいなってずっと思ってましてん。
役名であらすじ書くでしょ。
このときジャックは…とか。ジャックって誰やねん、みたいな。
映画の世界を皆様にイメージしやすくしてさしあげたいなって気持ちでも書いておりますんで、邪道を承知で、演じたスターの名前であらすじ書いてます。
普通、友達に映画のこと説明するときに、「そのあとマクレーンはな…」みたいな説明する人、少ないでしょ。「ウィリスさまがね…」って説明するでしょ。

井戸端会議みたいな映画感想本を目指しておりますので、逆に役名で説明したほうがわかりやすそうな場合を除き、あらすじ上での役名表記も基本はしませんので、こちらもご了承いただきたいと思いまする。

前置きはこれくらいにしまして。

本編、おたのしみください。

はじまりはじまりぃ

１３日の金曜日パート６・ジェイソンは生きていた

１９８６年アメリカ映画
監督　トム・マクローリン
主演　トム・マシューズ、ジェニファー・クック

ホラー映画特集の続きです。「１３日の金曜日」シリーズの第六弾。
えっと。第五弾で、新しい方向性を見せようとしていた「１３金」シリーズですが、うむむ。新しい世界に物語を広げるのに失敗しちゃったみたいですね。
今日は「１３金」の時系列の話。
ジェイソン少年が湖で溺れたのは１９５７年だそうです。（溺れたときの年齢が気になりますが、１０才だったとしたらジェイソン君、今年で５９才。還暦手前ですなあ）
第一話そのものはその事件以来閉鎖され、「十数年ぶりに再開」されたということなので、１９７０年前後のお話です。
第二話から四話まではその五年後って設定なので、１９７５年あたりでしょうか。
五話はその６年後だから１９８１年。
今日紹介するのは第四話から十年後だから１９８５年くらいかな。ってことで時代考証が済んだところで、今日の作品。
今回は「中盤トミー三部作」の最終作。
前作のショッキングなラストがどうシリーズに続くのかなあって思っていましたが、少なくともあのラストはなかったことにされているようです。
ひょっとしたら第五話そのものがなかったことになっているかも。
第四話から続いた話だと思ってもらったほうがいいかもしれません。
ジェイソンの幻影に怯えるトミー少年。
この幻を追い払うためには自分の手でジェイソンをもう一度葬るしかないってことで、トミー君は土葬されているジェイソンの墓をあばき、火葬して改葬しようとしますが、やっぱりこうなります。
突然の落雷。
そのショックでジェイソン復活。
フランケンシュタインの怪物みたい。なんやねんそれ。
で、いつものようにジェイソン・暴れる、トミー・戦う。もうええかって空気が流れはじめた一編です。
パパの採点。１０点満点中４点。
パパ的最高傑作の「新・１３日の金曜日」から話がつながってなかったので、点数はかなり低いです。
学校でいうと「欠点」ってやつですかね。かなり期待していただけに残念な結果になりました。

１３日の金曜日パート７・新しい恐怖

１９８８年アメリカ映画
監督　ジョン・カール・ビュークラー
主演　ラー・カーク・リンカーン、テリー・カイザー

懲りずにホラー映画特集。「１３日の金曜日」シリーズの第七弾。
前作まで頑張っておりましたトミー君、どうやらお役御免になったようです。
かわってジェイソン君に立ち向かうのはなんと超能力少女。
おお、新しい展開。
タイトルの「新しい恐怖」って、ジェイソン君が感じる「恐怖」だったんでしょうか。
なんかかわいそうなくらいボロクソにやっつけられます。
今回は超能力少女ちゃんの悩みから物語が始まります。
実はこの少女、自分が不注意で使った｢力｣のせいで、父親を死なせてしまっております。
で、めっちゃ後悔しておるわけですな。湖畔にたたずみ、彼女は祈る。
「お父さん、お願いだから生き返って…」もうおわかりですな。
この超能力少女の祈りでジェイソン復活。
どないやねん。
で、お約束ですが、ジェイソン君大暴れ。
そして最後には超能力少女とのバトルが繰り広げられるわけでございますな。
まるで「炎の少女チャーリー」か「クロスファイア」か、ってな感じのバトルでございます。
ジェイソン君いいようにやられます。
過去ジェイソン君がこれほどまでにボコボコにいわされたことがあったでしょうか。いや、ない。（修辞疑問ですな）
スーパージェイソン君のことですから、次回作ではきっと超能力でも身につけて復活するんだろうなあ。
そしてこの少女との遺恨マッチを繰り広げるんだろうなあ、とシリーズ予測をしておりましたが、この作品以降は全然違う流れにいっちゃいます。
というよりも、「湖畔の殺人鬼」シリーズは前作パート６で終わっていたのかもしれませんね。
パパの採点。１０点満点中７点。
トミー君シリーズが結局わけわからなくなって、「もうええかなあ」みたいな気分になっていた私の心にさす一筋の光明。
新しい展開を予感させる作品。
まあリアルなホラーを求めている人はここらへんで「もうええか」モードになってきたと思うのですが。
超能力ものがけっこう好きなので、採点は甘めです。

１３日の金曜日パート８・ジェイソンＮＹへ

１９８９年アメリカ映画
監督　ロブ・ヘッデン
主演　ジャンセン・ダジェット、スコット・リーブス、ピーター・マーク・リッチマン

懲りずに「１３日の金曜日」シリーズの紹介です。今日は第八弾。
えっと。シリーズはいよいよ末期的症状を迎えるに至りました。
ジェイソン君、クリスタルレイクのキャンプ場を飛び出して、マンハッタン行きの船に乗って、ニューヨークに登場でございます。
ありゃありゃ。なんか「ドラキュラ７２」とか「ドラキュラ都へ行く」もしくは「ブラキュラ」とかの反主流派吸血鬼ムービーを思い出してしまいました。
このへんの作品は、吸血鬼が都会に登場して、何もしらない都会の人々がおろおろして、でも吸血鬼は吸血鬼としてふるまうことしかできなくて、みたいなズレが、ええ具合にホラーコメディっぽい「場の空気」を作っておりました。
今回もそれと同じ感じ。
ジェイソン、ニューヨークに登場って言われても。
ジェイソンに遭遇したパンクス、驚く、みたいな。
これってホラーコメディのシチュエーションですよね。どう考えても。
まあ作品としてはコメディにしかならないんだけど、ヘッデン監督、この素材をちゃんと撮ろうと思うところに無理があるってことかもしれません。
ちなみにこの後のシリーズ展開。
「ジェイソンの命日（パート９）」ではジェイソン君、バラバラ死体になったんだけど、別の人間の肉体に乗り移ったりします。
なんじゃそりゃ。「ヒドゥン」やないねんから。
ここまできましたらシリーズはＳＦの世界に突入です。
と、思っておりましたら「ジェイソンＸ（第１０弾）」では本当にスペースシャトルに乗ることになったジェイソン君でございます。
しかしムチャクチャ。
で、このあとの「第１１弾」ではついに「エルム街の悪夢」のフレディ君と対決。もうどうにでもしてくれ～
パパの採点。１０点満点中４点。
私が「１３金」シリーズと決別することになったのは、この作品が原因でございましたです。
だからといって点数甘くしたりはしませんですよ。
この作品は本当にこんな感じの評価が妥当だと思います。
まあねえ、このうちこういう展開にしないと生き残れないかなって思っておりましたが。
しかしこの題材が第八弾までいってしまうってのが驚きですわな。（実際には１１弾までありま

すが…ほんま、唖然でございますね〜）

ハロウィン

１９７８年アメリカ映画
監督　ジョン・カーペンター
主演　トム・モラン、ドナルド・プレザンス、ジェイミー・リー・カーティス

ホラー特集でございます。
「ハロウィン」でございます。ジョン・カーペンター監督の出世作にして最高傑作。
少年時代に姉をナイフで惨殺した「良心を持たず、しかも苦痛を感じない」男、マイケル。
彼は収容されていた精神病院を脱走、殺戮を繰り返します。
彼を追うのは、マイケルの担当医だったルーミス医師＝プレザンスさま。
このマイケルとルーミス医師との戦いが本シリーズの物語的核となっております。
そして圧倒的存在感のルーミス医師の存在こそが、このシリーズが他のホラー映画と大きく水をあける水準をもった作品にしたといっても過言ではないかと思います。
ドラキュラ＝ヘルシングの例をあげるまでもなく、魅力的なアンチヒーローには、それに対峙する魅力的なヒーローが必要でありまして。
１３金はこのヒーローの一貫性の形成に失敗したような感がありますです。
まあ１３金はシリーズのコンセプトそのものが第二作目以降大きく変わってしまったもんで比較しちゃいけないんですが。
とりあえずこのハロウィンシリーズは第八作まで製作されます。
シリーズ全体のプチ解説をしておきますと、プレザンス演ずるルーミス医師が登場するのは第一作から（外伝的な第三作を除いて）第六作まで。
当時「スクリーミング・クイーン」なんて言われていたジェイミー・リー・カーティスが出演したのは第一作・第二作と、プレザンスが亡くなった後に製作された第七作・第八作。
哀れカーティス様、人気がでてきてギャラが上がりすぎたのでしょうか、第八作の途中で殺されてしまいます。
第一作で監督・脚本・音楽を担当したカーペンター監督ですが、第二作では製作・脚本。
第三作では製作・音楽、第四作では音楽を担当。
しかし五作目以降の主要スタッフにはお名前が見当たりませんです。
パパの採点。１０点満点中７点。
「ハロウィン」シリーズもけっこう見ております。個人的には病院が舞台の第二作「ブギーマン」が一番すきなんですが、今回はシリーズ第一弾ってことでちょっと甘い点数です。

ローズマリー

１９８１年アメリカ映画
監督　ジョセフ・ジトー
主演　ヴィッキー・ドーソン、クリス・ゴートマン

ホラー特集が続いております。こうやってかなり精力的に、しかも意識してとりあげていかないとなかなかホラーを紹介するチャンスがありませんので。
ご了承くださいまほ。
さて「ローズマリー・キラー」（これが原題っす）のご紹介です。
って書いてから気づきましたが、手元の資料の原題が本によって違います。どうしてでしょう。
ま、いいか。
高校の卒業パーティーの夜、一組の男女が惨殺されます。
この最初に殺されちゃった少女の名前がローズマリーで、この殺人鬼は「ローズマリー・キラー」って呼ばれるわけですが、この事件以降、殺人鬼は現れず、町には平和がやってきます。
しかあし。数十年ぶりに再開されたパーティーの夜、再び惨劇が起こるわけでござんす。
犯人はマスクをかぶり、軍服を着た男でございますが、物語中盤から後半はこの「軍服を着た男」が誰なのかっちゅう推理サスペンス的謎ときつき。
けっこう意外な人物が犯人なんですが、でも消去法で考えると、犯人はこの人しかいないかな。
犯人につながる重要な手がかりが、実にアメリカンなおっちゃんの怠慢で途切れちゃう。
映画を見た当時、まだ日本から出たことのなかった私は、「やっぱりアメリカ人ってあかんなあ」なんて思ってしまいました。
それよりも何よりも、特殊メイクのトム・サビーニさまの仕事が素晴らしいです。
匠の仕事、みたいな感じですわ。
やっぱりこの人（とロブ・ボーティーンさまとリック・ベイカーさまでしょうなあ）は特殊メイクの歴史を塗り替えたといっても決してオーバーではないと思います。
パパの採点。１０点満点中７点。
基本点は５点。しかたないです。低予算ホラーの典型みたいな筋立てだし。
あと「意外な犯人」に一点。
トム・サビーニさまの特殊メイクに一点。
この映画を見て感動した記憶をもっと大事にしてたら、今ごろ私は特殊メイキャップアーティストしてたかもしれないですね～
懐かしい作品ではあります。

インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア

１９９４年アメリカ映画
監督　ニール・ジョーダン
主演　トム・クルーズ、ブラッド・ピット、クリスチャン・スレイター、キルステイン・ダンスト、アントニオ・バンデラス

ホラー特集。
キャストを見て、あまりにも大物ばかりそろっておりますので、まあギャラでスターを集めて適当に撮った吸血鬼映画なんだろうなあと勝手に思い、全く期待しないで見た映画ですが、めっちゃ面白かったことだけを強烈に記憶しております。
やっぱり映画ってのは先入観無しに見るか、あまり期待しないで見るほうがよさそうですね。
ジャーナリストのスレイターさま、自分が執筆中の本にとりあげようと町で出会った青年ピットさまにインタビューを申し込みます。
しかしピットさまの口から語られた彼自身の物語は、スレイターさまの想像を遥かに凌ぐ、壮絶な物語だったわけです。
なんとピットさまはヴァンパイヤで、１８世紀から生きていたわけですな。
で、ピットさまは彼をヴァンパイヤにした吸血鬼レスタト＝クルーズさまとのあーだこーだを話すわけでございます。
それなりに面白く、そういうつもりで見ていた前半から中盤。
ほう、けっこう面白いやないの、って思っていたらクライマックスのハイテンションな盛り上がり。すげえすげえ。
この盛り上がりがあったので、この作品は私的にとても大切な作品になりましたです。
ある資料によりますと、クリスチャン・スレイターさま演ずるジャーナリストは、当初リバー・フェニックスさまがキャスティングされていたそうで、実際に撮影もされていたそうな。
フェニックスさまの急死によって急遽スレイターさまが起用されたそうです。
作品の最後で「リバー・フェニックスに捧ぐ」というクレジットがでるのはそういう事情があったとか。
知らなんだ。
というより、そんなクレジットが出ていたことさえ気づかなかったです。未熟な映画ファンやなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
トム・クルーズさまがめっちゃええです。
この映画の前後あたりから、急速にクルーズさまの評価があがっていきましたですよね。
さすが私と同い年です。
えっと、こういう状況で「たら」「れば」は禁句なんだけど、あえて言わせていただきますと、リバー・フェニックスさま版の「インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア」、実現したら面白い映

画になっていたでしょうなあ。

ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド

１９６８年アメリカ映画
監督　ジョージ・Ａ・ロメロ
主演　ジュディス・オデア、ラッセル・ストレイナー、デュアン・ジョーンズ

ホラー特集です。
えっと。知っている人は知っている有名な話ですが。
ホラー映画の新しい世界を開拓したともいわれている「ゾンビ」。
この作品は実はこの「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」の続編になります。
「ゾンビ」の原題は「ドウン・オブ・ザ・デッド」。
「生ける死者の夜」「死者の夜明け」ときまして、シリーズは最終作「デイ・オブ・ザ・デッド（死者の日＝「死霊のえじき」）と続きます。
さて「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」。
そもそもこの三部作は、「宇宙から謎の光線が地球上に降り注ぎ、その光線を浴びた『死者』は起き上がり、生きていたころの記憶をたどりながらただ歩き回る。そして死者は生者の血肉を食べようとする」ってえ設定をもとに製作されております。
ただ、描かれている時間が少しずつずれておりまして。
宇宙線の影響で死体が動き始めてすぐの世界が描かれるのがこの「ナイト…」でございます。
ちなみに「ゾンビ」は町に「動く死者」が増え、ＳＷＡＴ隊員たちが町を捨て、ヘリで脱出する話です。
シリーズ第一作の「ナイト…」は墓参りで墓地を訪れた女性が主人公。
彼女はこの墓地で謎の男に襲われます。
言葉を発さず、自分たちの言葉さえも理解していないかのような男。
女性は墓地近くの民家に立てこもります。
時間が経つにつれ、「男」と同じ空気を持った不気味な人が増えていきます。さあさ、どうなる。
私が見たこの作品は白黒映画で、めっちゃ陰鬱な雰囲気に満ちた作品でございましたです。
この作品、白黒であるがゆえにゴシックな雰囲気に満ちております。
これがけっこう格調高げなムードをかもし出していると思うのですが。気のせいかなあ。
この作品、後に着色処理され、カラー版として再上映されました。
さらにロメロ監督の盟友・特殊メイクのトム・サビーニがメガホンをとったリメイク版もございます。
この二作もチェックしなきゃいけませんですね～
パパの採点。１０点満点中８点。
白黒映画ゆえの格調高さが若干気に入っております。
でも八点だったらポイント高すぎるかもしれませんね。ま、いいか。

死霊のえじき

１９８５年アメリカ映画
監督　ジョージ・Ａ・ロメロ
主演　ロリー・ガーディル、テリー・アレキサンダー、ジョセフ・ピレートー

ホラー映画特集でございます。
ジョージ・Ａ・ロメロ監督のドル箱シリーズ、前期三部作の最終作でございます。
謎の宇宙線が地上に降り注ぎ、死者たちが歩きだしたって世界の物語。
時系列で言いますと、「ゾンビ」の少しあとの世界です。
地上はほぼゾンビに占領されております。生存者たちは軍の地下施設に集まり、力をあわせて暮らしております。
で、地下軍事施設だから、ゾンビたちを退治する研究とかしているわけですね。
施設の中では軍人と研究者がいがみあったりしておりまして、そのへんのことが事態をややこしくしているわけですな。
で、やはりというか何というか、その辺のことがもとになってゾンビ、基地内に大乱入～ってことになりまする。
とりあえずゾンビさんがたは基地内に乱入しておお暴れしてもらわないことには盛り上がらないわけでございまして、結局その乱入が三部作最高のスプラッターシーンにつながってまいります。
とにかくトム・サビーニさまの特殊メイクがすばらしいですね。
中盤から後半のショックシーンを見るだけでもこの映画を見る価値たっぷりってえくらいの素晴らしい仕事ぶりでございます。
とりあえず特殊メイクの勉強のつもりでいいから見てもらいたい作品でございますね。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかくこのシリーズはよくできております。そのうえでの評価ですが、リアルで芸術の域にまで達したといえるトム・サビーニさまの特殊メイクに高ポイントでこの評価でございます。

サスペリア

１９７７年イタリア映画
監督　ダリオ・アルジェント
主演　ジェシカ・ハーパー、アリダ・ヴァリ、ジョーン・ベネット

この「サスペリア」の大ヒットで一躍「映像派ホラー作家」の第一人者として称されるようになったダリオ・アルジェント監督の作品でございます。
とにかく映像が美しい。
めっちゃ奥行きがあって幻想的な映像。
残酷シーンでさえ美しい。うむ。ええ感じやわ。
舞台は全寮制のバレエ学校。全寮制のバレエ学校って、なんかそれだけで萌え萌えの舞台設定ですよね。
かなりいけてます。主人公のハーパーさまはそこにやってきます。
彼女が到着したときに、学校を飛び出していったもう一人の少女。
少女は何を見たのでしょうか。
知人宅に転がり込んだ少女は何者かに惨殺されてしまいます。
で、一方のハーパーさま、深夜に校内を歩き回る足音を聞いたりするわけですな。
おお、ミステリアス。
ハーパーさまと同じように足音を聞いたバレエ学校の寮生。彼女は一人部屋を抜け出して足音の主を探そうとしますが、彼女もまた謎の人物の犠牲となります。
しかししかし、姿を消した少女は「急に転校した」とか説明されるわけですな。
おお、これぞサスペンスの王道、「知らせ」の原理ですな。
観客は少女が「殺された」ことを知っているんだけど、ハーパーさまはその事実を知らない。
んだもんで観客は登場人物以上にハラハラドキドキするわけですね。
実はこのバレエ学校、悪魔崇拝者の巣窟だったわけでございますね。
この学校の「園長室」に鎮座しているのは、年齢８００歳だか９００歳だかの魔女でございます。いぐわあああ。
途中までサスペンスフルな展開をもってきておいて、いきなり魔女登場。
どっかあああん。オカルト系映画特有の掟破り的展開でございます。
諸悪の根源たる魔女、なんだか弱っちい。なんやねん、この結末って感じでございます。
まあ話の筋はあほかこいつみたいな流れなんですが、それを補ってあまりある映像美が堪能できる作品でございます。
ライティングと映像の美しさだけでもご覧くださいませ。
パパの採点。１０点満点中７点。
上記の理由で、アルジェントさまものとしては若干点数は低めです。
やっぱり米を食べる人種に向かって「魔女」とか言っちゃあいけませんやな。

サスペリア・パート２・紅い深淵

１９７５年イタリア映画
監督　ダリオ・アルジェント
主演　デヴィッド・ヘミングス、ダリア・ニコロディ、ガブリエル・ラヴィア

ホラー映画特集でございます。
今日は「サスペリア・パート２」でございます。
パート２ってタイトルではありながら、前作とは全く関係ありません。
というより、「サスペリア」よりこの作品のほうが製作年度が古いわけで。
「サスペリア」が思いの外ヒットしてしまい、同じ監督の映画だから「パート２」のタイトルでいってまえ、みたいな意図がみえみえです。
悪魔オカルトものの「サスペリア」のパート２というタイトルをつけられながら、悪魔は出てまいりません。
純粋なサスペンスホラー作品。
主人公ヘミングスは、殺人事件を目撃してしまいます。
彼はその事件現場に駆けつける途中、部屋に通ずる廊下にかけられた「絵」に違和感を感じます。
こいつが重要な伏線。
ヘミングスさまそのは事件を追います。
やがて起こる第二、第三の殺人。
殺人現場に流れる子供の歌。
そして犯人を追及する重要なツールとなるのが、子供が描いた一枚の絵。いぐわあああ。
この作品ってとりあげてなかったでしょうか。
なんかどこかでこの作品の記事を書いたような記憶があるのですが、はっきり覚えていない。
「一年３６５日で３６５本の映画を紹介しちゃおうコラム」の作品データベースにタイトルが無かったので、とりあえずご紹介しましたが。
ひょっとしたら映画好き探偵が登場する未公開の推理小説でとりあげたのだろうと記憶しております。
自作の推理小説でとりあげるということはかなりお気に入りの作品です。
小説ではこの映画の「映像でないと成立し得ない奇想天外なトリック」をとりあげたと思います。
アルジェント監督のお洒落な映像はすでに完成の領域です。
めっちゃええ感じ。けっこう面白い作品に仕上がっております。
パパの採点。１０点満点中８点。
私的には「サスペリア」よりもこの「サスペリア・パート２」のほうが好きですね～

インフェルノ

１９８０年アメリカ・イタリア合作
監督　ダリオ・アルジェント
主演　アイリーン・ミラクル、リー・マクロスキー、アリダ・ヴァリ

ホラー映画特集です。
よく続きますこと。
こうやって見てみるとけっこうホラー映画見てるんですね。というか、大学に入って演劇始めるまでは「特殊メーキャップアーティスト」になりたかったから、そういう意味でめっちゃホラーばっかり見ていたわけでございますが。
さて「インフェルノ」。
アルジェント監督の製作順では、「サスペリア」の次がこの「インフェルノ」です。
作品の題材も、「サスペリア」同様魔女もの。そういう意味では本当の意味で「サスペリア・パート２」というタイトルをつけられるべき作品はむしろこっちだったのかもしれませんですね。
この作品はアルジェント監督がアメリカに渡って撮影した作品です。
お馴染みの極彩色感覚もとってもシュールで、けっこういけてます。
「三人の母」ってえ魔女に関する本があるのですが、この本にまつわる連続殺人事件を描いた作品。
申し訳ありませんが、この映画、大阪は十三の映画館でやっておりました「ホラー映画マラソン上映会」のときに見まして、同じ日に続けて五本くらいホラー映画を見た中の一本でございまして。
めっちゃ印象薄いんです。
間違いなく見てるんですが、同じ日に見た「サスペリア」と内容がだぶってしかたない。
女の人が、いきなりガッって顔を後ろから抑えられて、その喉元に割れたガラス板がジャッキーンって場面は覚えているのですが、なんかその場面しか記憶にないです。
近いうちにもう一回見て、記憶を呼び起こしたいと思っておりますです。
パパの採点。１０点満点中４点。
見てるんだけど、一場面しか記憶に残ってないんで、採点のしようがないです。
悪魔ものだったって記憶と、紹介したシーンくらいの印象では採点不可能に近いですわ。
ってことで、採点保留に近い４点ってことでご勘弁いただきたいと思います。

シャドー

１９８２年イタリア映画
監督　ダリオ・アルジェント
主演　アンソニー・フランシオサ、ダリア・ニコロディ、ジョン・サクソン、ジュリアーノ・ジェンマ

ホラー特集。ダリオ・アルジェント監督特集でございます。
「サスペリア」「インフェルノ」と続いた魔女路線から、サスペンスホラー路線に戻っての作品。
光と影、ショック演出、意表をつく犯人登場の描写など、監督の美しい残酷ホラー技法が冴え渡る一編でございます。
主人公のフランシオサさまは推理作家でございます。
彼は作品の執筆のためにローマに来ております。
そこで起こるのは、彼の書いた小説の通りに進行する殺人事件。
当然フランシオサさまは警察にマークされるわけですね。
警察官を演ずるのは…うむむ。どっちやったやろ。ジュリアーノ・ジェンマさまだったかジョン・サクソンさまだったか。
で、もう一方が警察のえらいさん。
記憶だとジェンマさまが刑事だったような気がするのですが。
えっとですねえ、この作品、後半であっと驚く意表をつく展開が待っております。
普通こういう展開は使わない。
むしろ禁じ手に近い驚きの展開。
私は素直に驚きましたが、さして多くもない主要キャストがボコボコ殺されていき、誰がどう考えても犯人はそいつしかいない、みたいな状況になって、初めて明かされる驚愕の真実、みたいなクライマックス。
で、ダリオ・アルジェント監督お得意の、ありえない方法で死ぬ犯人。ぐわあああああ。
この作品の犯人設定には相当驚きました。
しかしサスペンス映画をあまり見ない友人は、一言「犯人、こいつしか残ってへんやん」とのこと。
確かに。
サスペンス映画ファンって、物語の展開を先読みしすぎるのですかね。
パパの採点。１０点満点中７点。
とても面白く、楽しめた作品ではありますが、やはり物語のクライマックスまでに犯人がばれてしまうのが難点でしょうか。
ただ、タイトルの「シャドー」の意味が「なるほど、そうやったんかいな」とわかる瞬間の映像はとてもすばらしく感じました。

フェノミナ

１９８４年イタリア映画
監督　ダリオ・アルジェント
主演　ジェニファー・コネリー、ドナルド・プレザンス、ダリア・ニコロディ

ホラー映画特集です。
鬼才ダリオ・アルジェント監督が、後の作品群に通ずる「美少女いじめ」という作風を確立させた記念碑的作品。
本作でいじめられるのは「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」で美少女役を演じたジェニファー・コネリーちゃんでございます。
主人公のコネリーさまは、不思議少女なわけですな。
どう不思議なのかといいますと、彼女、昆虫と交感できちゃうという特殊能力があります。
でも、夢遊病患者だったりするわけです。
そんな彼女、スイスの寄宿学校へやってまいります。おお、「サスペリア」のパターンやなあ。
その学校で起こる連続殺人事件。
彼女、夢遊病で歩いているうちに殺人事件の現場を目撃してしまいます。
おお、かなりやばい状況や。
さらに歩きまわっているうちに、車椅子の昆虫学者、プレザンスさまと知り合いになります。
プレザンスさまは昆虫学の知識を駆使し、殺人事件の被害者の死体にたかるウジを調べることによって事件の核心にせまりつつあります。
やがてプレザンスさまに殺人者の魔手がせまる。
そしてコネリーもまた狙われることになってしまうのです。いぐわあああああ。
コネリーちゃん、これでもかこれでもかというくらい苛められます。
なぐられて失神したり、鎖につながれたり、あげくはウジと死体が浮かぶ池に落とされたり。
ここまでせんでええやないの。私にはかわいい女の子いじめる趣味はありませんです。
「サスペリアパート２」からのつきあいになるロックバンド「ゴブリン」のテーマ曲もええ感じです。
この映画のテーマ曲は、劇団時代に演出した唯一の作品で主題歌として使用させていただきました。
サウンドトラックは、冒頭の少女惨殺シーンの絶叫入り。
レコードもまた美少女イジメ趣味満載でございましたなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
かなり好きな作品です。
主人公が昆虫と交感できるって設定が、ホラーとしては新しかったですね。
イナゴと交感する「エクソシスト２」のリンダ・ブレアさまを思い出しましたが、こっちのほうが数倍かわいいので、こっちの勝ち～

オペラ座・血の喝采

１９８８年イタリア映画
監督　ダリオ・アルジェント
主演　クリスチナ・マルシラッチ、イアン・チャールソン、ウルバノ・バルベリーニ

ホラー映画特集です。
ダリオ・アルジェント監督の、私的にはかなり後期に感じる作品。
まあ「フェノミナ」あたりまでかなあ。楽しんで見れたの。
このへんになりましたら、ちょっと「わけのわからなさ」が前面に出すぎて、イマイチ乗れなかった作品が続きます。
えーっと。オペラ座が舞台です。
そのまんまですが。
オペラ「マクベス」の代役でデビューしたって設定のした少女マルシラッチさまが主人公。
例によって美少女いじめの香りがする設定っす。
そこで起こる連続殺人事件。まきこまれる少女。いぐわあああ。
というパターンではありますが、この作品に関して言いますと、ちょっとアルジェント監督のパワーにかげりが見えてきたかなあって空気が流れておりますね。
その中でもちょっと新しかったのが途中の殺人シーンでございます。
犯人は警察関係者かもしれないって言われて、かなりビビッているオペラ座のマネージャー。
彼女を護衛するために警察官がきております。そこにやってくる男。彼も警察官だと名乗ります。
え？どっちが本物？って感じでドアの外を覗くと、彼女は凸レンズの覗き穴ごしに拳銃で撃たれてしまう。
それが超スローモーションの超アップ映像で描かれます。
おっ、新しい。
あと、クライマックスのカラスの乱舞シーンもすばらしいです。
なんか、カラスはとっても賢い鳥だそうで、なんだかわからないけど、カラスが犯人を襲うわけですわ。
どんな原理でカラスが犯人を襲うのか、で、登場人物はそのことがわかっているわけだけど、なんでそのことがわかるのか。
なんでそいつが犯人なのかとか、わけわかりませんが、とにかくオペラ座の天井近くを数十羽のカラスが飛び回るシーンは圧巻で新しかったです。
パパの採点。１０点満点中７点。
映像的に面白い場面はいろいろありましたが、ストーリーがちょっと整理されていない印象が残りました。

トラウマ・鮮血の叫び

１９８２年イタリア映画
監督　ダリオ・アルジェント
主演　アーシア・アルジェント、クリストファー・ライデル、パイパー・ローリー

ホラー特集です。
ホラー映画世界の巨匠、ダリオ・アルジェント監督の作品でございます。
例によりまして美少女イジメ系ホラー映画。
今回いじめられるのは監督の愛娘、アアーシア・アルジェントさまでございます。
精神病院を脱走し、自殺しようとしていた少女・アルジェントさま。
彼女は両親のもとへ送り返されます。
アルジェントさまの母は霊媒師。
彼女が自宅に着いた日の晩に行われた降霊会で事件は起こります。
母は何者かの霊にとりつかれ、両親そろって首を斬られるという事件が起こります。
やがてその事件が連続殺人事件に発展してまいります。
アルジェント監督らしいといえばらしい作品。
らしいといえばらしい展開。
しかし、「らしい面白さ」はあまり感じなかったです。
かなりパワーが翳ってきておりますね。
私的にはアルジェントの最盛期は「フェノミナ」「シャドー」あたりで、このころ撮る作品はイマイチのめり込んで見れなかったです。
私がホラーから気持ちが離れていったって背景以上に、好きな監督さんのパワーが落ちていったってえのもあるかもしれません。
第一、いくらかわいくても娘を出演させちゃあいけませんやな。
娘自慢っぽい。
コッポラ監督といい、アルジェント監督といい、ええ加減にしてほしいものです。
パパの採点。１０点満点中６点。
この作品のこの採点はしかたないですね。あまり面白くなかったです。
好きな監督さんの作品だけにちょっとショックでした。
アルジェント監督の作品はこれ以降、ほとんど見ておりません。

フランケンシュタイン（１９９４）

１９９４年アメリカ映画
監督　ケネス・プラナー
主演　ロバート・デ・ニーロ、ケネス・プラナー、トム・ハルス

ホラー映画特集でございます。
まあ、この作品をホラー映画ってカテゴリーに入れるかどうかってのは実に評価が別れるところでありましょうが。
なんかねえ。
製作コッポラさまだし。主演デ・ニーロさまだし。
なんか画面の格調めっちゃ高いし。
作品的なノリは、ホラー映画というよりは文芸大作です。
ショックシーンも、「必然性のあるショックシーン」みたいな感じでございます。
となるとね、ホラー作品とはいえないんじゃないかって思ってしまったりします。
とりあえず、限りなく文学作品に近いホラーカテゴリーの映画ってことにしときましょうかね。
ユニバーサルのボリス・カーロフ版とか、ハマーのピーター・カッシング版のフランケンシュタインは間違いなくホラーなんですがね。
フランケンシュタイン博士＝プラナーさまは、母を失ってしまいまして、それがもとで「永遠の命」の研究を行います。
彼はある教授のもとで研究を重ねていたわけですが、その教授がある男に殺されてしまいまして、教授の残した「死者再生の研究資料」をもとに、人造人間を開発するわけですね。
このモンスターを名優デ・ニーロさまが演じます。
モンスターはその醜さゆえに誰からも愛されない。
モンスターは「愛」を求めてさまようことになるわけですね。
やはり天下の名優デ・ニーロさま。
見事にモンスターの悲哀を演じきりました。
しかしなあ。私的には特殊メイクとかもっと使って、モンスターっぽい造形にしたほうがよかったような気もしますね。
「フランケンシュタインのモンスター」といえば誰もが思い浮かべるであろうボリス・カーロフさま版の迫力にはやはり届きませんでした。
パパの採点。１０点満点中７点。
ちょっとおとなしすぎるモンスターでございました。

キャット・ピープル

１９８１年アメリカ映画
監督　ポール・シュレーダー
主演　ナスターシャ・キンスキー、マルコム・マクダウエル、ジョン・ハート

ホラー特集でございます。
「怪優」という表現がぴったりのドイツ人俳優クラウス・キンスキー。
そのお嬢さんのナスターシャ・キンスキーが出演したかなり初期の作品でございます。
今ではかなりベテラン女優って雰囲気ですが、このころはまだまだ初々しい新人女優さんって印象だったことをよく覚えております。
キンスキーさまが演ずるのは、猫族の女性。
この猫族は、猫族以外の男性と結ばれてしまうと、豹の姿に変身してしまいまして、相手を食い殺してしまわなければ再び人間の姿に戻ることができないという悲しい宿命を負っております。
同族のマクダウェルは、娼婦とかとよろしくやって発散したりしているわけですが、キンスキーさまはそうはいかない。
人間の男性を好きになってしまいまして、悩み傷つくわけでございますね。そんなキンスキーさまがお人形さんみたいにきれい。
かくして物語は、ホラーというよりファンタジー系のラブストーリーっぽい展開をみせてまいります。
「キャット・ピープル」って映画は、かなりむかしに映画化されておりまして、本作はそのリメイク版ってことになります。
前作はかなりホラーっぽい筋立てだったみたいですね。
見てみたいのですが、オリジナル版は未見です。
オリジナルは猫族女が人間を好きになって、その男が別の女とつきあいはじめて、それを知った猫族女が嫉妬のあまり豹に変身して…道成寺みたいやなあ。
でもホラー的にはこういう展開のほうが面白そうですね。
パパの採点。１０点満点中６点。
キンスキーさまの変身シーンは確かに良いのですが、キンスキーさまのきれいなイメージを大事にしようとしすぎたためか、かなり抑えた筋立てになってしまったようですね。
そこらが減点になっちゃいました。ホラーとしてはポイント低めです。

ディアボロス

１９９７年アメリカ映画
監督　テイラー・ハックフォード
主演　アル・パチーノ、キアヌ・リーブス、シャーリズ・セロン

ホラー特集でございます。
アル・パチーノさまとキアヌ・リーブスさまという、前代未聞の豪華キャストによるホラーというかサスペンスというか。
若い弁護士のリーブスさま、仕事を大物弁護士のパチーノさまに評価されて彼の弁護士事務所に転職します。
しかしその直後から彼の周囲で奇妙な事件が続けざまに起こりまして、やがてリーブスさまはパチーノさまの秘密を知ることになるわけでございます。
ここからちょいとネタバレ。
ただ、ネタバレレベルは低いです。でもかなり映画の核心部分のこと書きますので、作品未見の方はご注意を。
えっとですねえ、この作品を「ホラー」って紹介してしまうところがそもそも間違いなんじゃないかと思います。
物語の構造としては、サスペンス的にもりあげていって、不思議な事件とかが起こって、どういうことなんだ・どうなっているんだってところから、ドンデン返し的にパチーノさまの正体がわかると、こういう展開でございますから、ホラーなんだって構えて見られたらよくない作品でございまして。
この作品も「エンゼルハート」同様、サスペンスカテゴリーに入れなければいけないと思うんですよね。
サスペンス映画では、犯人は警官だから刑事もの、犯人は悪人だからピカレスクもの、みたいな分けかたしないでしょ？だから犯人が悪魔であろうと魔女であろうと鬼であろうと亡霊であろうと、こういう系統の映画はサスペンス映画としてカテゴリー分けしなきゃいけないんじゃないかって思えてしかたないです。
それでありながらタイトルは「ディアボロス・悪魔の扉」やし。
こんなタイトルつけたらあかんって。
パパの採点。１０点満点中７点。
予備知識なしに見たらもっと楽しめたかもしれませんが、私はホラー映画として構えて見ましたから、イマイチ盛り上がらなかったです。

ヴィデオドローム

１９８３年カナダ映画
監督　デビッド・クローネンバーグ
主演　ジェームズ・ウッズ、デボラ・ハリー

ホラー映画特集でございます。
ホラー映画史に残る傑作、と位置付けておられる人も多いのではないでしょうか。
ビデオの急激な普及という背景が生み落とした、衝撃的カルトホラーでございます。
暴力やらポルノやらをメインの番組にしているテレビ局。
そこの社長がウッズさまでございます。そんな社長が「幻のビデオ」を入手します。
そのビデオのタイトルが「ヴィデオドローム」。
拷問とか殺人とかが延々と行われるそのビデオを見つづけると、次第にその人間の意識が侵食されると、そういったお話でございます。
意識が侵食されて、主人公ウッズは現実とも幻覚ともつかない強烈なイメージを見るわけですが…
ＳＦＸがとにかく強烈。
衝撃的映像が繰り広げられます。
腹が裂けてその中にズブズブ手が入っていくだとか、握った銃が手と同化していくとか、ビデオを流しているテレビのブラウン管に顔が吸い込まれていくだとか。
すげえすげえ、って感じでございます。
カナダの新鋭デビッド・クローネンバーグさまの名声を一気に高めた傑作でございます。
ジェームズ・ウッズさまがいいですね。
それ以上に、出演場面はそう多くはないながらデボラ・ハリーさまが妖艶でめっちゃよろしい。
ＳＭの女王っぽい強烈な役柄でございます。
特殊メイクはＳＦＸの第一人者リック・ベイカーさま。
憧れましたね～
このころはビデオってものが普及していった時期です。
本当にとんでもないピッチで普及していきました。
こういう時代背景が、このような強烈で刺激的なホラー作品を生んだんでしょうね。
今だと「着信アリ」だとか「ボイス」だとか「フィアーズ・ドットコム」あたりの作品がこういう「時代が生んだ映画」系なんでしょうね。
パパの採点。１０点満点中８点。
映画雑誌とかで紹介されているのを見て、すっごく見たくて、それでもなかなか見ることのできなかった幻の作品。
やっぱりめっちゃ面白かったです。

ペット・セメタリー

１９８９年アメリカ映画
監督　メアリー・ランバート
主演　デイル・ミッドキフ、フレッド・グウィン

ホラー特集です。
モダン・ホラーの第一人者、スティーブン・キングさまの傑作原作を、キング自らが脚本を担当した映画でございます。
とっても悲しいホラーです。
田舎町に引っ越してきた主人公ミッドキフさま。
彼の家はトラックが行き交うロードサイド。新しい家に大喜びしたのもつかの間、家族が可愛がっていたペットの猫が車に轢かれて死んでしまいます。
ミッドキフさまは猫を「ペットセメタリー（ペット墓場）」の「禁断の場所」へ埋めます。
驚いたことにその猫は生き返って帰ってきます。
しかし帰ってきたその猫は、もう死んだかわいいペットの猫ではなかったわけですね。
猫は元の面影もないほど凶暴になって帰ってきます。
困ったもんだ。
しかし悲劇はこれから。それからしばらくして、ミッドキフさまの幼い弟がトラックにはねられて死んでしまうのです。
兄の苦渋の決断。
それは弟のなきがらを「禁断の場所」に埋めること。
しかししかし、やはり帰ってきたのはミッドキフさまの知っているかつての弟ではありませんでした…
とっても悲しいホラー映画であります。私だってね、大事な人を亡くして、「禁断の場所」がどこいあるかを知っていたら、主人公と同じように「生命のタブー」に踏み込むに違いないです。
だけど、タブーを冒してまで取り戻したかった大事な人が、その人の形をした別のものだったら…
耐えられないでしょうね～
パパの採点。１０点満点中７点。
ちょっと悲しすぎるホラーですよね。でもよくできています。
でもここまで悲惨な話にする必要あったのかなって思ったりします。
もうちょっと救いが欲しかったなってことでこの点数。ただ、ホラー的には面白かったですよ。

クジョー

１９８３年アメリカ映画
監督　ルイス・ティーグ
主演　ディー・ウオーレス、エド・ローター

ホラー特集でございます。
映像化しにくいといわれているスティーブン・キングさまの原作小説を映像化した作品でございます。
狂犬病に感染した蝙蝠に噛まれたセントバーナード犬の「クジョー」。
クジョーはこの病に感染してしまうわけですね。
狂犬病ウイルスに蝕まれたセントバーナード。
飼い主の自動車修理工の工場近くを徘徊する澱んだ瞳の犬。
その前に現れたのは、たまたま自動車修理でそこにやってきた母子です。
クジョーは母子を襲おうとし、二人は車に逃げ込むわけですね。
修理しなきゃならないような車だから、エンジンはかからない。車から外には出ることができない。
こうして炎天下の下、二人は車の中に閉じ込められることになります。
子供はあまりの暑さに脱水症状を起こし、母は子供の命を救うために、狂犬病に感染した巨大なセントバーナード犬と戦うことになります。
原作は未読ですが、どうやら狂犬クジョーの心理状態だとかをかなり詳しく描写しているようです。
で、ネタばれになっちゃいますが、かなり暗く、救いのない終わり方になっているようですね。
ホラーとはいえ、映画のほうは幾分ソフトな結末。
映画的な枠内での終わり方といいましょうか、タブーを冒さない終わり方といいましょうか。
鋭い人ならこう書いただけでだいたい結末の想像つくでしょうが。
なんかねえ、夏、車の中のむっとした空気が伝わってくるような、リアルで暑苦しい映画です。
それほどよくできている映画であると評価できるわけでございますが。
パパの採点。１０点満点中７点。
キングさま原作もののなかでは、かなりよくできている部類の作品です。
キングさま原作の映画ってね、なぜかＢ級作品が多いような気がします。
とくにこの作品の時期は「炎の少女チャーリー」だとか「クリスティーン」だとか「チルドレン・オブ・ザ・コーン」だとか。
おお、思いつくままに書いたけど、みんなけっこうＢ級ですよね～

クリープショー

１９８２年アメリカ映画
監督　ジョージ・Ａ・ロメロ
主演　スティーブン・キング、レスリー・ニールセン、ハル・ホルブルック、エド・ハリス

ホラー特集でございます。
監督は「ゾンビ」のジョージ・Ａ・ロメロさま。
脚本はロメロさまに加えてキングさまも参加。
ホラーの大家二名が作りあげたオムニバスホラーです。
第一集で、「トワイライトゾーン」をとりあげたときは１エピソード一ページでじっくりご紹介しましたが、今回は一気にいっちゃいますね。
プロローグは少年が親に内緒で、ホラーコミック雑誌「クリープショー」を読んでいたことから始まります。
それを見つけた親父、その本をとりあげて捨ててしまう。
捨てられた本のページが風にめくられて…お話しが始まります。
第一話。殺した父が墓場からよみがえってくるお話。
家族が父を殺したのは父の誕生日。
バースデーケーキを買ってこいと大騒ぎする父を殺しちゃったわけですね。
ゾンビになった父はやっぱりケーキだケーキだと騒ぐわけですが、そのゾンビ父の欲しかったケーキとは…
第二話。あからさまに頭の足りない農夫（スティーブン・キングご本人熱演）。
彼の農場に隕石が落下します。
どうやらその隕石には宇宙植物らしきものがとりついていたか、または地球上の植物を異常成長させる物質が含まれていたのか。
キング農夫、草まみれになって植物にとり殺されてしまうってえ話。
第三話。浮気をしている妻とその愛人を砂浜に顔だけ出して埋めた夫。
やがて潮が満ち、二人は溺死してしまいます。
しかし、妻と愛人はゾンビとなって復讐にやってきます。
第四話。箱の中に入った人食い怪物を、怪しげな骨董商から買い取った男。
彼が怪物に食わせたかったのは、彼自身の悪妻でございました。
第五話。異常にきれい好きな男。
彼はクリーンルームに住むほどの潔癖症。
ゴキブリなんて大嫌い。しかし、いないはずのゴキブリがクリーンルームの中に大量発生しはじめて…
そしてエピローグはプロローグで登場した少年とそも親父の話に戻ります。
いかにもアメリカンコミックス風の演出がなかなか面白いです。

ただ、それぞれの物語の尺が短すぎて、それぞれのエピソードがあまり印象に残らなかったですね。
パパの採点。１０点満点中８点。
けっこう好きな作品です。もうちょっとじっくり作っていただきたかったですね。

クリープショー２・怨霊

１９８７年アメリカ映画
監督　マイケル・ゴーニック
主演　ジョージ・ケネディ、ドロシー・ラムーア

ホラー特集でございます。
「クリープショー」の続編。「クリープショー２・怨霊」のご紹介。
本作は前作とくらべるとエピソード数も減り、かなり整理された感じがします。
前作は「バースデーケーキ」と「満ち潮」でゾンビネタがかぶっていたのがちょっと減点でしたが、今回はカブリもなし。
三エピソードで話がかぶってちゃ話になりませんが。
第一話。田舎町の古い骨董品屋さん（ケネディさま）が主人公。
彼の店にはまるで守り神のようにインディアン人形があります。
この骨董品店に強盗が入り、哀れ夫婦は殺されてしまいます。
で、このインディアン人形が動き出して夫婦の仇を討つわけですな。
第二話。学生たちのバカンスのお話。
遊泳禁止の立て札のある湖。
湖には筏みたいなものが浮かんでおります。学生たち、筏まで泳ごうよ、みたいな呑気な雰囲気でしたが、筏にたどりついたとたん、どこからかコールタールのような黒い物質が漂ってきて、その筏を取り囲みます。
さあさどうなる。
第三話。あからさまに道を急いでいる女。実は彼女は浮気の帰りだったわけでございます。
急ぐあまり、彼女は道を歩いていたヒッチハイカーを轢いてしまいます。
で、当然ひき逃げ。
しかししかし。そのハイカー、追いかけてくるわけでございまして。こいつが実に怖い。さあさどうなる。
前作でメガホンをとったロメロさまは、本作では脚本のみの参加です。
続編ということで全体的なパワーダウンは否めませんが、作品数も少なくなってすっきりしてるし、それぞれのエピソードもパンチが効いていてよかったと思うのですが…
ただ、いろいろな映画評を見たところ、圧倒的に前作の評価のほうが高いです。うむむ。どうなんやろ。
パパの採点。１０点満点中８点。
上記の事情で、あえて前作「クリープショー」と同じ評価にしておきました。
どっちが好きかは見る人次第ってことでご勘弁くださいませ。

ボイス

２００２年韓国映画
監督　アン・ビョンギ
主演　ハ・ジウォン、キム・ユミ

ホラー特集のとりあえずの最終回。
韓国製ホラーです。
めっちゃおぞましい顔をした幼児が、きゃあああああって叫ぶテレビＣＭ、めっちゃ覚えております。
携帯電話が恐怖のツールとして利用されておりますが、なんか途中からその恐怖のツールがパソコンになったりして、え？って感じになりました。
どうせだったら最後まで携帯で押し切って欲しかったのですが。
謎の脅迫電話に悩まされていた主人公のジウォンさま。
かかってきた電話をたまたま取った幼児の娘。
しかしその瞬間、娘の表情が変わり、絶叫。きゃあああああああ。
そしてジウォンさまの身の回りに次々と起こる怪奇現象。
彼女はその携帯に何か秘密があると気づき、過去にその携帯番号を使用していた人物を調べはじめます。
さあそこから次々と明るみにでる事実、事実。きゃあああああ。もうええか。
えっとねえ、怖がらせのツールてんこもり。
で、ショックシーン連発。
あまりに怖がらせようってサービス精神が強すぎたのでしょうか、途中から物語が蛇行しはじめ、物語はあらぬ方向へ進んでいきます。
中盤から後半にかけては、最初の話ってどんなんやったけ？みたいな感覚にさえなってしまいました。
韓国映画とか香港映画ってこんな感じでドガチャガになること多いような気がするんですが。
全ての怪異現象を引き起こしていたのは少女の霊だったってことがクライマックスで明らかになるわけですが、霊になってまで人にとりついたり、携帯の持ち主を呪い殺したりして、でも話が蛇行しちゃった関係でその因果関係がちゃんと説明されてなくて。
そこまでして何がしたかったの？みたいな突っ込みの気持ちだけが残ってしまったのは残念です。
パパの採点。１０点満点中６点。
うむむ。いろんな恐怖ツールを詰め込みすぎです。
もうちょっと整理していただきたかったですね。
登場人物一人ひとりの描写はけっこう良かったんですが。残念でございます。

Ｘ－メン

２０００年アメリカ映画
監督　ブライアン・シンガー
主演　ヒュー・ジャックマン、パトリック・スチュワート、イアン・マッケラン

近未来。
突然変異によりまして、人間をはるかに超えた能力を持った「ミュータント」が次々と生まれます。
彼らの持つ力に危機感を抱いた政府は、彼らを取り締まる法律を成立させようとしております。
その法の成立を力ずくで止めようとするのが悪のミュータント軍団。
リーダーは有名なシェイクスピア俳優のイアン・マッケラン巨匠でございます。
それとは別に、ミュータントたちを集め、人間との共存を実践しているグループがあります。
こちらのリーダーはこれまたシェイクスピア俳優のパトリック・スチュアートさま。
というより「スタートレック・ネクスト・ジェネレーション」のピカード船長と説明したほうがわかりやすいですかね。
主人公のジャックマンさまは骨格が鉄でできております。
臨戦体制に入ると、体の内側から鉄の爪みたいな武器がでてきたりします。
すげえすげえ。
その他、目から破壊光線を出すにいちゃんだとか、テレパシーができる女の子だとか。これが善玉ミュータント。
悪玉ミュータントはサイコキネシス男とか、変身女とか。
こいつらが戦うわけでございますね。前半は、強力な超能力をもった少女の争奪戦。
後半は、悪玉たちが画策している、「ニューヨークに集まった各国の国家元首のミュータント化作戦」の阻止が描かれます。
けっこう壮大なスケール。
けっこう面白いです。
シリーズ化されたのがうなずける出来の作品です。
パパの採点。１０点満点中８点。
ヒュー・ジャックマンさまの不自然な髭、どうにかならなかったのでしょうか。
あの髭は特殊メイクで、この人、狼男に変身するミュータントなんだろうなとか思ってました。

魔界転生

１９８１年東映作品
監督　深作欣二
主演　沢田研二、千葉真一、真田広之、佳那晃子、若山富三郎

山田風太郎先生原作の傑作伝奇ロマンを、アクションの達人・深作監督がメガホンをとった作品。
異色のオールスターキャストが話題になった作品でございます。
実在の人とかめっちゃ多いですから、役名でご紹介したほうがいいかもしれませんね。
島原の乱で破れ、斬首された天草四郎の怨霊（沢田さま）。
彼は細川ガラシャ（佳那さま）、宮本武蔵（緒形 拳さま！）三好清海入道（室田日出男さま）、さらには徳川に切り捨てられた隠れ里の若い忍者（真田さま）なども転生させて仲間に加え、徳川幕府打倒を図るわけですな。
とはいっても魔界衆が鎧を着て戦うわけではありません。
それぞれが現世に残した未練を成就させようとすることが幕府打倒につながるような、周到なシナリオが描かれているわけでございます。
彼らの前に立ちはだかるのは、剣豪柳生十兵衛（千葉さま）。
十兵衛の父、但馬守（若山さま）は、魔界衆との戦いの最中、持病が悪化し、吐血して絶命します。
息子との真剣勝負ができなかった但馬の無念を察知した四郎は、但馬守さえも転生させます。
かくして四郎を大将とする魔界軍は、江戸城を目指して攻めのぼる。
江戸城内部ではガラシャが将軍を骨抜きにしている。
いぐわあああ。炎上する江戸城。
そしてその中で、四郎と十兵衛の最後の戦いが繰り広げられるわけでございます。
原作はとにかくしっかりと描かれていますので、それに比べると駆け足で物語が進む感じは否めません。
しかしそれを埋めてあまりある深作監督のスピーディでありながら丁寧な演出。
巧いですね。
「里見八犬伝」でも感じましたが、深作監督にとっては原作の尺の長さはあまり関係ないのじゃないかと思います。
パパの採点。１０点満点中９点。
残念なのは、いかにも続編が作られそうな終わりかたをしたのに、続編が作られなかったことでしょうか。
深作監督のメガホンでの続編、見たかったですね～

闇の狩人

１９７９年俳優座・松竹作品
監督　五社英雄
主演　仲代達也、いしだあゆみ、原田芳雄、岸恵子、神崎愛

えっと。まずごめんなさい。
この映画ね、めっちゃ楽しみにしてました。
この映画が封切りされる前に見た、五社監督・仲代主演の「雲霧仁左衛門」がめっちゃくちゃ面白くて、同じ五社・仲代コンビの映画だから、見なくっちゃ、みたいなノリで見に行きました。
あらすじとかほとんどチェックしていなかったんですが、どうやら金で殺しを請け負う「闇の狩人」の話みたいだし。
でね、見たんですが。
期待が大きすぎたのでしょうか。あんまり私的にはスイングする内容の映画ではありませんでした。
えっと、金で殺しを請け負う、「闇の狩人」って組織の物語です。
いや、それはもう書いたって。
時代は田沼時代（この田沼時代を終わらせたのが有名な徳川吉宗ですから、吉宗時代の少し前のお話になります）のころ。
世継問題とかで、幕府の人間だとか、その対抗勢力の人間だとかが、お金で殺しを依頼するわけですな。
こういうお金で殺しを請け負うグループがいくつかあって、一方のリーダーが仲代さま、もう一方のリーダーが千葉真一さまです。
仲代さまグループに過去の記憶を失っている剣の使い手原田さまがやってきまして、そこから実にややこしい物語が展開していくわけであります。
前作の「雲霧…」も、かなり人間関係が複雑で、敵味方、スパイ、裏切り者がごちゃごちゃになっていましたが、今回もけっこう人間関係が複雑です。
「雲霧…」は広告か何かで登場人物の相関関係図をチェックしてから見ましたから、すんなり理解できたのですが、この映画は人間関係についていくのがやっとでした。ラストもけっこうどんより系です。
「雲霧…」のラストがとにかくすばらしかったので、このラストってどうなんだ？
みたいなネガティブな印象だけが残ってしまいました。
やっぱり映画は期待して見るとよくないって話ですよね。
パパの採点。１０点満点中６点。
どこがどう悪いってわけではありません。
今見たらもっと楽しめると思いますが、五社仲代コンビってことで期待しすぎて、申し訳ない点数になってしまいました。

時をかける少女（１９８３）

１９８３年角川春樹事務所作品
監督　大林宣彦
主演　原田知世、高柳良一、尾美としのり

「と～き～を～、かっけるうしょおじょ～」って原田知世ちゃまのかわゆい歌さえ懐かしい、角川映画全盛期のころの一本。
なおかつ名匠大林監督の「尾道三部作」（「転校生」「さびしんぼう」、そしてこの「時をかける少女」がそれざます）の一本。
アイドル女優が主演した他の適当な作品とは一線を画す、名作に仕上がっております。
ふとしたことから、時間を旅する能力を身に付けてしまった少女原田さま。
不思議な同級生高柳さまとの恋愛エピソードと、彼女が体験する不思議なお話が綴られます。
大林監督お得意の、モノクロだとかパートカラーだとかキッチュな特撮だとか。
それがとても素晴らしい効果を生んでいます。
この「大林演出」、「ハウス」あたりの時期は多少違和感があったわけですが、このころは新しい演出手法としてめっきり定着しておりました。
この映画、とにかく大好きです。
特に大好きなのは、クライマックスの上原謙さまとおばあちゃま（女優さんのお名前わかりません。よくお見かけするんですが）の、「これぞ芝居～」みたいな、五分くらいの静かなシーン。
何度見てもこのシーンだけは泣けてしまいます。
作品そのもののネタバラシをしないと、そのシーンがなぜそんなに泣けるのかが伝わらないから、詳しく書けないのですが。
もおねえ、この場面だけでいいから、見ていただきたいと思います。
パパの採点。１０点満点中８点。
原田知世さま、一番輝いていた頃の映画ですよね。
めっちゃかわいかったです。ひそかに好きでございました。懐かしい青春のヒトコマでございます。
その分点数少し甘いかも。ごめんちゃい。

ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ

１９８４年アメリカ映画
監督　セルジオ・レオーネ
主演　ロバート・デ・ニーロ、ジェームス・ウッズ、エリザベス・マクガバン、ジェニファー・コネリー

マカロニ・ウエスタンの代表的監督のセルジオ・レオーネ監督が、長年にわたって準備をし、撮りあげた長編大河ロマンでございます。
ニューヨークにやってきたユダヤ系の若者たち。
彼らは団結してギャング団「モッブス」を結成します。しかしやがて組織は内部から崩壊していきます。
１９２０年代から１９６０年代（もちろん話の流れで描かれない時代もありますよ）の彼らが、じっくりどっしり描かれます。
ごめんなさい、ちょっとネタバレをご容赦くださいませ。
冒頭、いきなり見せてくれるデ・ニーロさまの老け演技。
おお、やってくれるやないの。
さすがやなあ、そこから物語は一気にその四十年前にさかのぼるのですが…
そこからひたすら若き日の彼ら「モッブス」の物語が進みます。
組織は内部の「裏切り者」の存在によって崩壊するわけでありますが、物語クライマックスで、その裏切り者が明らかにされます。
もお、びっくりです。「お前が裏切り者やったんかいな～」みたいな人物が裏切り者でございました。
って書いたら、演技力・俳優としての格的に、裏切り者って一人しか該当者いないからなあ。
厳しいところです。
ともあれ、冒頭のデ・ニーロさまの老け芝居、すげえって思ったわけですが、そのデ・ニーロさまに勝るとも劣らない名老け演技を見せてくれますよ、その裏切り者さん。
とにかくクライマックスの名優二人の演技合戦だけでも見る価値のある傑作でございます。
パパの採点。１０点満点中９点。
とにかく冒頭のデ・ニーロさまの老け縁起とクライマックスの老け演技合戦だけで９点の価値あり。
めっちゃかわいいジェニファー・コネリーさまにも一点あげたかったんですが、満点はちょっとって感じなんで、９点で。

探偵物語（１９８３）

１９８３年角川春樹事務所作品
監督　根岸吉太郎
主演　薬師丸ひろ子、松田優作、秋川リサ

「アイドル・薬師丸ひろ子」さまのかなり後期の作品です。
この作品で彼女が演ずるのは女子大生。
とにかく女子高生キャラで大ブレイクした彼女ですから、高校生から大学生に変わっただけで、なんだかオーラが半減したように感じてしまいます。
アイドルって大変やなあ。
今回の薬師丸さまの相手役は、天才・松田優作さま。
「太陽にほえろ」「大都会パート２」「探偵物語（いうまでもなくテレビドラマ版ですよ）」、映画でいうと「遊戯シリーズ」だとか「蘇る金狼」だとかの軽快でコメディタッチの演技を得意とした時期から、シリアス系の題材を多くとりあげるようになる時期です。
とにかくかっこいいですね。優作さま。
松田さまは探偵でございます。女子大生の薬師丸さまが殺人事件に巻き込まれてしまいまして、護衛のために雇われた松田さまと捜査を開始します。
この映画もまた、「アイドル映画」って感じで公開されましたが、相手役に松田さまを抜擢したり、監督に根岸吉太郎を起用するなど、とっても意欲的。
さすが名プロデューサー角川春樹さまでございます。
作品もけっこうしっかりといた物語にしあがっております。
とにかく松田さまはかっこええし、薬師丸さまはかわいい。そういう目で見てもええ感じですわ。
パパの採点。１０点満点中７点。
８点でもよかったんだけど。ラストシーンの松田さまと薬師丸さまのキスシーン、長すぎます。
そこで１点減点～

ねらわれた学園

１９８１年角川春樹事務所作品
監督　大林宣彦。主演　薬師丸ひろ子、高柳良一

角川春樹事務所全盛期の作品。
眉村卓様の小説の映画化でございます。
私的には、この映画版よりも、原田知世様が主演しておられました同名のテレビドラマのほうに思い入れがあったりします。
ドラマ版の主題歌は「ときめきのアクシデント」。
本田なんとか君ってえ歌手みたいなアーティストみたいな子が謎の転校生を演じておりました。
あと、当時、「金八先生」の出演が終わったばかりの役者さんで、今でもケラさんとよく組んでおられる藤田秀世さまが端役出演されておりました。
当時からすごく芝居が巧い人だったのでよく覚えております。
さて映画版のご案内。
主人公薬師丸さまの通う高校に、謎の転校生がやってきます。
彼は学園内の生徒たちを徐々に洗脳していき、やがて学園そのものを乗っ取ろうとする悪のエスパー一味だったわけでございまして、薬師丸、このエスパーたちと戦うことになるわけでございます。
この映画を見た当時の私はまだ高校生くらい。
当然、大林監督の技法など理解できるわけもなく、突然始まる群舞だとか斬新な合成技法とかが全く理解できなかったです。
まあ、「リアルな映画文法」ってやつにガチガチにとらわれていた時期ですわな。
だから当然、この作品の面白さってものを理解できるわけもなく、「苦手映画」グループに追いやられていた作品でございます。
このあと、先日ご紹介した「尾道三部作」で大林監督はマイ・フェイバレット・ディレクターの一人になるわけですが、この作品は何故か見直されることもなく今日に至っております。
いい機会なんで、見直してみようかなって思っております。
パパの採点。１０点満点中７点。
薬師丸さまがめちゃかわいかったことだけが強烈に印象に残ってますね。
あと、冒頭の群舞でめっちゃ醒めてしまいまして、そこから精神的に流して見ちゃったような記憶だけ残っております。
とりあえず、イメージ評価。
大林作品ってことと、わが青春の薬師丸さま主演ってことで７点。
ちゃんと見直してから再評価したいですね。

セーラー服と機関銃

１９８１年角川春樹事務所作品
監督　相米慎二
主演　薬師丸ひろ子、渡瀬恒彦、風祭ゆき

うむむ、懐かしい。
これまた角川春樹事務所全盛期の作品。
同時に薬師丸ひろ子さまの最高傑作として推す人も多いのではないでしょうか。
ベストセラー作家赤川次郎様の同名小説の映画化です。
父の死で、とつぜんヤクザの女親分にされてしまい、それどころか暴力団同士の麻薬争奪戦に巻き込まれてしまう高校生少女の活躍を描く青春映画でございます。
クライマックス。
対立暴力団の組長の部屋で、デスクの上一面に並ぶ麻薬の瓶。
それを機関銃で粉々に破壊し、「カイ・カン…」ってつぶやくクライマックスシーンは、ひたすら有名でございます。
あと、渡瀬恒彦さんとのあまりにも悲しいキスシーンとか。
パパ的には、冒頭の、斎場で薬師丸がブリッジしながら父を焼いた煙を見るってシーンが秀逸やなあと思った記憶がありますが。
主題歌は来生たかお・えつこ姉弟の「セーラー服と機関銃」。
来生たかおさんのセルフカバー曲「夢の途中」も大好きだったなあ。
懐かしい青春の思い出にひたることのできる作品でございます。
ここらへんの作品でめっちゃ浸れるってことは、私も年をとったんだなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかく懐かしい懐かしいだけで評価してしまいがちな作品ですが、相米監督のセンスがとってもイケてる作品。
角川映画だのアイドル映画だのと先入観を持つ以前に、作品そのものの素晴らしさを評価したい作品でございます。

ドラキュラ(１９９２）

１９９２年アメリカ映画
監督　フランシス・フォード・コッポラ
主演　ゲイリー・オールドマン、ウイノナ・ライダー、アンソニー・ホプキンス、キアヌ・リーブス

コッポラ監督の撮った異色のドラキュラ映画です。
ブラム・ストーカーの原作小説ですが、けっこう忠実に映画化されている前半と、幻想的な後半のメリハリが効いていて、なんだかとってもいい感じです。
えっと…物語はええでしょうかね。
めっちゃ有名な話だし。ただ、映画ではドラキュラ伯爵（オールドマンさま）がいかにして魔界の住人となり、吸血鬼となったかってエピソードから丁寧に描きます。
そして誰もが知っているジョナサン・ハーカー君（リーブスさま）のドラキュラ城訪問～伯爵のロンドン上陸～ジョナサンの恋人（ライダーさま）との出会い～ヘルシング教授（ホプキンスさま）との対決へと流れます。
そこから物語がドラキュラ城へ戻る。
ここらあたりから物語は原作を離れて独自エピソードになってまいります。
ここから先の描き方がとっても独創的。
なんとドラキュラが恐怖の吸血鬼ではなく、悲恋悲劇のヒーローになってしまいます。
これには驚き。
ドラキュラに感情移入さえしてしまいそうな勢いでクライマックスの悲劇が描かれます。
コッポラ監督プレゼンツのホラーといえば、この「ドラキュラ」と「フランケンシュタイン」でございますが、どちらの作品にも共通しているのは、モンスターをモンスターとして描くのではなく、悲劇の主人公として描くところですね。
だからユニバーサルホラーだとかハマーホラーのように続編など成立し得ないし、完結するしかない。
まあそれが本来の姿なんでしょうけど。
全編、とても印象的な光と影のつかわれかたがされております。
とくにドラキュラ城での影の使い方。
おお、すげえって思いました。
役者ではゲイリー・オールドマンさまがいいですね。
この人、こんなに巧いんだあって改めて思ってしまいました。
パパの採点。１０点満点中７点。
とっても面白かったんですが、ちょいと弱いですね。
もう少し盛り上がったらよかったんですが。
ドラキュラを主人公とした悲恋ものって視点はよかったんですが。

そうなるとドラキュラの描きこみがちょいと不足していたような気がしました。

超少女ＲＥＩＫＯ

１９９１年東宝作品
監督　大河原孝夫
主演　観月ありさ、佐藤浩市、菅井きん、佐藤Ｂ作、筒井道隆、小泉今日子

今では「新米看護師ですう～」とも言えなくなってしまった年齢に達した観月ありさ様ですが、彼女がデビューしたてのころに主演した作品。
「観月さまのための、観月さまによる、観月さまのための映画」みたいな作品でございます。
ある学校で不思議な超常現象が続発します。
この謎を解き明かそうとするのが「超常現象研究会」（だったかなあ）でございます。
その顧問になるのが佐藤浩市さま。
そのクラブの部員の一人が観月さまでございます。
観月さまには不思議な力があります。超能力者の祖母（菅井さま）の血を引いた彼女、霊と交感する力があったりします。
超常現象クラブは、校内で不思議現象が起こった場所を探検するだとか、降霊会するだとか。
やがて不思議現象の原因が、かつてこの学校に縁があり、自殺した女生徒の亡霊なんだってことがわかります。
ここらあたりから物語が徐々に加速しはじめますよ～
結局霊払いみたいなことになりまして、いきなり菅井おばあちゃんが登場して霊と対決。
おばあちゃん、怨霊を自らの体内に封印して一件落着、かと思いきや、まだまだ物語がこじれてまいります。
封印されたはずの怨霊はまだ健在でございまして、学園祭でにぎわう高校にポルターガイスト現象、発生しまくり。
さてさてどうなる、みたいな展開。
佐藤浩市さま、菅井きんさま、佐藤Ｂ作さま、さらには特別出演の小泉今日子さま。
とっても芸達者な脇役陣に支えられ、観月さまがんばる。
しかし新人すぎてがんばりどころがよくわかっていないんじゃないかと思えるくらい、なんじゃこらみたいな感じ。
観月さまごめんなさい。ボロクソ書いて。
中盤から後半の超能力対決シーンも今ひとつ盛り上がりに欠けます。
もうちょい仕掛けどころがあってもよかったんじゃないかと思うのですが。
パパの採点。１０点満点中３点。
ちょっとしんどかったですね。どこが悪いってわけではないんですけど。ごめんなさい。

チャーリーズエンジェル・フルスロットル

２００３年アメリカ映画
監督　マックＧ
主演　キャメロン・ディアス、ドリュー・バリモア、ルーシー・リュー、デミ・ムーア、ロバート・パトリック、ジャクリーン・スミス、ブルース・ウィリス

懐かしのテレビドラマ、「チャーリーズ・エンジェル」の映画版第二弾。
三人とも相変わらずかわいいし、それでいて適当に壊れてるし、適当にデンジャラス。
アクションもしっかり力入ってるし。けっこう面白かったです。
冒頭、いきなり誘拐された要人の救出作戦。
この救出作戦から、けっこうとんでもない方向に物語が進んでまいります。
この要人が誘拐された真の目的は、彼の所持していた指輪に隠された「証人保護プログラム」（「イレイザー」とか「グッドフェローズ」とか「依頼人」とかで出てきた、あれですな）のデータだったわけでございます。
案の定、データは敵の黒幕によって流出し、プログラムのデータによって何人かの証人が殺されてしまいます。
そしてそして、エンジェルの一人、バリモアさまも、そもそもギャングの若い衆だった元カレを告発する証言をして「証人保護プログラム」の適用を受けた「元証人」だったことが明らかになります。
バリモアさまが告発した元カレは出所して自由の身。
お約束通り、バリモアさまに復讐しようと彼女を探しはじめる。
いっぽう、エンジェルたち三人の前に現れるのは「先輩エンジェル」のデミ・ムーアさま。
突然現れるビッグネーム女優。ただの特別出演ではなさそう…とか思ってたら、ブルース・ウイリスさまとか出てたし、後半でいきなりテレビシリーズでエンジェルの一人だったジャクリーン・スミスさまとか出てくるし。
と思ってたらやっぱりデミ・ムーアさまってすごく重要な役だったし。
って感じで、物語の展開も退屈しない仕掛け満載。けっこう楽しめました。
パパの採点。１０点満点中７点。
ＣＧもすごくよくできてましたし、ワイヤーアクションも見ごたえあったし、もちろん体をはったアクションもかなりのレベル。
主役の三人がかわいいわりにコメディタッチの演技もするところがすごくよかったです。
ただ、この三人によるチャーリーズ・エンジェルはどうやらこの作品で打ち止めのようですね。

タイムマシン

２００２年アメリカ映画
監督　サイモン・ウェルズ
主演　ガイ・ピアース、サマンサ・マンバ、ジェレミー・アイアンズ

ＳＦ映画の巨匠中の巨匠、Ｈ・Ｇ・ウエルズさまのひ孫にあたるサイモン・ウエルズさまがメガホンをとったＳＦ超大作でございます。
科学者ピアースさまは、求婚したその当日婚約者を暴漢に殺されてしまいます。
彼は過去に戻り、忌まわしい事件そのものを書き換えようと、タイムマシンの研究をはじめます。
やがてタイムマシンが完成。
婚約者が死んだその日に戻り、なんとか暴漢から彼女を遠ざけることに成功しますが、今度は彼女は事故で死んでしまいます。
わけのわからないピアースさま。
後世の学者による「時間」の研究成果を調べ、なぜ婚約者が救えないのかを知るため、ピアースさまは未来へと行きます。
そこでピアースさまは自分がなぜ婚約者を救えないのか、その理由を知ったりするわけでございます。
傷心のピアースさま、さらに未来へ。
更なる未来の世界は無謀な環境開発が原因で、荒廃しております。
人間は小さな集落で自給自足の生活を送っております。
彼らの生活をおびやかすのは、肉食の地底人。
ピアースさまは地底人に誘拐された集落の少女マンバさまを助けるため、地底人の世界に降りていきます。
そこで彼が出会うのは、地底人のリーダー、アイアンズさま。
地底世界でのピアースさまとアイアンズさまの息詰まる戦いが繰り広げられるわけであります。
思っていた以上にしっかりとした作品でびっくりしました。
というか、原作のもつ力をそのまま伝えようという作風に好感がもてました。
その分、前半の物語展開が若干説明調でもたもたした印象が残りましたが、後半のスペクタクル描写はたいしたものです。
パパの採点。１０点満点中６点。
ジェレミー・アイアンズさまってめっきりワル役者になってしまいましたね。
「ミッション」のころはかっこよかったのに。

デイズ・オブ・サンダー

１９９０年アメリカ映画
監督　トニー・スコット
主演　トム・クルーズ、ロバート・デュバル、ニコール・キッドマン

いまやアメリカ映画界をリードする大スター、トム・クルーズさまのごくアーリーな時代の主演作。
だと勝手に思っていましたが、この作品、「レインマン」だとか「７月４日に生まれて」より後の作品だったんですね。
知らんかった。「トップガン」でブレイクし、「ハスラー２」、「カクテル」など、へらへら笑っていたらドラマが成立する作品を経て、「レインマン」「７月４日に生まれて」「ア・フュー・グッドメン」「ザ・ファーム」あたりで演技派として開眼、だと思っておりましたが。
ということですので、演技派として開眼した映画に出会ったあとに撮った、エヘラエヘラ笑っていたらいいような作品。
って書いたりしたらご本人、怒るでしょうか。
カーレースっていうと、アメリカでは日本と比べると格段の人気があるみたいですね。
そんなカーレースに賭けた青春が描かれる映画でございます。
レーサーはクルーズさま。
彼のレースチームのボスがデュバルさま。んで、クルーズさまと恋におちるのがキッドマンさまでございます。
まあねえ、絵にかいたような青春サクセスラブストーリー。
この映画のころはクルーズさまとキッドマンさまってまだ結婚してなかったですよね。
「遥かなる大地へ」のころに結婚したと記憶しておりますが。
で、「アイズ・ワイド・ショット」を完成させて別れると、そんな感じだったですよね。
「遥かなる大地へ」のときも思いましたが、この二人、実に絵になります。
もっと競演してもらいたかったですね。
パパの採点。１０点満点中５点。
なんかねえ、申し訳ないんですが、あまりにもどうでもいい感じでした。
モータースポーツにあまり熱くなれないもんで。ほんますんません。
そういえば、中学生のころに見たマックウイーンさまの「栄光のル・マン」もけっこうどうでもいい感じで見ちゃったな～

妖怪大戦争（２００５）

２００５年「妖怪大戦争」製作委員会作品
監督　三池崇史
主演　神木隆之介、宮迫博之、豊川悦司、栗山千明、近藤正臣、阿部サダヲ、菅原文太

とんでもない豪華キャストで製作された、妖怪映画でございます。
びっくりしてしまうくらいの豪華キャスト。
上記キャスト欄で妖怪を演じているのは、悪玉妖怪では豊川悦司さま、栗山千明さま。
善玉妖怪は近藤正臣さま（ぬらりひょんっぽい）、阿部サダヲさま（河童）。
それ以外にも忌野清志郎さま（これもぬらりひょんみたいなんだけど）、竹中直人さま（油すまし）、ナイナイ岡村さま（小豆あらい）などなど、実に豪華。
家庭の事情で田舎の学校に転校した神木少年。
彼は遊びに行った地元の祭りで「麒麟童子」なんてのに選ばれてしまいます。
この麒麟童子ってのはその地方では伝説の剣を使えることができるなんて言い伝えがあります。
「地域の神社の行事の一環」としてその剣を取りにいった神木ですが、その帰り道、妖怪屋敷に迷い込んでしまいます。
そこで神木は「麒麟童子」として妖怪たちに頼られることになってしまいます。
妖怪たちが言うには、魔人加藤（豊川さま）が降臨し、妖怪たちを拉致し、機械と合成させて自らの配下として魔界制圧を狙っているらしい。
神木少年は妖怪たちのために立ち上がり、魔界の王を狙う魔人加藤と戦うことになります。
思っていたより面白かったです。
もう少しショボイ感じかなと思っておりましたが、思いのほか真剣に作られておりましたので好感がもてました。
妖怪屋敷での、画面いっぱいに妖怪が登場するシーンは圧巻。
妖怪好きにはこたえられないシーンでございました。
パパの採点。１０点満点中７点。
作品を見た直後の印象点は６点でした。
思い出すとじわじわと評価が上がっていくタイプの作品ですね。
途中の妖怪屋敷の描写とか、中盤の妖怪戦争の描写をがんばりすぎたせいでしょうか、エンディングの処理がちょっと雑に感じましたね。
魔人・加藤と麒麟童子との対決以降の描写をもう少し丁寧に作っていただきたかったです。

マトリックス・リローデッド

２００３年アメリカ映画
監督　ラリー・ウォシャウスキー　アンディ・ウォシャウスキー
主演　キアヌ・リーブス、ローレンス・フィッシュバーン、キャリー・アン・モス、ヒューゴ・ウィービング

人気ＳＦＸシリーズの第二弾。
「マトリックス」世界で繰り広げられるスーパーＶＳＦＸ絵巻って感じでございますね。
そもそも我々をとりまく世界のすべてが仮想現実で、実は我々はマシンに管理されたカプセルの中で眠らされているだけで…
そしてそのことに気づいた一部の人間たちがマシンの支配から離れ、現実世界と仮想現実世界の両方でマシンと戦うのである、ってえのが前作のお話。
この世界に現れた「救世主」ネオ＝リーブスさまの活躍が描かれるわけです。
今回は、第二弾・第三弾を並行して製作したようです。
ですから、第二弾の評価が高かったから第三弾の製作が決まったわけではありません。
で、第二弾で物語を終わらせなくていいことがわかっているから、伏線ひきっぱなしだとか謎が提示されるだけ提示されてほったらかしだとか、そういう部分が随所に見られたりします。
物語は、前の続きですよね。
さらにパワーアップした救世主ネオの戦いを描きます。
仮想世界の中での出来事ですから、想像したことは何でも実現することができるって理屈はいいのですが、なんぼなんでも空飛んだらあかんやろ。
途中の「エージェント・スミス」との戦いのシーンもけっこうとんでもないです。
パパの採点。１０点満点中７点。
ＳＦＸはとにかくよくできていて、楽しませてもらえましたが、物語が入り組みすぎ複雑になりすぎて、シリーズ全体の印象を悪くしているように感じるのは私だけでしょうか。
独自の、衝撃的作品世界はよくわかるのですが、「難しいなあ」って印象しか残らなかったです。

友へ・チング

２００１年韓国映画
監督　クァク・キョンテク
主演　ユ・オソン、チャン・ドンゴン、ソ・テファ、チョン・ウンテク、キム・ポギョン

韓国で空前のヒットを飛ばしたという青春群像劇。
すごくよくできていましたし、すごく面白かったです。
しかし…個人的な事情で申し訳ないのですが、私って韓国の人に名前とか覚えるのすごく苦手。
とりあえず物語を理解しなきゃいけないんで、「ジュンホ･貿易商」「ジュンソク・ヤクザ」「ドンス・葬儀屋」「サンテク」なんて書いて見ましたが。
涙ぐましい努力しないとわかんなくなります。本当に。
７０年代から８０年代の釜山の町を舞台に、幼馴染の四人組がそれぞれの人生を歩き、愛・友情そして別れを味わうさまを情感たっぷりに描きます。
やくざの息子のオソン、貿易商の息子のウンテク、葬儀屋の息子のドンゴン、そしてテファの四人は幼馴染。
中学時代こそ別々にすごしましたが、高校で再会した四人は、チング（親友）として共にすごすことになります。
やがて学校を離れることになったオソンとドンゴンは、裏社会に生きることになります。
少しずつ二人の生き方には溝ができてまいりまして、そしてそれが決定的な結末を迎える原因となるわけですね。
少年時代の彼らの描写が新鮮で、とてもよくできております。
それだけに、成人してからの彼らが迎える絶望的で悲しい結末が、より高い悲劇性をもって胸をうちます。
登場人物の一人が残酷な死を迎える場面。
見ていて「嘘やろ～」と思えるほど強烈でございます。
そこに至るシーンのあちこちにも、救いのない暴力描写が描かれます。
こういう徹底的なバイオレンスシーン、昔は抵抗なかったんですが、最近はとても苦手になりました。
現実に起こる事件の陰惨さだとかがとにかく連想されてしまうようになりまして。
これも年とったってことなのでしょうか。
パパの採点。１０点満点中８点。
ノスタルジックな主人公たちの少年時代の映像と、シャープな暴力描写。
そのバランスが実に絶妙でございます。なんか、すごく良い映画見たなあって気持ちが残りました。
大事にしまっておいておきたい作品でございます。

轟轟戦隊ボウケンジャー・ザムービー・最強のプレシャス

２００６年「カブト・ボウケンジャー」製作委員会作品
監督　諸田敏
主演　高橋光臣、斎藤ヤスカ、三上真史、中村知世、末永　遥、出合正幸、斉木しげる、倉田保昭

テレビで人気の「戦隊シリーズ」の映画版でございます。
えっと。私は別に戦隊オタクとかではないのですが、仮面ライダーシリーズはとりあえず見るようにしておりました。
ってのはねえ、私は作家の活動の中で、「文学としての仮面ライダー」とか「文学としてのウルトラマン」ってのをなんとか形にしようと考えていた時期がありましてね。
だもんで一時期、仮面ライダーシリーズは本編・映画版ともにかなりマメにチェックしておりました。
実際に、「仮面ライダーアギト」の、オーパーツと怪人をリンクさせた物語展開ってのがすでに書き始めていた仮面ライダーのお話とかぶってて若干やばかったもんで、作家的にここらの作品は押さえておかないとあかんわけです。
で、仮面ライダーシリーズと併映の戦隊シリーズは自動的に見てしまうわけで。
そのうちに特撮特集とかするかもしれません。
えっと。ボウケンジャーってのは、人類にとって危険な先人たちの遺跡だとかオーパーツだとかを入手し、安全な形で管理しようとする組織のメンバーでございます。
まあ言えばインディジョーンズの戦隊ヒーロー版ですわな。
ではありながら作品冒頭では能天気にプールで遊んでたりします。
地面をぶちやぶって首都圏に突然現れる謎の岩山。
「最強の戦士に最高の『プレシャス』を渡したい」、なんてメッセージが送られてきます。
プレシャスってのは作品の中で出てくる、放っておけば人類に災いをもたらすような遺跡だとかの総称でございます。
かくしてボウケンジャーの面々は、岩山に隠された「プレシャス」を手に入れるため、悪の組織と戦うわけですが、最終局面で岩山を出現させた者は実は「最強の戦士」の遺伝子を手に入れようとしていたエイリアンだったってえオチがつきまして、最後はお約束の「巨大化したエイリアン」と「巨大合体ロボ」の戦いが繰り広げられます。
主人公のボウケンレッド＝高橋さまの父親役で、倉田さまが特別出演。
倉田さまといえばＧメンでございますわね。
実は、私、かつて所属プロダクションが倉田先生といっしょだった時期がありまして、倉田先生とお会いしたことがございます。
だから本当は最初から本当は倉田さまとかじゃなくて倉田先生ってお呼びしないといけない方なんだけど。

でも倉田さま、相変わらずお若い。もっと活躍していただきたいものですね。
パパの採点。１０点満点中７点。
作品そのものはテレビドラマ本編とこれまでの映画版の延長みたいな感じでしたので、採点は６点。
ですが倉田さまがご出演ってことで１ポイント加算です。当然ですわな。

劇場版・仮面ライダーカブト・ゴッドスピードラブ

２００６年「カブト・ボウケンジャー」製作委員会作品
監督　石田秀範
主演　水嶋ヒロ、佐藤祐其、田中唯、森下千里、本田博太郎、武蔵

えっと。前頁で書きましたが、私は仮面ライダーのテレビシリーズと、劇場版はできるだけチェックするようにしていた時期がありました。
仮面ライダーカブトといいますと、かなり入り組んだ物語が魅力的な特撮ドラマでございます。
えっと。そもそも、「カブト」の作品世界での「怪人」は、人間への擬態能力のある「ワーム」と呼ばれるモンスターです。
そのモンスターたちに対抗するのが、「ゼクト」という組織。
であるわけですが、今回の映画は、テレビドラマとは別の時間軸の物語。
数十年前、地球に小惑星が衝突し、都市機能が麻痺して廃墟と化した「旧市街地」が舞台。
怪人たちと戦う「ゼクト」、そこから分裂した「ネオゼクト」が対立しております。
「ゼクト」にも「ネオゼクト」にも仮面ライダーがおりまして、それぞれのグループのライダーたちが戦うわけでございます。
ライダー同士の戦い。昔は考えられなかったですね。「ライダーマン」と「Ｖ３」も確かに戦いましたが、殺し合いまではいかなかったです。
平成版では「仮面ライダーアギト」から同一シリーズ複数ライダーって設定がでてきました。
アギト・ギルス・Ｇ３は戦いましたが、これも殺し合いまではいかなかった。
殺し合いをはじめたのは「仮面ライダー龍騎」からですわな。
本作も「龍騎」同様、殺し合い系物語展開。
さらにドラマとは別設定同キャラによって物語が進行しますので、ドラマの主要キャラがバンバン死んでいきます。
ほとんどの主要キャラが死んでしまう「龍騎」映画版「エピソード・ファイナル」なんかもかなりびっくりしましたが。
この映画も主要キャラ、死ぬわ死ぬわ。
ネタバレになりますが、とりあえずねえ、ドラマに出てるメインキャラのほとんどが死にます。
あらかじめそのおつもりで。
んで、どないなんねんと思って見ていたら、めっちゃ強引にテレビドラマの作品世界につながる大ドンデン返しつき。
唖然でございます。
パパの採点。１０点満点中８点。
敵キャラの最強ライダーに変身する男を演じておられるのがＫ１の武蔵さま。
びっくりしました。とりあえず武蔵さまに１ポイント。
あと、力づくのドンデン返しに１ポイント。甘いかなあ。

ハイランダー２・蘇る戦士

１９９１年イギリス映画
監督　ラッセル・マルケイ
主演　クリストファー・ランバード、ショーン・コネリー、ヴァージニア・マドセン、マイケル・アイアンサイド

クリストファー・ランバードさま主演のＳＦファンタジー「ハイランダー」の続編でございます。
首をはねられない限り死ぬことのない宇宙戦士のランバードさまでございますが、今では人間となって静かに暮らしているわけですね。
そこにやってきたのが、彼らの故郷の星からやってきた暗殺者軍団でございます。
そらあんた、慌てますわな。
人間やねんから。
しかしあわやってところで、やはり戦士のパワーが覚醒するわけでありまして、彼は悪の将軍アイアンサイドさまと戦う決意をするわけでございますね。
で、登場するのが彼に味方する老戦士のコネリーさまでございます。
しかし、なんでショーン・コネリーさまなんでしょう。
ここでショーン・コネリーさまってのがよくわからない。
そのへんがこの作品に奥行きを与えている一方、どのように論じたらいいのかをわかりにくくしているんじゃないかって思います。
あえてコネリーさまである必要はないんじゃないかって思うんですよね、本当に。
なんか出てきて、それほどの活躍もしないまますぐ退場しちゃうし。どうなんでございましょう。
ランバードさまとコネリーさまが、アイアンサイドさまのアジトに突入。
そのときの方法が、不死身を利用したとんでもない方法でございまして、ふむふむ、なんでもありなんやなあって思ってしまいました。
でも首をはねられない限り死なないって設定も、かなり便利なようで不便な設定ですよね。
どうなんだろうって思ってしまいますけど。
パパの採点。１０点満点中７点。
いつも書いておりますように、私は魔法系とか秘剣系とかのＳＦＸファンタジーって実は苦手でございます。
そんな事情であまり高いポイントつけません。
まあ大好きな名優二人（コネリーさまとアイアンサイドさま）が出演しておられますので、とりあえずそれぞれに１ポイントずつ加算って感じです。
それで７点やったらそもそもの点数は５点かい、って言われそうですが。
そうです。五点です。申し訳ありません。

ＤＥＮＧＥＫＩ（電撃）

２００１年アメリカ映画
監督　アンジェイ・バートコウィアク
主演　スティーブン・セガール、ＤＭＸ、アイザイア・ワシントン、アンソニー・アンダーソン

そんなつもりはなかったのですが、この作品を見た当時、オンエア録画順に見た関係で、この作品と次頁でご紹介の「ブラックダイヤモンド」を続けて見てしまいました。
あかんがな。
どちらもプロデューサーは「マトリックス」「ロミオ・マスト・ダイ」のジョエル・シルバーさま。
監督も「ロミオ・マスト・ダイ」のアンジェイ・バートコウィアクさま。
で、「ロミオ・マスト・ダイ」でもいい芝居してたＤＭＸさまとアンソニー・アンダーソンさまがご出演。
主演のジェット・リーさまがセガールさまにかわったくらいで、映画のツボどころを作るスタッフキャストがいっしょじゃないですか。
まあ、見事に作品世界が共通してまして、びっくりしました。
しかしやはり名プロデューサーですね、ジョエル・シルバーさまって。
セガールさま作品のなかではかなりの高ランクに入る作品に仕上げてきました。
セガールさまは刑事でございます。
けっこうムチャクチャやる系。
冒頭の銃撃戦がいい例なんですが、副大統領がテロリストに襲われているところに、ワゴン車で突入し、シークレットサービスの指示とか無視してテロリストと銃撃戦を繰り広げ、いよいよ副大統領が危ないって局面になると、なんと副大統領を橋から川に投げ込み、そのまま銃撃戦を続けるというとんでもない刑事でございます。
そんな刑事がお咎めなしですむはずもなく、開幕早々、彼は犯罪多発地区の署にぶっ飛ばされてしまいます。
セガールさま、その転勤先でもいろいろありまして、偶然麻薬の取引現場に居合わせ、一人には逃げられたもののもう一人を逮捕したと思ったら、そいつは警察のおとり捜査員だったり。
スカタンばっかりするセガールさまってはじめてみました。
ここからドラマが大きく動き出します。
警察内に保管されていた麻薬が、武装した一団に奪われるという事件が発生。
セガールさまはこの事件を追いはじめます。
で、彼は警察内部の人間の犯行ではないかという結論に行き当たります。
そんなセガールさま、例の麻薬取引のときに逃げた男、ＤＭＸさまを捕らえて局面を一気に打開しようと考えます。
セガールさまはＤＭＸさまを追いますが、やがてとんでもない事件の全体像が明らかになってい

きます。
話もけっこうよくできていますし、見せ場もふんだんに用意されています。オススメの一本ってところでございます。
パパの採点。１０点満点中８点。
セガールさまものの中ではほぼ最高傑作の部類に入れていいかと思います。
さすがジョエル・シルバーさま。さすがアンジェイ・バートコウィアクさま。
んで、さすがセガールさま。満喫させていただきましたです。

ブラック・ダイヤモンド

２００３年アメリカ映画
監督　アンジェイ・バートコウィアク
主演　ジェット・リー、ＤＭＸ、アンソニー・アンダーソン、ケリー・フー、ガブリエル・ユニオン

アジア最高峰のアクションスター・ジェット・リーさまと、ヒップホップアーティスト・ＤＭＸさま。
「ロミオ・マスト・ダイ」で競演した二人が再びやってくれております。
ついでに相変わらずやられキャラのおちゃめなギャング、アンソニー・アンダーソンさまもご登場。
前頁でご紹介しました「ＤＥＮＧＥＫＩ（電撃）」とほぼ同じメインスタッフで作られた作品。
というより「ロミオ・マスト・ダイ」のメンバー再結集って感じでしょうか。
ＤＭＸさま、アンソニー・アンダーソンさまらはダイヤモンド強盗のグループでございます。
銀行の貸し金庫を爆破アンドロケットランチャーによる破壊、なんて手法でブチ破る、かなりキレた系の強盗団。
でも銃は使わない、みたいなポリシーがあったりします。
彼らが貸し金庫破りを行ったのはある男からの依頼があったからでありまして、その男は貸し金庫の中にある「黒いダイヤモンド」が狙いだったわけでございます。
その依頼主の前に現れるカンフーの達人の中国人。
おお、いきなり出ましたジェット・リーさま。
冒頭から、道具を使わずにビル屋上から目的階まで降りる、なんてえ神技を見せてくれます。
神技をつかって現れた男は中国警察の捜査官。
彼もまた「黒いダイヤモンド」を追っています。
一方の強盗団は、一度は黒いダイヤの入手に成功しますが、逃げる途中でそのダイヤを地下鉄の線路上にばらまいてしまったりするわけですな。
怒る依頼人。
強盗団たちは自らの命と、誘拐されたＤＭＸさまの娘の命を守るために、別の場所から「黒いダイヤモンド」を入手しなければならなくなります。
で、彼らを追うのはやっぱりジェット・リーさま。
最初は追う・追われるという関係だったわけですが、やがて事件を黒幕を退治するために共闘することになったりします。
実はこの「黒いダイヤモンド」にはとんでもない秘密が隠されておりましてですねえ。
まあその秘密は作品本編でご確認ください。って映画評論家みたいなまとめかたしてみたりして。
ジェット・リーさま相変わらずすごいですね。

唖然としてしまいます。
とりあえずこの人のアクション見るだけで値打ちありまくりの一本。
ＤＭＸさまもかなりがんばっています。この人、「ヒップホップ界のカリスマ」だったんですね。
この作品の予告編でそう紹介されるまで知らなかったですわ。
やっぱり映画好きはいろんな方面にアンテナ張ってないとだめなんだなと思いました。
アンソニー・アンダーソンさま、相変わらずいい味だしてます。今後の活躍に期待、ですね。
パパの採点。１０点満点中８点。
９点つけようかとも思いましたが、私的には「ロミオ・マスト・ダイ」の必殺レントゲン撮影がお気に入りですし、ラストの対決も「ロミオ…」のほうが好きなので、泣く泣く８点でございます。
ただ、限りなく９点に近い８点ってことでお許しいただきたいと思います。

お熱いのがお好き

１９５９年アメリカ映画
監督　ビリー・ワイルダー
主演　マリリン・モンロー、トニー・カーティス、ジャック・レモン

ビリー・ワイルダー監督の傑作ラブコメディでございます。
カーティスさまとレモンさまはバンドマン。
しかしバンドから解雇され、失業してしまいます。
で、仕事を求めてたまたま立ち寄った「危ないあんちゃん」たちのいる倉庫で、ギャングの殺しの現場を目撃してしまいます。
口封じを恐れ、二人は町から脱出。
女性ばっかりのバンドに女装してまぎれ込み、ギャングたちの追及を逃れようとします。
そのバンドのシンガーがモンローさま。
二人はモンローにぞっこん。
女装では彼女を口説けないってことで、カーティスは地元の億万長者に化けてモンローを口説こうとします。
これまでの人生で男にひどいめにあわされ続け、玉の輿にのることを夢見ていたモンローさま、すっかりカーティスさまにほれ込んでしまいます。
一方のレモンさまは、女装姿を女性だと信じ込んだ初老のプレイボーイに気に入られてしまいます。
そんな彼らの目の前に、ボスたちの会議でその土地にやってきた例のギャング一味が現れて…ってな物語。
洒落が効いていて、なかなか楽しめる一編です。
クライマックスのドンデン返しもいい感じ。
それよりも何よりも、この作品の印象を決定づけるのが、エンディングの映画史に残る名セリフ。
このシーンは「映画名セリフ」みたいな本によくとりあげられておりますので、ご存知の方も多いのではないでしょうか。
一応、未見の皆様のためにそのセリフはここでは書きませんが、思わずニヤリとさせられる名セリフでございます。
なんでもこの作品、カーティスさまとレモンさまの女装シーンがエグくならないように、あえてモノクロで撮られたそうです。
それを知ったモンローさまはかなり憤慨したそうですが、やはりモノクロが正解だったと私も思いますです。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにもかくにも、クライマックスにつきますね。

本当に、「いやあ、映画ってほんっとにいいもんですね〜」って言いたくなるような名作でございます。

ビロウ

２００２年アメリカ映画
監督　デビッド・トゥーヒー
主演　マシュー・デイビス、ブルース・グリーンウッド、ホルト・マッキャラニー

怪談っぽいスリラー映画でございます。
第二次大戦中、米軍の潜水艦が難破した友軍の乗組員を救助します。
その中に女性看護師がいたわけでございますね。
海の男たちにとって女性は縁起が悪い存在なんだそうな。
女の顔を見て、開口一番「何てもの拾ったんだ」なんて世界でございます。
少しずつ船内に不穏な空気が流れはじめます。
やがてお約束。怪事件続発。
誰かが仕組んでいる系の事件ではなく、明らかに心霊現象・怪現象。
ポルターガイストだとか、霊が姿を見せるだとか。
女性看護師はこの怪現象とは別に、潜水艦内部にどことなくしっくりいっていない空気を感じます。
どうやら艦長はじめ何人かの乗組員が何かを隠しているようです。
やがて彼女は、艦の指揮をとっているのはそもそも副官だった人で、もともとの艦長は味方の救助活動の途中に戦死していたことが明らかになります。
さあさここからは、ホラーの要素が次第に薄まってまいりまして、もともとの艦長の死の原因だとか、それに関与した人間を絞り込もうとするサスペンス系の物語展開になってまいります。
ここらあたりの流れがちょっと強引かなあ。
オカルトならオカルト、サスペンスならサスペンスとして、しっかり話を進めてくれたらもっと楽しめたのですが、どちらもちょっと中途半端。
結末はサスペンス映画なんだけど、見終わって記憶に残っているシーンはオカルトシーン、なんていうちょっと消化不良の印象が残ってしまったのは残念です。
パパの採点。１０点満点中６点。
題材とか途中の盛り上げとかはけっこうよかったんですが、やはり間口を広げすぎたようでございます。
残念な作品です。

チャイニーズ・ゴースト・ストーリー２

１９９０年香港映画
監督　チン・シュウタン
主演　レスリー・チャン、ジェイ・ウォン、ジャッキー・チェン、ウー・マ

香港製ＳＦＸホラー映画でございます。
好評だった「チャイニーズ・ゴースト・ストーリー」の続編。
作品のほうですが、うむむ。面白くしようとしすぎて、色々な要素を盛り込みすぎて、結局収拾がつかなくなって、わけわからんようになってって作品の典型のような気がします。
前作で幽霊との熱烈な恋をし、結局その幽霊は霊界に帰っていったため、傷心中のチャンさまが主人公です。
彼は幽霊とそっくりな女性ウォンさまと出会いまして、そこでああだこうだ。
傷心の旅を続けるうちに、妖怪退治に巻き込まれてああだこうだ。
チャンさまの所属する一派と対立するグループ（確か皇帝派と僧正派、みたいな対立だったと思うのですが）の抗争みたいなことがあってああだこうだ。
その僧正の正体が実は妖怪だったってえことがわかってああだこうだ。
ってな感じで、話があっちこっちに飛ぶ上に、物語の中心になるのがチャンさまだったりウォンさまだったり、妖怪退治男のチェンさまだったり。
主役の皆さんのスケジュールの関係でこんなになったんでしょうなあ。
物語クライマックスの盛り上げはたいしたものですが、悲しいかな大妖怪の描写がちょっとチープ。
今のＣＧ技術とか使ったら、もっと盛り上がって面白い作品になったと思うのですが。ちょっと残念です。
パパの採点。１０点満点中６点。
いかんせん、物語の展開が強引すぎましたね。ちょっと消化不良気味の印象が残りました。

バッドボーイズ２バッド

２００３年アメリカ映画
監督　マイケル・ベイ
主演　マーティン・ロレンス、ウィル･スミス、ジョー・パントリアーノ

１９９５年に製作された前作「バッドボーイズ」の続編。
ウイル・スミス大先生、相変わらず大暴れ。
普通の警察官かと思いきや、映画クライマックスでは軍隊もどきの人質救出作戦にまで参加しちゃいます。
えらいこっちゃ。とにかくこういう作品は楽しまなきゃ損ですかね。
主人公のスミスさまとロレンスさまは前作同様麻薬課の刑事。
南米ルートの麻薬撲滅に奔走しております。
二人は麻薬ブローカーのワルに目をつけております。
そこに姿を見せる女。
これが実はロレンスさまの妹で、麻薬取締局の潜入捜査官だったわけですな。
さて、そのワルが悪事の隠れ蓑に使っていたのがなんと葬儀屋。
仏さんの内臓をくりぬいて麻薬を詰め、それを運ぶなんて極悪な手口を使っております。
違法な捜査でその証拠をつかみ、警察は一斉摘発に乗り出しますが、ちょうど女性潜入捜査官がワルボスのアジトにいる時間帯とかちあってしまいます。
さらに悪いことに、彼女、捜査官であることがバレてしまいます。
ワルボスは女性捜査官を人質に逃亡。
なんと南米のアジトに彼女を連れていってしまいます。
もちろん国外だもんで、軍の投入はとても問題がある。
しかし彼女の命が危ない。
ロレンスさまとスミスさま、突入人質奪回作戦をたてます。
しかし彼らの悲壮な決意を見ていた麻薬課の同僚たち、二人のために協力するわけですね。
なんせ元グリーンベレーだとかがゴロゴロしている署でございまして。
かくしてにわか特殊部隊による敵アジト突入作戦が決行されるわけでございます。
ここでポリスアクションはいきなりミリタリーアクションになっちゃいまして、とんでもないテンションの銃撃戦なんぞが展開されることになっちゃうわけですね。
とにかく目が離せない。
さすが「パールハーバー」のマイケル・ベイ監督でございます。
とんでもない数の車がスクラップにされるカーアクションもなかなか。
とても楽しめた作品でございました。
パパの採点。
１０点満点中８点。

とても重いテーマ・設定なのに主人公たちがとにかく明るいのがいいですね。
私もこんなふうに明るく、鼻歌まじりで苦難に立ち向かいたいものでございます。

フィフス・エレメント

１９９７年アメリカ・フランス合作
監督　リュック・ベッソン
主演　ブルース・ウィリス、ミラ・ジョヴォビッチ、ゲイリー・オールドマン、イアン・ホルム

リュック・ベッソン監督のＳＦ大作でございます。
とにかくスケールが半端じゃあありません。
未知の生命体の接近によって、滅亡の危機にさらされている２３世紀の地球が舞台。
地球防衛軍の兵士でありながらなぜかタクシーなんぞを運転しているウィリスさまは、謎の少女ジョヴォビッチさまと知り合い、そこから地球を救うために宇宙空間に飛び出すことになります。
とんでもない宇宙都市から宇宙船にのって出発し、エイリアンとは戦わなきゃならないわ、少女の秘密は解き明かさなきゃならないわ、オカマのシンガーは出てくるわ、もうハチャメチャの展開。
それでいて押さえるべき哲学性（って言っていいのかなあ）みたいなところもちゃんと押さえております。
やがて少女ジョヴォビッチさまこそ、火・水・土・風とともに地球を救う五番目の要素（＝フィフス・エレメント）だったってえことがわかりまして、ウィリスさまは彼女の力で地球を救おうと頑張るわけでございます。
とにかくすごくよくできている映画です。
なんかめっちゃ素直に感動してしまいましたがな。
ブルース・ウィリスさまって、なんか地球を救うキャラにあたることが多いですわな。
「アルマゲドン」とか「１２モンキーズ」だとか本作だとか。
そういうキャラなんでしょうか。
しかしクセのあるウィリスさまですから、どの作品もかったるそうで、それはそれでいい感じなんですが。
ラストシーンはほとんど００７みたいでした。
なんか「ロシアより愛をこめて」のテーマ曲が聞こえてきそうな気がしましたです。
そういえば００７シリーズあまりとりあげてないですね。
特集せにゃいけませんなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかくリュック・ベッソンさまって人の才能の豊かさを見せつける内容の作品に仕上がっております。
この作品含めて、ベッソンさま作品をずらっと並べて一気に見てみたいような気がします。

その男、凶暴につき

１９８９年松竹作品
監督　北野　武
主演　ビートたけし、白龍、川上麻衣子

今ではすっかり大巨匠になってしまった「世界のキタノ」の監督デビュー作でございます。
私はかなり早い時期にこの作品を見たような気がしますね。
「ビートたけしが映画監督したんだってえ～」
「へえ、そうなんや。お笑いかいなあ」
「それが刑事もののバイオレンスものらしいで～」
「なんやそれ。オモロいんかいなあ、とりあえず見てみよかあ」
みたいなノリでこの作品を見た人って多かったんじゃないでしょうか。
この作品に関していえば、かなり画面が暗いなあって印象を受けました。
それが作品そのものに陰鬱なムードを与えることに成功しています。
わけわからずに暗い映像を撮ったのではないことは、後の「あの夏、いちばん静かな海」の青っぽいイメージだとか、「座頭市」の乾いた質感をもった画面だとか、「ＢＲＯＴＨＥＲ」のこれまた黄色っぽいざらざらしたイメージの作品などを思い出していただければおわかりいただかるのでないかと思います。
とにかくトップシーンの暗く、それが故に緊張感あふれる映像にノックアウトされてしまいました。
さらにさらに、ありがちな「役者センター」ってアングルの定番を無視したカメラワーク。
これにもびっくりしてしまいました。
なんか犯罪現場のリアリティみたいなものが開始五分以内でビンビン伝わってくる秀逸な演出でございます。
って、私ごときが「世界のキタノ」をベタほめしてもしかたないですが。
他にもバイオレンス描写が素晴らしい。
監督、そうとういろんな映画を見ておられるようですよね。感服の一本でございます。
肝心のストーリーが全然紹介できておりませんが。
ま、たまにはこんなのもいいでしょう。
とにかく北野監督・深作監督、あとジョン・ウー監督とピーター・ハイアムズ監督は、私のフェイバレット・ディレクターでございますので、ついつい熱くなってしまいます。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかく「見て～」って感じの作品でございます。
この作品だけに限らず、他の北野作品も是非ぜひチェックしてみてくださぁい。

沈黙の要塞

１９９４年アメリカ映画
監督　スティーブン・セガール
主演　スティーブン・セガール、マイケル・ケイン、ジョアン・チャン。

クレジット書いててびっくりしましたが、この作品ってセガールさまが監督したんですね。
知らんかった。この映画は、「沈黙の戦艦」見まして、感激しまくりまして、「セガールっていいなあ」みたいなノリで見た作品でございます。
でねえ。
このあとしばらくセガール作品見てないから、内容はそんな感じ。
活躍しないわけじゃないですよ。
セガール大先生、ちゃんと活躍するし、アクションも見せてくれますが…
なにぶん「沈黙の戦艦」がめっちゃ私好みですごく面白く感じられただけに、ちょっと消化不良感じちゃいました。
アラスカで石油会社を経営するのがケインさまでございます。
こいつがかなり悪い奴。
利益のためならなんだってやってやる系のおっさんでございます。
同じセガールさま作品で言いますと、「沈黙の断崖」のクリス・クリストファーソンさまと同じキャラですわな。
友人をそいつらの手の者に殺され、復讐のために立ち上がる不屈の男って設定も「沈黙の断崖」と同じ。
もちろん製作年度でいうとこの「沈黙の要塞」のほうがはるかに前の作品ですから、むしろ逆に「沈黙の断崖」が「沈黙の要塞」をパクった設定で突っ走ったってのが正解だろうと思いますが。
見た後の感想も、正直「沈黙の戦艦」を見たときのような爽快感は感じなかったですから、まあそんな感じでございます。
ちなみに私的セガールのベストは「ＤＥＮＧＥＫＩ」。
第二位は文句なしで「沈黙の戦艦」で、あとはかなり落ちていろんな作品、って評価ですので、この作品だけ採点が辛いってわけではありませんので念のため。
パパの採点。１０点満点中７点。
上記の事情がございまして、あんまり高い点数つけられませんですね。
しかしセガールさまの監督作品ってことで１ポイント追加しておきます。

大空港

１９７０年アメリカ映画
監督　ジョージ・シートン
主演　バート・ランカスター、ディーン・マーティン、ジャクリーン・ビセット

原題は「エアポート」でございます。
そのままでんなあ。
この作品の成功によって、「エアポート７５」「エアポート７７・バミューダからの脱出」「エアポート８０・コンコルド」なんてシリーズが製作されました。
シリーズとはいいながら、登場人物とかはそれぞれ独自のものだし、飛行機を襲う危機もそれぞれ別。
ってことで、独立した別々の作品ではあるんだけど、同じ危機を描いているもんでシリーズ扱いされているって感じでしょうか。
「乱気流・タービュランス」シリーズもほとんどこれと同じ世界を描いていると思うのですが、なんでシリーズには入らないのでしょうか。
映画会社が違うのかな？ひょっとして「タービュランス」にはジョージ・ケネディが出ていないからでしょうか。
物語の舞台は雪のリンカーン国際空港でございます。
空港長はランカスターさま。
物語のもう一方の舞台となる飛行機の機長がマーティンさまでございまして、彼の操縦する飛行機に精神に異常をきたした男が爆弾を持って乗り込んでしまったってえところから物語が展開してまいります。
多様な登場人物が、さまざまなドラマをひっさげてあーだこーだ。
しかし見ていてそんなにウザくない。
描写がきっちりしているためでしょうね。
むしろこの続編の「エアポート７５」なんかのほうが登場人物の描きこみが不足しているのではないかと感じました。
パパの採点。１０点満点で８点。
メインのランカスターさまとマーティンさまが渋すぎます。
もうそれだけで７点ですわな。
あと中学生時代の私のアイドルだったジャクリーン・ビセットさまに１点献上。
ビセットさまの水着グラビア、「ロードショー」誌から切り取って引き出しに隠していたのが思い出されます。

マクベス

１９７１年イギリス映画
監督　ロマン・ポランスキー
主演　ジョン・フィンチ、フランセスカ・アニス

シェイクスピアのあまりにも有名な戯曲の映画化。
ポランスキー監督が妻シャロン・テートを惨殺されたあと、メガホンをとった最初の作品でございます。
やはり「吸血鬼」のころのようなウイットに富んだ作品は撮れるわけもなく、もう、本当に悪魔にとりつかれたかのような血塗られた作品に仕上がっております。
画面の基調色がとにかく赤。
登場人物が死ぬシーンではとにかく血が流れます。
何でもポランスキー監督、この映画の撮影中、「もっと血を…血糊が足りない…」って内容のことをうわごとのように繰り返していたとか。
怖い怖い。
物語はさすがにもうよろしいですよね。
「魔女の予言」と「夫が立身出世することにとりつかれた妻」に翻弄され、結局身を滅ぼしてしまうグラームズの領主・マクベス（フィンチさま）の破滅の物語でございます。
私がマクベスを見たのはこの映画を含めて三回。
「ＮＩＮＡＧＡＷＡ・マクベス」で平幹二郎さまのマクベス。
あとドラマスペシャル（確か「未知なる反乱」ってタイトルだったと思うのですが）の劇中劇で、仲代達也さまが演じたマクベス。
あと、このジョン・フィンチさまのマクベス。
申し訳ないですが、仲代さまのマクベスが一番凄みがありました。
次はこの映画版かな。平さまは悪くはないんだけど、ちょっと違う感じがしましたです。
血塗られたマクベスの末路はあまりにも有名なわけですが、このポランスキー版のマクベスの断末魔は、舞台よりもさらに強烈な趣向がこらしてあって、なんか夢に見るほどインパクトのある場面でありました。
とだけ書いておきましょう。
文芸作品ではありますが、あまりにも強烈な演出がされておりますので、血を見ると気分が悪くなられる人にはお勧めできない作品かと思います。
パパの採点。１０点満点で８点。
まあ私はホラーとかスプラッターとか好きですからね。けっこう楽しんでしまいましたです。

エアポート７５

１９７４年アメリカ映画
監督　ジャック・スマイト
主演　チャールトン・ヘストン、カレン・ブラック、ジョージ・ケネディ

「大空港」の続編。
とはいいながら監督も主演も別のメンバー。
共通点といえば…　やっぱりジョージ・ケネディさまが出ているところくらいでしょうか。
ワシントン発のボーイング機の操縦席に、操縦士が心臓発作で死んでしまって無人となった小型飛行機が衝突。
ボーイングの操縦士はそのときの怪我で目が見えなくなり、副操縦士は機外へ投げ出されてしまいます。
パイロット不在となったボーイング機。
チーフ客室乗務員のブラックさまは、重傷の機長（なんとテレビドラマ「ＦＢＩ」のエフレム・ジンバリスト・ジュニアさま）や管制塔からの指示でなんとか操縦をし、山脈越えとかをするわけです。
ただもちろん着陸はとても無理。
そこで空港スタッフが考えたのが、自動操縦のボーイングと並行して小型機を飛ばし、そこからパイロットを吊ってボーイングに乗り移らせようと、そういう作戦でございます。
一人目のパイロットは操縦席に乗り移る直前に失敗。
そこでボーイング救出作戦を最前線で指揮していたヘストンさまが、ボーイングに乗り移る役目を志願します。
旅客機に乗っている乗客たち（グロリア・スワンソンさまだとかリンダ・ブレアさまだとかがおります）の運命は。
そしてクルーたちの運命は。
豪華キャストで製作された正統派パニック映画。
登場人物が多すぎて、一人ひとりの印象が軽くなっちゃった感じですね。
ヘストンさまとブラックさまの描写がたっぷりすぎて、他の乗客の描写まで手がまわらなかったような感じ。
かといって二人のあーだこーだもしっかり描かれているわけでもないしなあ。ちょっと消化不良っぽかったです。
パパの採点。１０点満点中７点。
題材はいいんですがねえ。間口広げすぎましたでしょうか。
「大空港」にはちょっと届かなかったかもって感じですね。

プレデター２

１９９０年アメリカ映画
監督　スティーブン・ホプキンス
主演　ダニー・グローバー、ゲーリー・ビジー、ルーベン・ブラデス

ジョン・マクティアナン監督がメガホンをとった痛快ＳＦＸアクション巨編の「プレデター」。
ベトナムの奥地で捕虜救出活動をしていたコマンド部隊。任務を遂行しますが、彼らの目の前に、宇宙からやってきた未知の戦闘宇宙人、プレデターが彼らに襲いかかる、ってのが前作のあらすじ。
今回は前作でシュワルツェネッガーさまと大格闘を演じたプレデター君が、近未来のニューヨークに出現。
人間狩りを繰り広げるわけでございます。
今回プレデターに立ち向かうのはニューヨーク市警の警察官ダニー・グローバーさま。
この作品でプレデターは宇宙からやってきた戦闘民族であり、この惑星の戦士を探しにきたなんてえ設定が明らかになります。
クライマックスのグローバーさま対プレデターの対決はめっちゃいけてます。
さらにさらに、ラストのドンデン返し。
こいつはもっといけてました。ここまでやってしまうと、ベトナムでただエイリアンと戦っていた前作がちゃっちく感じてしまいます。
それくらいよくできたクライマックス。
映画前半は前作のイメージひっぱってしまって、あんまり面白くないなあとか思ってしまいましたが、後半はめっちゃいけてました。
本当ですよ～
パパの採点。１０点満点中８点。
ただのエイリアン型モンスターだった前作から、狩猟型エイリアンってえ設定を加えた本作。
こいつが大成功でしたよね。
この成功のおかげでこのあと、「エイリアンＶＳプレデター」なんて映画が製作されることになります。

身代金

１９９６年アメリカ映画
監督　ロン・ハワード
主演　メル・ギブソン、レネ・ルッソ、ゲーリー・シニーズ、デルロイ・リンド

「バックドラフト」「アポロ１３」などの秀作で知られるロン・ハワード監督のサスペンス映画。
ＳＦＸもアクションもない、すんげえ地味な映画でありますが、それでいて男と男の対決を描いている作品。
現代の男と男の対決は、殴り合いでも撃ち合いでもなく、パソコンと携帯電話とテレビを駆使した情報戦だったんですね、ってことを感じさせてくれる作品です。
航空会社の傲慢社長ギブソンさま。
妻はルッソさまでございます。
ある日、彼らの息子が誘拐されまして、身代金を要求するメールが届きます。
警察に知らせずに事態を収拾させようとするギブソンさま。
しかし妻のルッソさまはＦＢＩに通報するべきだと主張し、結局、ルッソさまの意見が通って夫婦は通報することになります。
ギブソンさまは犯人の取引に応じ、身代金を渡そうとしますが、ＦＢＩが失敗して取引は不成立。
犯人一味の一人が射殺されてしまいます。
このことで息子が殺されてしまうだろうと考えたギブソンさまは、用意した身代金を犯人逮捕の懸賞金に切り替えるとテレビの生放送で発表します。
これによって追い詰められたのは犯人グループでございます。
追い詰められた主犯の男は仲間を射殺し、善意の救出者を演じて身代金（＝懸賞金）を手に入れようとしますが…
めっちゃ行き詰まる心理戦でございますよ。
さすが名匠ロン・ハワードでございます。
ＵＳＪの「バックドラフト」のアトラクションで、ロン・ハワードさま本人のインタビューを見ましたが、めっちゃ若い監督さんなんですね。
びっくりしました。もっと他の作品も見たくなりました。
メル・ギブソンさまもけっこういいです。
こんな抑えた系の芝居も上手い人なんだと再認識。
あまり期待せずに見た作品でしたが、けっこう楽しめましたでございますよ。
パパの採点。１０点満点中８点。
犯人グループの主犯が、とってもええ感じで意外でした。
とりあえずここではネタバレさせずに書きましたが、あっちこっちに張られた伏線なんかも見逃

さずにお楽しみいただけましたらいいかと思います。

ディスクロージャー

１９９４年アメリカ映画
監督　バリー・レビンソン
主演　マイケル・ダグラス、デミ・ムーア、ドナルド・サザーランド

カーク・ダグラスさまの息子と、ブルース・ウィリスさまの元奥さんと、キーファー・サザーランドさまのお父さんが競演した映画。
って説明ができてしまいました。
主演の三人、見事に芸能ファミリーですね。
しかし作品そのものはけっこうハード。というか何というか。
ある企業で設計部門（になるんでしょうね。設計プランナーみたいな仕事です）で働くダグラスさま。
彼の職場に新しいボスがやってきます。
それがムーアさま。
ダグラスさまとムーアさまは元恋人同士でございます。
しかし二人が別れたあとにダグラスさまは別の女性と結婚しております。
着任早々、アフターファイブに上司のオフィスに呼び出されるダグラスさま。
なんと彼はそこでムーアさまに誘惑されてしまうわけでございますね。
ダグラスさま、すんでのところで思いとどまり、過ちをおかすことなくムーアさまのオフィスをあとにしますが、これが新しい遺恨の火種となるわけでございまして。
彼はセクハラ男として閑職に追いやられそうになってしまいます。
えらいこっちゃ。彼はセクハラ訴訟に詳しい弁護士に自らの弁護を依頼。
逆にセクハラをされそうになったのは自分自身であった、ということを立証しようとします。
思わぬ証拠がでてきてダグラスさまの無実は証明されるわけですが、まだまだムーアさまの攻撃は続きます。
今度はダグラスさまがダメ社員であるということを立証して解任しようとします。
ダグラスさまが開発しているのはコンピューター内のヴァーチャルイメージの中に入っていけるシステムの開発でございまして、このシステム開発の欠陥をすべてダグラスさまの管理責任のせいにしようとムーアさまが暗躍するわけでございます。
なかなかうまく作られている社会派ドラマであります。
ただ、バーチャルシステムのくだりって必要だったのかなあとか考えてしまいます。
ここらの展開なしでも十分に「セクハラ＆パワーハラスメントもの」としてドラマをひっぱっていくことが可能だったと思うのですが…
パパの採点。１０点満点中８点。
デミ・ムーアさまってめっきり悪役。
きれいな人だけに悪い人をやらせるととっても怖いですね。

美しい女には何とやら。くわばらくわばら。

フィラデルフィア

１９９３年アメリカ映画
監督　ジョナサン・デミ
主演　トム・ハンクス、デンゼル・ワシントン、ジェイソン・ロバーズ、アントニオ・バンデラス

名優としての評価を欲しいままにしておりますトム・ハンクスさまの社会派ドラマ。
ゲイとエイズ。
その差別という問題を真正面から描いた秀作でございます。
主演のトム・ハンクスさまはこの作品でアカデミー主演男優賞を受賞しました。
めっちゃ納得できる受賞。
それくらい鬼気迫る、素晴らしい演技をみせてくれます。
ニューヨークの法律事務所に勤める若手弁護士のハンクスさま。
彼は事務所内でもここぞというところで大事な仕事を任されるような有能な男。
しかし彼には事務所に内緒にしている事実がありました。
彼はゲイで、エイズに感染しております。
病状はかなり深刻。
すでに潜伏期間を過ぎ、肉腫なんぞがでてきております。
ハンクスさまは突如「業務遂行に支障がある」との理由で一方的に事務所から解雇を宣告されてしまいます。
ハンクスさま、自分を解雇した事務所と戦うわけですな。
彼が頼ったのは自分の仇敵、人権派の黒人弁護士ワシントンさまでございます。
この裁判を通して、彼らゲイがどのようなものなのか、エイズとはどのようなものなのか、そしてそれを差別するという行為がどのようなものなのかが次第に明らかになっていきます。
中盤のサスペンスフルなゲイへの偏見を明らかにする場面は実に秀逸。
私、以前、このパブーさんでも公開している「メイニア」って小説の執筆を通してゲイの人たちと交流をもちまして、ゲイの皆様には理解があるつもりだったんですが、それでもやはりけっこう強烈な表現とかありましたね。
まだまだ理解足りなかったかも。
ラストで描かれる、あまりにもせつない場面は、ゲイであるとかないとか、ゲイに理解があるとかないとかを通りこして、お見事。
ハンクスさまの恋人役のアントニオ・バンデラスさまの抑えた演技が印象に残りました。
パパの採点。１０点満点中９点。
かなり重い映画でしたが、見る価値は十分にある映画だと思います。
傑作と評価させていただきます。
ブルース・スプリングスティーンさまの主題歌も実にせつなくてよかったですね。

恋におちたら…

１９９３年アメリカ映画
監督　ジョン・マクノートン
主演　ロバート・デ・ニーロ、ユマ・サーマン、ビル・マーレー

天下の名優、ロバート・デ・ニーロさまとビル・マーレーさまの丁丁発止の演技合戦が楽しめる作品。
やはり二人とも巧いですね～
デ・ニーロさまは臆病な刑事。
それ故に自分の将来に不安を感じていたりします。
ある殺人事件現場近くでふと立ち寄ったドラッグストア。
何やら店員の様子がおかしい。
それもそのはず、デ・ニーロさまに応対していたのは店に入った強盗だったわけです。
強盗は店の従業員を殺し、客のマーレーを人質にとっておりました。
デ・ニーロさまはその強盗を説得して逃がします。
本当は臆病で毅然とした行動がとれなかっただけだったのですが、マーレーさまは人質の安全を優先した行動だとデ・ニーロさまを高く評価します。
このマーレーさま、実はマフィアと深い関わりのある、ナイトクラブのオーナーだったわけです。
マーレーさまはお礼とばかりに、デ・ニーロさまのもとに自分の情婦サーマンさまを送り込みます。
このデ・ニーロさまとサーマンさまが本当に恋におちてしまったあたりから、物語がややこしくなってくるわけですね。
果たして二人の恋の行方はどうなりますでしょうか。
とにかくデ・ニーロさまとマーレーさまがいいです。
この名優二人にからむサーマンさまがちょっとかわいそうですね。
悪くはないんですが、印象か明らかに薄いのはしかたないところでしょうか。
パパの採点。１０点満点中７点。
クライマックスの落とし方が少し強引だったでしょうか。
そのわりには後味が良いですね。
なかなかの結末。
しかしやはりユマ・サーマンさまの存在感が気になります。良い作品だっただけにちょい残念ですね。

光る眼（１９９５）

１９９５年アメリカ映画
監督　ジョン・カーペンター
主演　クリストファー・リーブ、カースティ・アレイ、リンダ・コズラウスキー、マーク・ハミル、マイケル・パレ

今は亡きクリストファー・リーブさま主演のＳＦ作品でございます。
ジョン・カーペンター監督による、ＳＦ小説の古典的名作のリメイク作品。
カリフォルニアの田舎町で、突然住民が昏睡状態に陥る事件が発生します。
数時間後に、何事もなかったようにその昏睡は覚めるわけですが、不思議なことに村の女性十人が同時に妊娠。
彼女たちは１０ヶ月後の同時間、ほぼ同時に出産します。
子供たちはすくすくと成長。
十歳になりました。
ところがこの子供たち、不思議な力を持っていたわけでございます。
テレパシーだとかサイコキネシスだとか。
子供たちはテレパシーで交感しながらとんでもない知識を身につけていきます。
やがて彼らは言葉さえ交わすことなく、ある計画を実行しようと考えます。
こどものうち一人の父親がリーブさま。母親がアレイさま。
彼らの特殊能力に気づき、彼らを「殺す」べきか苦悩する神父がハミルさま。
なかなかの豪華キャストでございます。
クリストファー・リーブさま、けっこういいです。
落馬事故で半身不随になる直前の作品がこの作品。
リーブさまの遺作となったのはヒッチコック作品のリメイク「裏窓」ですが、最後の「元気な姿」を見せてくれたのはこの作品が最後になります。
改めてご冥福をお祈りしたいと思います。
パパの採点。１０点満点中６点。
ジョン・カーペンター作品にしてはちょっとあっさりしておりますね。
もうちょっと強烈な作品に仕上げることもできたのでしょうが。
ちょくら残念でしたね。
残虐シーンとか、あるにはあるんですが、ちょっとおとなしかったような気もします。

電車男

２００５年「電車男」製作委員会作品
監督　村上正典
主演　山田孝之、中谷美紀、国仲涼子、瑛太、佐々木蔵之助、木村多江、岡田義徳

インターネットのブログが話題になり、やがてそれが本になり、映画化され、ドラマ化され…
うらやましい限りですね。
この映画紹介本とかもどっかの出版社さん、出版してくれないでしょうか。
酔っ払い（大杉 蓮さま）にからまれていた女性「エルメスさん（中谷さま）」に恋をしたアニメ＆フィギアオタクの「電車男（山田さま）」。
電車男は自分の恋愛エピソードをインターネットのブログに書き連ねていきます。
当然、そのブログの向こうには何十・何千・何万の読者（ユーザー）がいるわけでございまして。
それが看護師国仲さまだったり、ひきこもりの青年瑛太さまだったり、それぞれがネットで同じ「電車男」を応援していたことさえしらなかった会話のない夫婦（佐々木さま・木村さま）だったり、あからさまにもてそうにないオタク青年岡田さまだったり。
一対多のコミュニケーションの代表格みたいなネットブログという題材を取り扱うわけですから、映画もドラマも、私が大好きなスプリットスクリーンの手法が多用されております。
しかしですなあ、クライマックスでネットユーザーのみんなが電車男をはげますシーン。
ちょうど駅のホームの場面でしたが、このイメージ映像が微妙に「ちょっと違う」って思ってしまいました。
やっぱりスプリットスクリーンとか使って処理するべきではなかったのかと思いましたね。
ネットの世界の出来事だもんで、それをリアルなイメージとして処理されると、ちょっくら面食らってしまいます。
このシーンだけ、映画全体の中で浮いてたような気がします。
ラストシーン、秋葉原のネオンサインがブログの返信メッセージみたいになる描写は秀逸でございました。
しかしそれだけに、駅ホームのイメージシーンが気になってしまいます。残念です。
パパの採点。１０点満点中８点。
「電車男」原作も、ドラマも、あえてスルーしておりましたが、この映画版に関してはけっこう面白く、楽しめました。
原作・ドラマともに、改めてチェックしてみたいと思っております。

コンドル

１９７５年アメリカ映画
監督　シドニー・ポラック
主演　ロバート・レッドフォード、マックス・フォン・シドウ、フェイ・ダナウエイ、ジョン・ハウスマン

当時人気絶頂で、「お前なんでこんなええ男の役ばっかりすんねん、腹立つおっさんやのう」と私がライバル心むきだしにして敵視しておりましたロバート・レッドフォードさま主演のスパイアクションでございます。
そういえばレッドフォードさまの映画ってあまり見てないんですよね。
「スティング」「明日に向かって撃て」くらいでしょうか。
他に見たのって、もうちょっとお年を召されてから「大統領の陰謀」とか「スニーカーズ」とか、さらにお年を召されてからの「幸福の選択」くらいだと思います。
なんかねえ、キャラが今でいうリチャード・ギア風のええ男ざんしょ？
ちょっと受け付けない系の役者さんでございまして。
まあ、あまり気はすすまないけど、シドニー・ポラック監督だし、見てみようかなって思って見始めたら面白いのなんの。
主人公のレッドフォードさまはＣＩＡの職員。
コードネームはコンドル。
ＣＩＡのエージェントとは書かずに職員と書いたところがミソなんですが。
この人の所属する部署は「図書課」みたいなところで、推理小説を読みあさり、そのプロットとかトリックとかを書き出してデータベース化していく、みたいなところでございます。
ある日、彼の所属する「図書課」のオフィスに機関銃を持った男たちが乱入。
たまたま裏口から外に出ていて、サンドイッチなんぞを買ってたレッドフォードさま一人が難を逃れます。
彼は即座にＣＩＡ本部に報告。
彼を保護しに本部からやってきた管理職の男にいきなり発砲されます。
ようやくＣＩＡから狙われていることに気づいたレッドフォードさま、逃げ込んだ店でたまたま見かけた女流カメラマン・ダナウェイさまを拉致（ですよね、この状況は）して彼女の家に身を隠します。
事件の背後を調べるレッドフォードさま。
やがてダナウェイさまも彼に協力するようになりまして、二人はＣＩＡの秘密を調べはじめるわけです。
なかなかのサスペンス。
ハラハラドキドキ。
ごっつい面白い映画でした。こんなの見逃してたんだなあ。

やっぱり役者の好き嫌いで映画選んでちゃあきませんわなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
レッドフォードさまを追うフリーの殺し屋、マックス・フォン・シドウさまがめっちゃええ感じ。
名優ですよね。この人の存在感に１点献上です。

００７ドクターノオ

１９６２年イギリス映画
監督　テレンス・ヤング
主演　ショーン・コネリー、ジョセフ・ワイズマン、ウルスラ・アンドレス

ここから００７シリーズを順にご紹介していきましょうね。
一部ご紹介済みの作品もありますが、紹介済みはとばしていきますので、ダブリはないと思います。
手元の資料によりますと、ご紹介しているのは「ゴールデンアイ」と「トゥモローネバーダイ」ですよね。
さて００７シリーズの記念すべき第一作のご紹介。
この一本でショーン・コネリーは一躍大スターになりまして、同時に「ボンド役者」としての呪縛にとりつかれることにもなってしまいました。
それだけに大変面白い作品でございます。
作品としては、おそらく第二作の「ロシアより愛をこめて」のほうが評価が高いと思います。
ロシアが舞台で、どちらかといえば硬質で、冷たい作風の第二作に比べ、この作品はエキゾチックで開放的っぽいです。
ウルスラ・アンドレスさまもビキニ姿で画面をうろうろしてくれますし、舞台も南方の島だし。
フロリダから発射されたロケットの軌道が、何者かが発した電波によって狂わされてしまいます。
秘密指令を受けた００７＝ジェームス・ボンド＝コネリーさまは、ジャマイカからノオ博士の秘密基地に潜入します…
えっと。
かのブルース・リーさまの「燃えよドラゴン」が封切られたとき、「なんや『ドクターノオ』の空手版やないか」みたいな批判をされた方がおられたそうですが、そういう意味ではこの作品は「燃えよドラゴン」のルーツみたいな作品であることは間違いないですね。
パパの採点。１０点満点中７点。
００７シリーズは他に面白い作品、個人的に好きな作品がいっぱいあるので、第一作のこの作品は基準点としてあえて評価低めにしておきましょう。

００７ロシアより愛をこめて

１９６３年イギリス映画
監督　テレンス・ヤング
主演　ショーン・コネリー、ダニエラ・ビアンキ、ロバート・ショウ、ロッテ・レーニア

００７シリーズを集中してとりあげます。
００７シリーズの最高傑作として推す人も多い、シリーズ初期代表作。
マット・モンローさまの主題歌もめっちゃええ感じ。
コネリーさまもにやけたいやらしい感じで、雰囲気満点です。
悪の犯罪組織スペクター。彼らは自分たちの仕事の邪魔になるボンド＝コネリーさまを殺してしまおうと、暗号解読機とロシア人美女を餌にして、彼を誘い出します。
そこに待ち受けていたのは殺し屋ショウさまでございます。
いまや伝説ともいえるオリエント急行車内での息詰まる対決。
すげえすげえ。
一難去ってまた一難。次にボンドさんの前に立ちふさがるのは、ショウさまの上司の女悪党レーニアさま。
すげえすげえ。
今回はアタッシュケースに秘密の武器だとかをたっぷり詰め込んでの大アクション。
この秘密のアタッシュケースが評判よかったのでしょうか、この次の作品である「ゴールドフィンガー」では秘密武器満載の「アレ」が登場します。
まあこの話は次頁で。
ダニエラ・ビアンキさまむっちゃきれい。
私は歴代ボンドガールの中ではこのダニエラ・ビアンキさまが一番きれいだと思っているのですが、皆様の評価はいかがでしょうか。
って書きながら、「死ぬのは奴らだ」のジェーン・セイモアさまも捨てがたかったりします。
まあこのへんがベスト１・２なのはほとんどの方共通だと思うのですが。
色っぽい系だとクロディーヌ・オージェさまかウルスラ・アンドレスさまだろうけど。
パパの採点。１０点満点中９点。
この作品に９点をつけずしてどの作品に９点をつければいいのでしょうって感じです。
主人公コネリーさまにボンドガールはダニエラ・ビアンキさま。
ワル役にロバート・ショウさまとロッテ・レーニアさま。
最強でございますわな。未見の方は是非ごらんくださいまし。面白いですよん。

００７ゴールドフィンガー

１９６４年イギリス映画
監督　ガイ・ハミルトン
主演　ショーン・コネリー、オナー・ブラックマン、ゲルト・フレーペ、シャーリー・イートン、ハロルド坂田

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズのなかでも、「ロシアより愛をこめて」と並んで評価の高い、シリーズ前期の傑作でございます。
金を扱う(「かね」じゃなくて「きん」と読んでください。金貸しじゃありません)悪玉ゴールドフィンガー＝フレーペさま。
彼はアメリカ政府の保有する金塊を放射能汚染して価値をなくし、自分の保有する金の価格をつりあげようと画策しております。
彼と対決するためにやってきたのがボンド＝コネリーさまですな。
フレーペさま、世界中の金の価格を操作しようとする悪玉の割にはやることがせこい。
女を使ってイカサマトランプ博打をしてたりします。
コネリーボンドさま、フレーペさま相手にゴルフでイカサマ。
どっちもせこい。国際的スパイと放射能を使って悪事を働くような大悪玉との戦いとは思えません。
コネリーさまはフレーペさまの手下の美女、ブラックマンさまをたぶらかし、金塊の放射能汚染を阻止しようとします。
果たして勝負の決着やいかに。
００７シリーズってね、悪玉が魅力的なわりに、その悪玉がやられるシーンがちょいと弱いように感じます。
本作も、もうちょっとラストが盛り上がるかなとか思っていたのですが、ミスター・ゴールドフィンガー、想像していたよりあっさりした断末魔だったので、若干残念に思った記憶があります。
ゴールドフィンガーよりも、その手下のハロルド坂田さまがめっちゃええ個性出してはりました。
本作では、のちに伝説となる「ボンドカー」、アストン・マーチンが登場。
これ、さまざまな仕掛けをほどこした車でございます。
この「ボンドカー」の登場が、後のシリーズの方向性を決定づけたといってもいいかと思います。
「ロシアより愛をこめて」ではいささかショボかった秘密兵器（ここではまだ秘密武器ですかね）も徐々にスケールアップ。
これがさらにスケールアップして次作に続くわけでございますね。

パパの採点。１０点満点中７点。
私的にはさすがに「ロシアより愛をこめて」には及びませんですね。しかし傑作であることには違いないですよ。

００７サンダーボール作戦

１９６５年イギリス映画
監督　テレンス・ヤング
主演　ショーン・コネリー、クロディーヌ・オージェ、アドルフォ・チェリ

００７シリーズのご紹介でございます。
第二作「ロシアより愛をこめて」で登場した悪の組織「スペクター」。
「ゴールドフィンガー」をはさんで、またまた登場。
ここからしばらく、ボンド対スペクターの戦いが続くわけですね。
スペクターの大ボス、プロフェルドは本作では後ろ姿アンド声での出演。
プロフェルドの代わりにボンドと対決するのは、片目の悪人、ラルゴ＝チェリさま。
この人がなかなかの好演でございます。
作品の舞台はジャマイカ。
スペクターが強奪した核兵器を奪還するのが今回のボンドの使命でございます。
冒頭いきなりやってくれまっせ。
ショルダータイプのロケットなんぞでいきなり空を飛ぶボンド。
特撮ではなく、本当に空を飛んでるのがすごい。
えっと、ロサンゼルスオリンピック（だったかな）の開会式で出てきた、背負うジェットロケットみたいなやつの原型でございます。
１９６５年時点であのロケットエンジンができていたのが驚きですよね。
その他にも、舞台がジャマイカだけあって、水中系の秘密兵器がどんどん登場します。
超小型の酸素ボンベなんぞは、ようやくつい最近実用化されたような気がしますが。
ボンドガールはクロディーヌ・オージェさま。
第一作のウルスラ・アンドレスさま同様、水着姿しか思い出さないのは、やはり舞台がジャマイカだからでしょうか。
パパの採点。１０点満点中７点。
シリーズが進むにつれ、徐々にパワーダウンするのは否定できないところですね。

００７は二度死ぬ

１９６７年イギリス映画
監督　ルイス・ギルバート
主演　ショーン・コネリー、浜　美枝、ドナルド・プレザンス、丹波哲郎

００７シリーズのご紹介。
シリーズ第五作はなんと日本が舞台。
敵役はやはり悪の組織スペクターでございます。
米ソ両国を相互不信に追い込み、直接対決させようとするスペクター。
スペクターの日本基地にボンドが侵入、スパイ組織の日本支部のメンバー、丹波哲郎さま・浜美枝さまらとともに、スペクター日本基地を壊滅させるべく大活躍するわけでございます。
本作での悪の大ボス、プロフェルドを演ずるのは、ドナルド・プレザンスさま。
片目に醜い傷跡のある悪のボスを怪演でございます。
スペクターの基地に侵入する場面で、ボンド＝コネリーさまが百姓の格好をする場面がありました。
コネリーって身長あるし、鼻高いし、目とか青いし。
そんな人がお百姓ファッションするわけですから、似合わない似合わない。
お百姓さんファッションって、さすがのショーン・コネリーさまをもダサダサオヤジにしてしまいました。
恐るべしお百姓さんファッションパワー。
浜　美枝様の海女ファッションはそれなりにかっこよかったんですが。これってどういうことなんやろ。
タイトルの「００７は二度死ぬ」（ユー・オンリー・リブ・トゥワイス）ってのは、スペクターを油断させるために冒頭でボンドが死んでしまったと新聞発表するところからきております。
いきなりボンドが死ぬなんてびっくりしましたが、冒頭でボンドが死ぬわけないわけですよね。
それでもびっくりした衝撃のオープニングでございましたです。
パパの採点。１０点満点中６点。
なんかずるずる点数がさがっていきますなあ。
秘密兵器の登場とか、それなりに面白かったんですが、ちょっとつらかったですなあ。
「ロシアより愛をこめて」だとか「ゴールドフィンガー」なんかと比べると、パワー不足は否定できません。残念。
作品の出来を証明するかのように、主演のショーン・コネリーさまはこの作品で一旦降板いたします。

女王陛下の００７

１９６９年イギリス映画
監督　ピーター・ハント
主演　ジョージ・レイゼンビー、ダイアナ・リグ、テリー・サバラス

００７シリーズのご紹介を続けます。
００７シリーズの第６作。
「かつらをつけて００７を演じ続けるのがきつくなった」なんて名言を残し、ショーン・コネリーさまはボンド役を降板。
そこで起用された二代目ボンドがジョージ・レイゼンビーさまでございます。
なんか若くて溌剌とした感じがええなあ、と思われたのは前半だけ。
どうも貫禄に欠けます。
若くて溌剌とした感じってことは、裏を返せば頼りなく、役不足っていうふうにも見えるわけでございまして。
例によって今回の敵もスペクター。
今回プロフェルドを演ずるのはかのミスター・コジャックことテリー・サバラスさまでございます。
この人、コジャック刑事役と出会うまではとにかく悪役ばっかりでしたよね。
もう、とにかく円熟した悪役っぷりでございます。
スペクターは、スイスの山中に細菌工場を建設しております。
レイゼンビーさまはスキーだとかボブスレーだとかを駆使しながらプロフェルドを追い込み、やがて細菌工場を壊滅に追い込むわけでございます。
この作品でボンド君、なんと結婚してしまいます。
どういうこっちゃ。
ジェームス・ボンドが結婚しちゃああかんでしょう。
もっとも原作でも別の作品（「カジノ・ロワイヤル」だったと思います）で結婚したと記憶してるんですが。
まあどっちにしても結婚が似合うボンドなんてイマイチ。
当然のようにレイゼンビーさまはこの作品一作でお役御免でございます。
この後、レイゼンビーさまは作品に恵まれず、鳴かず飛ばずの役者人生を送られたのは皆様ご存知のとおりでございます。
パパの採点。１０点満点で６点。
やっぱりボンド役者が弱いと、評価も自動的に下がりますですね。残念ですね～

００７ダイヤモンドは永遠に

１９７１年イギリス映画
監督　ガイ・ハミルトン
主演　ショーン・コネリー、ジル・セント・ジョン、チャールズ・グレイ

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第７作。
ジョージ・レイゼンビーさまがあまりにもパシャパシャだったので、ショーン・コネリーさまが再び起用された第７弾であります。
しかしこの主役交代劇だけを見ても、いかにこのシリーズ、この時期の舞台裏がドタバタしていたかが容易に想像がつきますね。
今回も宿敵スペクターのボス、プロフェルドが登場します。
とりあえず「スペクター」シリーズはこの作品で完結。
ここから先はピンの悪役が毎回登場することになります。
今回、プロフェルドを演ずるのはチャールズ・グレイさま。
頭に毛が生えてるじゃん。禿げたり毛を生やしたり、傷がついてたりついていなかったり。忙しい首領じゃ。
コネリーさまボンドの今回の使命は、ダイヤの密輸組織を探るというもの。
核だとか怪電波だとか細菌兵器だとか、ごっつい事件・ごっつい悪玉とばっかり戦ってきたボンドさんですが、ダイヤの密輸みたいな経済事件まで調査するんだ。
忙しい人やなあ、って思っていたら、密輸組織を影で操っていたのがかのスペクターで、ボスのプロフェルドは世界征服を狙ってワシントンを爆破させようとしている、なんてとんでもない事実がわかったり。
いぐわあああああ。どないやねん。
ちょっと力技がすぎるような気がしますよね。
そもそもボンドが密輸組織に潜入するなんて設定がかなり強引。
ま、いいけど。
ボンド・ガールはジル・セント・ジョンさまでございます。
残念ながらちょいと存在感うすいです。
ワルのチャールズ・グレイさまも悪くはないんだけど、ドナルド・プレザンスさま～テリー・サバラスさまのあとのプロフェルド役はちょっと荷が重過ぎましたでしょうか。
コネリーさまも悪くはないんですが、とかく作品全体にドタバタジタバタした空気が流れまくっておりまして、イマイチ乗れなかったですね。
パパの採点。１０点満点中７点。
コネリーさま再登板アンド最終作（もっともこのあと「ネバーセイネバーアゲイン」なんて番外編もありましたが）ということで、１点献上でございます。

００７死ぬのは奴らだ

１９７３年イギリス映画
監督　ガイ・ハミルトン
主演　ロジャー・ムーア、ヤフェット・コットー、ジェーン・シーモア

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第８作。
現時点でシリーズ最多主演のボンド役者、ロジャー・ムーアさまが登場した記念すべき作品です。
「ロシアより愛をこめて」「ゴールドフィンガー」を初期の傑作とするなら、中期（ロジャー・ムーア主演時期）の傑作といえばこの作品からの三本（「死ぬのは奴らだ」「黄金銃を持つ男」「私を愛したスパイ」の三作）ではないかと私は勝手に思っております。
ボンド＝ムーアさまの同僚スパイが次々と殺されていきます。
ムーアさまはＣＩＡの旧友と調査を開始します。
やがて世界中の麻薬を牛耳ろうとしているアフリカの麻薬王カナンガ＝コットーさまが黒幕として浮かびあがり、ムーアさまと対決するわけでございますね。
例によって秘密兵器満載。
それでいてムーアさま後期の作品のような「まず秘密兵器の設定ありき」みたいな筋立てにはなってはおらず、ぎりぎりのリアリティも保てております。
ボンドガールのジェーン・シーモアさまは私的にはダニエラ・ビアンキさまと並ぶ過去最強のかわいい系美女。
敵役のヤフェット・コットーさまもがんばっております。
ブードゥー教の呪術、みたいなオカルティックな設定もあり。私的にはかなり好きな作品ざます～
パパの採点。１０点満点中８点。
この映画の主題歌を歌っているのはかのポール・マッカートニーさま。
この主題歌もめっちゃ好きでした。
ＮＨＫのＭＴＶ番組を録音して、歌詞覚えた思い出があります。とりあえず主題歌に１点献上ですね。

００７黄金銃をもつ男

１９７４年イギリス映画
監督　ガイ・ハミルトン
主演　ロジャー・ムーア、クリストファー・リー、ブリット・エクランド、モード・アダムス

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第９作。
ロジャー・ムーアさまのジェームス・ボンド像を決定づけた作品でございますね。
今回の敵役はＫＧＢやマフィアから殺しを請け負う殺し屋スカラマンガ＝リーさまでございます。
リーさまは黄金の銃を持っております。だから黄金銃ね。
この銃がすごい。ボディチェックとかされても銃が出てこない。
それもそのはず、この銃って万年筆とカフスボタンとライターを組み合わせた銃でございまして。
この殺し屋リーさまとムーアさまが戦うわけですな。
リーさまを追うムーアさま、少林寺の道場に潜入して模範試合を戦ったりします。
ここらは「燃えよドラゴン」あたりのカンフー映画の影響でしょうか。
逃げるリーさま、追うボンド。
３６０度キリモミジャンプみたいなカーチェイスしたり、リーさまの車が翼を装着するだけで飛行機に変わったり。
クライマックスはリーさまとムーアさまの決闘。
すげえすげえ。
ボンドガールは金髪かわいい系ギャルのブリット・エクランドさまと、黒髪美人系レディのモード・アダムスさま。
エクランドさまは物語後半でリーさまに誘拐され、リーさまのアジトでビキニ姿でうろうろしてくれます。
リーさま曰く、「水着姿にするのは武器を隠せなくするため」だそうな。
ちょっとムチャクチャな理屈ではありますが、ちょっと嬉しい設定ですなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
００７シリーズはやはり魅力的な悪役でございます。
ドラキュラ映画で鍛え上げられた悪役の空気、めっちゃ堪能させていただきました。

００７私を愛したスパイ

１９７７年イギリス映画
監督　ルイス・ギルバート
主演　ロジャー・ムーア、バーバラ・バック、クルト・ユルゲンス、リチャード・キール

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１０作。
えっとねえ、まあここらの作品が限度でございます。
私的に許せるの。これ以降の作品になってまいりますとねえ、ちょっとついていけませんでございます。
ここから先はロジャー・ムーアさま版の００７がしばらく続きまして、ティモシー・ダルトンさま、ピアース・プロスナンさま、そしてダニエル・クレイグさまとニューボンドが登場しますが、私的にお気に入りの作品は、プロスナン版まで出てこなくなってしまいます。
米ソの潜水艦が相次いで行方不明になります。
そうなりますと、冷戦状況の両国にはなんとなく嫌な空気が流れはじめるものでございまして。
そういえばこういう設定、平成ゴジラにもありましたなあ。
ともあれ、調査じゃっちゅうことになりまして、イギリスの００７＝ボンド＝ムーアさまと、ソ連の女スパイ＝バックさまとが協力しあって調査することになるわけでございます。
今回の敵役は潜水艦を使って世界征服を企む男、ユルゲンスさま。
おお、戦争映画のドイツ軍将校といえばこの人あり、みたいな名優でございますね。
なかなか重厚な役者さん使うんだなあ、って思って見ておりました。
悪党ユルゲンスさまは「潜水艦を捕獲する巨大戦艦」みたいな船で潜水艦をゲットしておったわけでございます。
で、ムーアさまとバックさま、その船に乗り込んでユルゲンスさまと戦うわけでございます。
さあここで怪優リチャード・キールさまの登場ざんす。
キールさま、ええとこぜんぶかっさらい。
ユルゲンス大先生、おいしいところぜんぶもっていかれてしまって、めっちゃかわいそう。
名キャラクター「ジョーズ」を生んだ作品として記憶される作品になってしまったのは名優ユルゲンスさまとしては残念至極でございましょう。
パパの採点。１０点満点中８点。
かなり好きな作品ですが、とにかくリチャード・キールさまがおいしすぎます。
ある意味バーバラ・バックさまさえも食われた感がありますね。
あのキャラは強烈すぎるので、しかたないところでしょうか。

００７ムーンレイカー

１９７９年イギリス映画
監督　ルイス・ギルバート
主演　ロジャー・ムーア、マイケル・ロンズデール、ロイス・チャイルズ、リチャード・キール

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１１作。
とにかく賛否両論のシリーズ異色の作品、とだけ言っておきましょう。
敵役のキレ度はますますヒートアップ。
今回のワル、ロンズデールさまは地球上に毒ガスを撒き散らして人類を全滅させ、選ばれた者たちだけで新世界を建設しようなんてヘンテコなおっさんでございます。
事件の発端がスペースシャトルだし、タイトルが「ムーンレイカー」だったのでちょっと嫌な予感がしましたが、そんな予感的中でございます。
そもそもですねえ、イアン・フレミングの原作小説には「ムーンレイカー」とか「ユア・アイズ・オンリー（文庫版では「読後焼却すべし」ってタイトルでしたよね、確か）」とかの作品がありまして、一応フレミング原作ってことにはなるかと思いますが、そういう意味では「最も原作を逸脱した作品」がこの「ムーンレイカー」ではないかと思います。
だって宇宙空間でレーザー光線で戦ったりするんだもん。
スターウォーズちゃうっちゅうねん。
物語が宇宙に飛んでいっちゃった時点でドン引きでございます。
ちょっとちゃうやろって思いながら、それでもついつい見てしまいました。
悪党ジョーズも相変わらず大活躍。
ではありますが、やはり前作のジョーズ像のほうが私的には好きでございます。
ちょっと間口を広げすぎましたかね。
パパの採点。１０点満点中６点。
やはりこの作品の評価を低くする人が多いですね。
やっぱり宇宙に行ったらあきません。
この作品の暴走の反省からか、次作ではメカニックアクションとかあからさまな特撮が控えめになります。
ってことはやはりこの作品ってイマイチだったってことを製作者側が認めてしまったことになったりして。

００７ユア・アイズ・オンリー

１９８１年イギリス映画
監督　ジョン・グレン
主演　ロジャー・ムーア、ジュリアン・グローバー、キャロル・ブーケ、トポル

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１２作。
前作「ムーレイカー」であまりにもＳＦチックで荒唐無稽な世界に走ってしまった反省からか、かなりオーソドックスなスパイアクションに仕上がっております。
ロジャー・ムーア大先生、ご高齢にもかかわらず、ガンガン・ビシバシ、アクションシーンをご披露されています。
見ているほうが心配になるくらいの勢いです。大丈夫だったんでしょうか。
今回は海洋冒険活劇風でございます。
イギリスの電波監視船が何者かによって撃沈されます。
船には最新鋭のミサイル誘導装置が搭載されておりまして、この装置をめぐって、東西両陣営が動き始めるわけでございますね。
ソ連からの依頼をうけたギリシャの裏組織なんかが動き始め、ついにはイギリス側の引き上げ責任者の海洋学者が殺されたりします。
そこでボンド＝ムーアさまの出番となるわけでございます。
スキーたら潜水たらロッククライミングたら、これでもかこれでもかと炸裂するアクションシーン。
肉体派アクションのオンパレード。
それでいながらいつもの「んなアホな」みたいなオチも忘れておりません。
けっこう楽しめましたです。
しかし前作との落差が激しすぎて、シリーズとしては肩すかしというか、カクっときたというか。
なんかとっても微妙な印象をもちましたです。
パパの採点。１０点満点中７点。
書き忘れてましたが、この映画、主題歌はシーナ・イーストン。
００７の主題歌っていいですよね。
とりあえず、「死ぬのは奴らだ」のポール・マッカートニーあたりからでしょうか、私がめっちゃよく知っているアーティストが００７の主題歌歌うようになったの。
主題歌を歌う前から応援していたようなメジャーなアーティストに００７のテーマ曲を歌われると、それだけでゾクゾクしてしまいます。

００７オクトパシー

１９８３年イギリス映画
監督　ジョン・グレン
主演　ロジャー・ムーア、モード・アダムス、ルイ・ジュールダン、クリスティナ・ウェイボーン

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１３作。
この映画が封切りされた当時、若者だった私は、タイトルをそのまま英語読みして「オクトプッシー」とか言って顰蹙を買いましたが、それって間違いじゃなかったみたい。
本当に「オクトプッシー」って読むんだそうです。
なんでもこのタイトルを問題視した婦人団体が抗議行動起こしたとか。怖い怖い。
作品としては秘境宝さがしものっぽい筋立てでございますね。
ドイツ国境付近でイギリスの諜報部員が殺され、ボンドは仲間が殺された原因を探りに向かいます。
殺された諜報部員が持っていたのはロシアの秘宝。
それを手がかりに、ボンドはアフガニスタンの王族が黒幕ではないかと疑い、インドへ向かいます。
そこでボンドが出会ったのは、謎の盗賊団でございます。
その女首領が、背中にタコの刺青を入れた美女オクトプッシー、いや、オクトパシー＝アダムスさまでございます。
ボンドが黒幕と疑ったアフガニスタンの王族は、実はロシアの将軍と組んで、クレムリンから財宝を盗み、その金で核兵器を入手しようとしていたことが明らかになります。
さてさて、ボンドの活躍やいかに。
オクトパシーを演ずるモード・アダムスさま。
彼女、メインのボンドガールとしては史上初の二度目の出演。
前回出演したのは「黄金銃を持つ男」で、そのときは物語中盤で殺されてしまうスカラマンガ＝クリストファー・リーさまの情婦役。
そのときの演技が評価されての最登板でしょうか。
この作品のほうがなんか色っぽくて素晴らしかったです。
パパの採点。１０点満点中６点。
なんかねえ、ちょっと地味な作品。
全体的に印象薄いです。なんかジョージ・レイゼンビーさまとかティモシー・ダルトンさまの００７見てるみたい。
というか、そんな印象しか残っていないのはなぜでしょう。面白くないわけじゃなかったんですが。

００７美しき獲物たち

１９８５年イギリス映画
監督　ジョン・グレン
主演　ロジャー・ムーア、タニア・ロバーツ、クリストファー・ウォーケン、グレイス・ジョーンズ

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１４作。
ロジャー・ムーアさまボンドの最終作でございます。
ムーアさまボンド、この作品が最後になることが最初からわかっていたのでしょうか。
なんかムーアさまの有終の美を飾るにふさわしい布陣のキャスティングでございますなあ。
とりあえず悪役のボスは大富豪ゾーリン＝ウォーケンさま。
弱っちいのにえらそうで、でもダメダメボンボンって役どころがはまりまくっております。
おいしいところを全部もっていったのが、ウォーケンの女ボディガードのジョーンズさま。
なんか「女版ジョーズ」みたいな感じで、めっちゃおいしいことこの上ないですね。
ボンドガールはタニア・ロバーツさま。
今風できれい。
これだけで豪華キャストですが、さらに主題歌はデュラン・デュラン。
もう言うことなし。お、ええ感じやん、って思っていたのですが、この作品でロジャー・ムーアさまは降板。
このあと、ティモシー・ダルトンさまボンドの冬の時代になってしまいます。
００７的に面白くなってくるのはさらにそのあとのプロスナンさまボンド時代だと。
これは個人的な意見ですが。
殺された諜報部員の死体から高性能マイクロチップが発見されます。
これはイギリスが開発したものなんですが、それがソ連に渡っていたことがわかるわけですな。
高性能マイクロチップを東側に売ったのは誰なのか。
容疑者リストとしてあがった大富豪ゾーリン＝ウォーケンさま。
ボンドは彼に接触し、やがて彼が目論む世界征服計画を知り、彼と対決することになります。
しかししかし、ボンドの前に立ちはだかるのはウォーケンさまの女ボディガード・ジョーンズさまでございます。
果たしてボンドの運命やいかに。
なかなか楽しめる作品ではありますが、大ボスウォーケンさまがちょっと…
ぶっちゃけ弱すぎ。でも考えてみたら、これまでのボンド作品でも弱っちいボスとかいましたよね。
なんでこの人だとこんなに情けない感じの大ボスになるんだろう。不思議な感じで見てしまいましたです。

パパの採点。１０点満点中８点。
私がリアルタイムで００７シリーズを見始めたのは、ロジャー・ムーアさまの「黄金銃を持つ男」からでございます。
それだけにムーアさまボンドには特別の感慨がございまして。
ムーアさま最終作ってことで、自動的に一点献上でございます。
グレイス・ジョーンズさまにも一点あげたかったんですが、９点だと点数高すぎですので、とりあえず８点ってことで。

００７リビング・デイライツ

１９８７年イギリス映画
監督　ジョン・グレン
主演　ティモシー・ダルトン、マリアム・ダボ、ジョー・ドン・ベイカー、ジェローン・クラッペ

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１５作。四代目ボンド、ティモシー・ダルトンの登場作品でございます。
えっとねえ、先に謝っちゃおう。
ごめんなさい。
「リビング・デイライツ」、「消されたライセンス」、どっちも間違いなく見ているんですが、ぶっちゃけどっちがどっちかよくわかんない。
映画資料集の本二冊と、映画紹介サイトのあらすじ紹介文読んで、ああ、そうやったって思い出したくらいでございます。
まあ考えようによってはその程度の作品って言えなくもないような気がしますが。
私の感性がこの作品の良さをとらえることができなかったといえばそういえるような気もするし。
どうなんやろ。
ＫＧＢの高官が西側への亡命を希望しまして、ボンド＝ダルトンさまはチェコで彼の亡命をヘルプすることになります。
謎の狙撃手に狙われますが、西側の作戦は周到でございまして、亡命は成功します。
高官からの情報で、ＫＧＢは西側のスパイ暗殺計画を準備しているとの情報があり、その首謀者の名前も明らかになります。
しかしボンドはその情報に疑念を抱くわけですね。
そうこうしているうちに、イギリス情報部のかくれがが急襲され、高官の身柄は再びＫＧＢに奪われてしまいます。
えらいこっちゃ。
イギリス情報部は、スパイ暗殺計画を企てているリーダーの暗殺をボンドに命令しますが、ボンドはこの亡命計画そのものが大芝居であった可能性を考え、謎の狙撃手を追うことになりますが…
アクションはもちろんふんだんに用意されているのですが、今回の作品はそれ以上に、謎解きっぽい要素が強調されているような気がしました。
これって新しいかも、って最初は思いましたが、やっぱり００７なわけだから、明るく楽しくお話が進まないと楽しめないかもしれませんね。
パパの採点。１０点満点中６点。
お色気系ではなく、お嬢様系ボンドガールのマリアム・ダボさま。

まあがんばってはいるのですが、ちょっと違う感じ。
このちょっと違う感が増殖してしまったのでしょうか、ボンドさん、この次の作品ではもっと違う世界へといってしまいます。

００７消されたライセンス

１９８９年イギリス映画
監督　ジョン・グレン
主演　ティモシー・ダルトン、キャリー・ロウエル、ロバート・ダビ、タリサ・ソート

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１６作。
四代目ボンド、ティモシー・ダルトンさまの二作目で同時に最終作品でございます。
えっとねえ、とにかく「それは違うやろ」って感じがつきまとう一編。
なんかめっちゃ違和感漂いまくりの作品でございます。
ボンド＝ダルトンさまとその友人が南米の麻薬王ダビさまを逮捕します。
逮捕します、って文章から始まるってことはその麻薬王、見事脱走するわけでございますね。
んで、ボンドの友人の結婚式の会場を急襲。
友人に瀕死の重傷を負わせ、新妻を殺して逃走します。
で、ボンド、キレる。
友人のため、彼は「殺しのライセンス」を捨て、情報部の命令を無視して、単身、麻薬王に戦いを挑みます。
おお、男の美学…って思えないところが辛いところでございますね。
そもそもお客さんって、００７を見ようと思って映画館に行くわけでございまして、一個人の復讐物語を期待して映画館に行くわけじゃないし。
００７って、別に恨みとかがあるわけじゃないけど、悪い奴だから国家のためにそいつをやっつけましょう、みたいなヒロイズムが見ていて楽しいわけでありまして、そんな００７に情念ベタベタの復讐劇みたいなもの見せられても…ねえ。
しかもボンドを演ずるのはまだ二作目のダルトンさまでしょ？
やっぱりみんな「違う」って思って当たり前だと思うんですよ。
まだボンドイメージが定着していないダルトンさまに、ボンドらしくない行動とらせちゃかわいそうです。
これがロジャー・ムーアさまのボンドだったらみんなもっと納得して見たと思うのですが、ダルトンさまにこんな特殊なボンドをやらせちゃだめですよね。
ってことで、哀れダルトンさま、この作品でお役御免を言い渡されまして、プロスナンさまボンドへバトンタッチとなります。
そういう意味では、最近のダニエル・クエイグさまボンドも、ちょっと違うんちゃうかなぁって思ってしまいます。
「カジノロワイヤル」も「慰めの報酬」も、かなりわかりやすい復讐劇ですもんね。
パパの採点。１０点満点中５点。
うんうん。やっぱり違うやろ。

ちょっとコメントしにくいボンド映画でございました。
ちなみに主題歌はグラディス・ナイト。この主題歌も私的には印象が薄いのは気のせいでしょうか。

００７ワールド・イズ・ノット・イナフ

１９９９年イギリス映画
監督　マイケル・アプテッド
主演　ピアース・ブロスナン、ソフィー・マルソー、ロバート・カーライル

００７シリーズのご紹介でございます。
００７シリーズの第１９作。
五代目ボンド、ピアース・ブロスナンさまの三作目です。
「ゴールデン・アイ」「トゥモロー・ネバー・ダイ」に続く作品でございます。
ブロスナンさまボンドはけっこうお気に入り。
「ゴールデン・アイ」見たときに、これやあ～って思ったのをよく覚えております。
これで００７も安泰やあ、って思ったら、ブロスナンさまも四作で交代。なんでなん？って感じですが。
「カジノ・ロワイヤル」見ましたが…
ブロスナンさまのほうがええんとちゃいますやろか。また短命政権となりそうなボンドさんでございます。
さてさて、「ワールド・イズ・ノット・イナフ」のご紹介。
石油王がイギリス情報部の本部で爆殺されてしまいます。
事件の黒幕はテロ組織のリーダー・カーライルさま。ボンド＝ブロスナンさまは石油王の娘・マルソーさまの警護の任にあたります。
あからさまに線キレのカーライルさま、ロシアの核弾頭を奪い、旧ソ連から中東にかけて張り巡らされた「パイプライン」壊滅をもくろんでおります。
実はこのカーライルさま、数年前に石油王の娘マルソーさまを誘拐したりしております。
さてさて、どうなりますことやら。
ソフィー・マルソーさま、ええ感じでいやらしくて大好きです。
もっと登場場面多かったらよかったのに。
しかしこのタイトルあまりよろしくないですね。
なんか、この前の作品の「トゥモロー・ネバー・ダイ」とごっちゃになってしかたないです。
メディアを使って世界征服を企むメディア王がワルだから、「ワールド・イズ・ノット・イナフ」のほうがよかったと思うんですが。
「トゥモロー・ネバー・ダイ」と「ダイ・アナザー・デイ」もなんかごっちゃになるようなタイトルやし。
ちょっと考えて欲しいなあ。
パパの採点。１０点満点中８点。
シリーズ最多出演を誇っておりました秘密兵器担当のＱ役のデズモンド・リューエンさまは、この作品が公開された直後に事故死しまして、残念ながらこの作品が遺作となりました。

デズモンド・リューエンさまのご冥福をお祈りして１点献上でございます。

フリー・ウィリー

１９９３年アメリカ映画
監督　サイモン・ウインサー
主演　ジェーソン・ジェームス・リクター、ロリー・ペティ、ジェーン・アトキンソン

ええ話でっせ。ラストなんか涙ちょちょ切れまっせ。少なくとも私は泣いた泣いた。
ウイリーはオルカ＝シャチでございます。
シャチって「海のギャング」とか言われてなかったですか？
リチャード・ハリスさま主演の懐かしの海洋動物パニックものの「オルカ」も獰猛なイメージで撮られてました。
そんなシャチ君がかわいいイメージで捉えられるようになったのは、やっぱり白浜アドベンチャーワールドのイメージがあるからでしょうか。
賢くてかわいい。シャチの地位もあがったもんだ。
主人公のリクター少年、母親に捨てられて孤児院生活を送っております。
彼は孤児院を抜け出して、水族館に逃げ込む。
そこで彼はシャチのウィリーと出会います。
子供のシャチのウィリー。
ウィリーは親とはぐれ、人間に囚われて、不自由な毎日を送っているのではないかと、リクター少年は彼なりに想像するわけですな。
あながちその考えも間違っていないわけですが。
少年は自らの境遇とウィリーのそれを重ねあわせはじめます。
少年、ウィリーの調教を手伝いはじめたりします。
やがて少年はウィリーを海に返し、自由にしてあげることがウィリーのためではないかと考えはじめ、やがてその考えを実行にうつすことになるわけですね。
もうねえ、心温まるヒューマンドラマざます。
涙ちょちょぎれます。
ラストシーンがなかなかよろしい。
少年の絶叫って、どうしてこんなに胸を打つんでしょうか。けっこう感動しちゃいました。
パパの採点。１０点満点中８点。
この作品、好評でございまして、シリーズ化されます。
うんうん。しかしなあ。
一作だけで終わらせてもらったほうがよかったかもって思うのは私だけでしょうか。

銀河英雄伝説・新たなる戦いの序曲

１９９３年徳間書店・徳間ジャパンコミュニケーションズ作品
監督　清水恵蔵
声の出演　堀川りょう、富山　敬、広中雅志

大好きな、田中芳樹様原作の「銀河英雄伝説」の映画版。
原作小説の第一巻から始まる正伝の「アスターテ会戦」から「イゼルローン要塞攻略」直前までを描きます。
と書いても原作を読んでおられない人はまるでわからないと思いますが。
はるか未来。人類は地球という惑星を捨て、宇宙へとその活動の場を拡大させます。
やがて惑星国家が誕生し、強大な勢力をもつようになります。
これが銀河帝国。
その帝国の圧政に耐えかね、惑星を脱出した人たちが建国したのが自由惑星同盟。
この二国はずっと戦争状態にありまして、物語は帝国の若きリーダー・ラインハルトと、同盟の天才的作戦家・ヤンの戦いを描きます。
前作にあたる「我が往くは星の大海」ではじめて戦ったラインハルトとヤンですが、今回も手に汗握る戦いが展開されます。
とにかく原作がよくできております。
という賛辞はこの作品をご紹介するたびに書いておりますね。
テレビ版アニメもそうでしたが、とにかくアニメの製作者が、原作に忠実なアニメ化を心がけておられますので、とにかく原作の良さが全て伝わってきます。
今回のアニメの良いところは、テレビ画像の使いまわしなどではなく、全編新しく製作されたところでしょうね。
つまり、物語そのものは同じでも、全く別の作品ということになります。
テレビ版では描かれなかった場面なんかもとりあげられておりまして、それはそれでええ感じ。
同盟軍艦隊が首都星を出発する描写など、すんげえ感動しましたがな。
映画版の前作、「我が往くは星の大海」からテレビシリーズにつながるエピソードなども丁寧に描かれておりまして、銀英伝フリークの私としては、とても楽しめました。
パパの採点。１０点満点中８点。
残念ながら、このシリーズの映画化はこの作品が最後になっているようです。
この映画以降は外伝のアニメが製作されたくらいかな。
そうこうしているうちにヤン＝富山　敬さまだとかオーベルシュタイン＝塩沢兼人さまだとかの声優さんも他界されたりして。
これ以降の映画版のエピソードの製作は難しいようですね。

トイ・ストーリー

１９９５年アメリカ映画
監督　ジョン・ラセター
英語版声の出演　トム・ハンクス、ティム・アレン
吹き替え版声の出演　唐沢寿明、所ジョージ

ディズニーとピクサーががっぷり組んで製作された傑作ＣＧアニメでございます。
えーっと。めっちゃよくできているアニメなんですが…どうなんやろって思ってしまいます。
人形とかおもちゃとかの造形はとてもよくできていますが、人間の造形がちょっとねえ。
これがもうちょっとリアルでかわいく描けたらもっと楽しめたんですけど。
物語としてはねえ、「おもちゃのチャチャチャ」の世界ですなあ。
おもちゃたちは、本当は自分の意志で動けるんだけど、人間の前ではおもちゃのふりをしているんだよ、ってえ設定。
夢があってよろしいですな。
主人公のおもちゃはウッディ。
カウボーイの人形。
持ち主の男の子のお気に入りおもちゃです。
そこへ誕生日のプレゼントで買ってもらった新しいおもちゃ、「バズ」って人形がやってきます。
バズは宇宙服を着た、まあアニメヒーローっぽいキャラの人形ですな。
バズの登場によっておもちゃたちの間で微妙な力関係の変化が現れたりします。
お気に入りのおもちゃが増えるってえことは、それによってあまり使われないおもちゃが出てくるわけでありまして。
おお、なんか人間界の縮図のような。
特にそれまで一番気に入られていたウッディは面白くない。
バズにあからさまに嫉妬したりなんかします。
おお、なんか人間界の縮図のような。
そんなウッディとバズ、ふとしたはずみで家から飛び出してしまいます。
折りしも少年の家は引越しを控えている、なんて事情があったりしまして、引越しまでに家に帰りつかないと、永遠に少年と会えなくなってしまう。
そんなこんなで、バズとウッディは力をあわせて、少年の家に戻ろうとします、しかし簡単にはいかない苦難の連続でございまして。
さあさどうなる。
パパの採点。１０点満点中７点。
英語版ではウッディの声をトム・ハンクスさまが、バズの声をティム・アレンさまが演じました。

ちなみに日本語版はウッディが唐沢寿明さま、バズが所ジョージさま。
日本語版もけっこう味があっていいですよ。所さますごく巧いです。驚いてしまいました。

パーフェクト・ワールド

１９９８年アメリカ映画
監督　クリント・イーストウッド
主演　ケビン・コスナー、クリント・イーストウッド、ローラ・ダーン、Ｔ・Ｊ・ローサー

ケビン・コスナーさまとクリント・イーストウッドさまの豪華顔合わせ。って感じでもない映画です。
間違いなく競演はしているんですが、二人がめっちゃからみまくるような内容でもないです。
コスナーさまは脱獄犯。
イーストウッドさまは彼を追う警察署長。
この二人がこれでもかのバトルを繰り広げる…ってな映画ではないのでお間違いなく。
脱獄犯コスナーさまは少年を人質にとり、逃亡を続けます。
イーストウッド署長さまは警察の面子にかけて彼を捕らえようとします。
とはいえ作品の舞台は１９６０年代なんで、最新鋭のキャンピングカー（！）でコスナーを追うなんて非常にのんびりした追跡劇が繰り広げられるわけですね。
物語の作りかたによっては手に汗握るサスペンスに仕上げることもできた題材ですが、この映画は、脱獄犯と人質少年の心の交流を描いた心暖まる作品に仕上がっております。
ここいらの展開のためにあえて脱獄犯役をコスナーさまにしたのかもしれませんね。
ラストはすんげえ悲しく、それでいてホッとする終わりかた。
それでいてやるせなくて、妙な脱力感まで味わうことができました。
人質役の少年がとにかく巧い。
なんかめっちゃ共感できるんだけど、どっか危なっかしい。
それがまたコスナーさまの芝居と実にうまくシンクロしております。
イーストウッドさまはちょっと影がうすい感じ。
ローラ・ダーンさまはもっと影がうすい。
この人出てたの？みたいな感じです。
とにかく脱獄犯と少年のロードムービーだと思って見ていただいたらいいかと思います。
パパの採点。１０点満点中７点。
ほめたわりには点数低い。私ってコスナーさま苦手なんです。
いかにも善人顔したコスナーさまがワルの脱獄犯演じるってのは確かに面白かったけど、結局いいところは全部少年がもっていっちゃった感じですね。

レナードの朝

１９９０年アメリカ映画
監督　ペニー・マーシャル
主演　ロバート・デ・ニーロ、ロビン・ウィリアムス

難病ものってカテゴリーになるのでしょうか。
嗜眠性脳炎という病気らしいです。
小学生レナードはこの病気を患い、３０年間も眠ったままの毎日を送っています。
その病院に赴任してきた医師がウィリアムスさま。
彼は重症患者たちに積極的に接し、わずかずつ現れてくるその治療効果に自信をもちはじめます。
「患者たちは眠っているのではなく、外界からの刺激に適切な反応ができないだけなのではないか」との仮説をもとに、別の病気のために開発された薬がその脳炎に効果があると考え、実験的に一人の患者に投与します。
投与されるのが三十年間寝たきりのレナード＝デ・ニーロさま。
やがて彼はついに奇跡の「目覚めの朝」を迎えることになります。
しかし…
と書いてしまうと、結末がわかってしまいますよね。
ネタバレですんません。
やはり薬の効果は一時的なもので、やがてデ・ニーロさまの症状はゆっくりと元の状態に戻っていくわけですね。
映画はそんな医師と患者の交流を、ストレートに描きます。
ロビン・ウィリアムスさまもロバート・デ・ニーロさまもとにかく巧い。
なんかリアルすぎてドキュメンター見ているような気にさえなってしまいます。
実話をもとに作られた映画だからそれでいいのかもしれません。
感動的な演出だとか、過剰な演技だとかを極力排除した静かな映画。
それだけあまりにも静かなラストには言葉をなくしてしまいました。
パパの採点。１０点満点中７点。
けっこう重い映画です。
主演二人が巧ければ巧いほど、ズシンと心に残るものが大きくなります。
直球勝負の内容だけに、軽薄な私にはかなりしんどい映画ではありました。

ダイ・ハード２

１９９０年アメリカ映画
監督　レニー・ハーリン
主演　ブルース・ウィリス、ウィリアム・サドラー、フランコ・ネロ

ブルース・ウィリスさまの大出世作、「ダイ・ハード」の続編でございます。
前作、ハイテクビルで悪党退治をしましたウィリス＝ジョン・マクレーン刑事、今回は空港でテロリスト相手に大活躍でございます。
すげえすげえ。
アクションシーンも一段とパワーアップ。
私的には「ダイハード」よりもこの作品のほうが好きだったりします。
前作から二年後のクリスマスイブ。
やっぱりイブなんですよね。
出張から帰った妻を迎えにきたウィリスさま。
彼はそこで不審な男を見かけ、その男と銃撃戦の末、射殺します。
めっちゃ嫌な予感。で、やっぱり大事件発生。
謎のテロリストグループが空港の管制機能をジャック。同時に管制塔の機能が麻痺させられてしまいます。
悪いことに空港は雪雲に覆われ、有視界飛行による着陸は困難。
テロリストたちは空港に着陸しようとする全ての飛行機を上空で旋回させ、飛行機の全ての乗客乗員を人質にとります。
彼らの要求は、折りしもその空港に護送されてきた南米某国革命組織のリーダーの開放であります。
軍は特殊部隊の投入を決定。
空港を舞台に特殊部隊対テロリストの戦いが繰り広げられることになるわけですな。
しかしそこは「ダイハード」シリーズ。
前作以上のとんでもないドンデン返しが用意されているって寸法でございます。
ストーリーもドンデン返しもクライマックスのアクションもオチもいけてる傑作だと私などは高く評価している作品。
続編だから面白くないかなあなんて軽く見ましたが、すんげえ面白かったです。
これに感動して「ダイハード３」見に行ったらあんまり面白くなかったってえおまけつきの映画。
しかしながら、この作品が面白かったってえ評価は変わりません。
パパの採点。１０点満点中８点。
ブルース・ウィリスさま、けっこう楽しそうにやっておられます。
この作品のイメージで「３」も作ってもらいたかったんですけどね。

「３」は閉鎖空間（「１」は高層ビルの中、「２」はほとんど空港の中）での物語ではなく、ニューヨークそのものが舞台だったですから、ちょっと物語が拡散してしまいましたよね。
「３」の舞台がニューヨークになってしまったのには複雑な事情があったらしいのですが…
とりあえず、私的にはシリーズイチオシの作品でございます。

殺しのドレス

１９９０年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　ナンシー・アレン、マイケル・ケイン、アンジー・ディッキンスン

名匠ブライアン・デ・パルマ監督のアーリーな時期の一作。
アーリーな時期ってほど前期の作品でもないですが。
この作品の大ヒットで、デ・パルマ監督はサスペンス映画の巨匠として認められることになります。
というかあ。
とりあえず「女刑事ペパー」のアンジー・ディッキンスンさまのシャワーシーンがあるってことだけで超話題になった作品でございます。
夫との性生活に満足できない女ディッキンスンさま。
彼女は精神分析医のケインさまの診察を受けています。
ディッキンスンさま、診察の帰りに、美術館で出会った見も知らぬ男と、誘われるままに男の部屋でッチ。
その帰り、謎の金髪女性にナイフで惨殺されてしまいます。
おおお、「サイコ」のパターンやないですか。
主役であろうと思われていたそれなりにビッグネームの登場人物が、映画前半であっさり殺されてしまいました。
ここからはナンシー・アレンさまとマイケル・ケインさまがディッキンスンさま殺害の謎を追うって展開です。
えっとねえ、すごくよくできたサスペンスだと思うのですが、犯人あからさますぎます。
最初の殺人の映像で、犯人が誰かわかってしまうサスペンスって、どうなんやろ。
まあナンシー・アレンさまめっちゃかわいいからいいんだけど。
パパの採点。１０点満点中８点。
えっと、熟女ディッキンスンさまのシャワーシーンがあるってことでとにかく話題になったこの作品ですが、実はこの裸、ディッキンスンさま本人のものではなく、代役（おお、これぞ「ボディダブル」）だったとあとで公表されました。
なあんだ。
ってことでマイナス１点。でもナンシー・アレンさまのクライマックスの下着姿がめっちゃエロかわいかったので、ここでプラス１点。
で、８点評価でございます。

霊幻道士

１９８５年香港映画
監督　リッキー・リュー
主演　ラム・チェンメン、ムーン・リー

私にとっては特別の思い入れのある作品でございます。
私ね、その昔劇団活動をしておりました。
そこの劇団にアクションチームがありましてね。
チームの出し物って、私が養成所のころは「ドラゴン」もの、研究生時代は「キョンシー」もの、で、演出とか裏方のチーフとかやるようになったころは「忍者ショー」みたいな変遷がありまして。
研究生時代の甘酸っぱい記憶が蘇る作品でございます。
サモ・ハン・キンポーさま製作総指揮のコミックホラーです。
その昔の中国では、呪われたり埋めかたを間違えられたりした死体は、吸血キョンシーとして蘇ったわけでございまして。
ある道士が、ときの権力者から墓の改葬の依頼をうけるわけですが、実はそのお墓が呪われていたわけですね。
かくしてキョンシー大量発生。
道士様、キョンシーと秘術をつくして戦います。
題材は間違いなくホラーなのに、この明るさってどうでしょ。
道士様の弟子は一人はキョンシーにやられてキョンシーになるし、もう一人の弟子はエロエロ幽霊にとりつかれてゴチャゴチャになるし。
でもとにかく明るい。
キョンシーの額にお札を貼ったらおとなしくなって、道士の命令を聞くようになる、なんてお茶目な設定がこの作品に底抜けなユーモアを与えてくれているようです。
パパの採点。１０点満点中７点。
確かに面白いし、見ていて楽しい映画なんですが、なんとなく後味がわるいです。
まあホラーなんだから、後味なんて良くなるわけはないんですが。
その後味の悪さがちょっとだけ減点対象でございます。ただ、くれぐれも、面白くない映画ではありませんよ。

華麗なる賭け

１９６８年アメリカ映画
監督　ノーマン・ジュイソン
主演　スティーブ・マックウィーン、フェイ・ダナウェイ

これは深夜放送のオンエアを録画したものを見ました。
こういう面白い作品の地上波オンエア枠、めっちゃ減りましたよね。
ちょっと前まで、毎日どこかの局で映画劇場オンエアしてたのに。
あまりの面白さにびびってしまった、頭脳派系クライムサスペンス映画です。
大実業家のマックウィーンさま。
高級車に乗って、秘書がおって、スケジュールとか分刻み系の社長はんでございます。
彼にはビジネスマンとしての顔のほかにもう一つの顔があります。
金目当てではなく、自らの頭脳と可能性を試すため、完璧な銀行強盗計画を立案し、実行するという顔でございます。
その計画というのは、共犯者どうしでさえ計画実行の瞬間までお互いの顔も素性も知らない。
それぞれが駒としてマックウィーンさまの指示どおりに動いていったら銀行強盗が成立するなんてえ計画。
もちろんそれぞれ駒となる実行犯たちもマックウィーンさまの顔も名前も知らない。
そんな天才犯罪者マックウィーンさまに挑むのは、保険会社の女性調査員ダナウェイさまでございます。
彼女は事件全体を操っている天才犯罪者の存在に気づきます。
そして、その容疑者はマックウィーンさまではないかと考え、彼をマークしはじめるわけですね。
さあここからはマックウィーンさまとダナウェイさまの知恵くらべ＆演技合戦でございます。
丁丁発止というか、息詰まるというか。とにかくスリリングなゲームが続きます。
そして最後にダナウェイさまはマックウィーンさまに罠をしかけます。
マックウィーンさまはその罠にはまって捕まってしまうのか、それとも…
とっても洒落たドンデン返しが用意されております。
見終わった感覚も「ああ、面白かった」ってもので、むしろ爽快感を感じさせてくれました。
久々に「ええ感じに頭使った映画」に出会ったような気がしました。
パパの採点。１０点満点中８点。
途中のセリフ（吹き替えを見ていたわけですが…）にあったのですが、マックウィーンさまが、自らの犯罪へのチャレンジこそ「華麗なる賭け」なんだってセリフがありましたが…
日本人には、日常会話で「華麗なる」なんて言葉を選ぶ言語感覚を持ってる人なんていないんじゃないかと思うんだけど。
どうしても作品タイトル台詞で喋りたかったのかなあ。でもあんな台詞、いらないですよね。残

念だったです。
あまり無理して作品タイトル正当化させようとしなくていいのに、って思いました。

交渉人・真下正義

２００５年フジテレビ・ＲＯＢＯＴ・東宝作品
監督　本広克行
主演　ユースケ・サンタマリア、寺島　進、國村　隼、小泉孝太郎、柳葉敏郎、水野美紀

人気テレビシリーズ「踊る大捜査線」の映画化第三弾にして、テレビ～映画へと続いた物語のサイドストーリー第一弾。
厳密にはサイドストーリーものとしてはドラマ正編オンエア直後に、「湾岸署婦警物語」なんてのがありましたが、この作品以降の外伝シリーズは、映画版「容疑者・室井慎次」、ドラマ版「逃亡者・木島丈一郎」「弁護士・灰島秀樹」へと続きます。
今ではピン役者の（元ビンゴボンゴの）ユースケ・サンタマリアさまが演ずる交渉人警視・真下正義と、地下鉄テロ犯人の対決を描くサスペンス映画です。
２００４年のクリスマスイブ。
東京地下鉄で最新型実験車両が何者かに乗っ取られます。遠隔操作された車両は、東京の地下鉄網を走り回り、地下鉄乗降客の命が危険にさらされます。
水野さまとイブのデートの約束をしていたサンタマリアさまは、監理官柳葉さまの指示により、地下鉄管制室の國村さま・刑事寺島さまらとともに犯人に立ち向かいます。
なんかねえ、すんげえ物語展開が巧いです。
実験車両と地下鉄車両の、あわや衝突～衝突回避が繰り返されるサスペンス描写もなかなか。
ユースケ・サンタマリアさまもめっちゃ巧いです。
シリーズ初登場の寺島さまもなかなかの存在感ですね。
私、ドラマ「富豪刑事」ではじめて見るまで、この人のこと知らなかったです。
お顔から察するに、Ｖシネ出身のようですな。
「富豪刑事」「アンフェア」以降の大活躍はもう皆様ご存知ですよね。
とにかくこの「踊る」映画版の作品的クオリティの高さはこれまでの映画版で立証されているところ。
素直に楽しませていただきました。
パパの採点。１０点満点中８点。９点献上しようかなとも思いましたが、ラストがちょっと弱かったので、一点減点～
ネタバレになるから詳しくは書かないですが、こういう犯人設定が許されるほど、現代社会って混沌としているんでしょうなあ。

誰にでも秘密がある

２００４年韓国映画
監督　チャン・ヒョンス
主演　イ・ビョンホン、チェ・ジウ、チュ・サンミ、チョン・ジェヒョン、チョン・ポソク

韓流映画でございますね。
「冬のソナタ」のチェ・ジウさまと、天下の男前、イ・ビョンホンさまの競演。
なんかねえ、めっちゃええ感じでアメリカ映画の作品世界をパクってて、いぐわあああああって感じです。
父を亡くした三姉妹。
結婚してて夫との性生活がマンネリになっている長女、めっちゃオクテでまるで男性経験のない次女（これがチェ・ジウさまですな）、かなり発展家の三女。
この三人の前に、一人の男前が登場。こいつがもちろんビョンホンさま。
ビョンホンさま、三女とつきあいはじめるわけですな。
三女には別れたばかりのダサ男くんがおりまして、彼がけっこう三女につきまとっていたりします。
それでも三女とビョンホンさまは順調におつきあいを続け、プロポーズから結婚カウントダウンってな状況になります。
ええやんか。幸福そうで。って思っていたら、いきなり物語の中の時間が少し前に戻って、今度は次女ジウさまの視点でドラマが展開します。
おお、すげえ。「パルプ・フィクション」というか「ブギーポップは笑わない」というか。
ビョンホンさま、三女とつきあいながら次女にも手を出していたわけですな。
なんや、ごっつい悪い男やないの、って思って見てたら、また時間が少し戻って、今度は長女視点。
ビョンホンさま、三女とつきあいながら次女にも手を出しながら長女ともしておられたことがわかりまして。
めっちゃ悪い男やないの。
って思って見てたら、三女は結婚式直前になって元カレのことが気になりだすし、次女は自分の書いた論文を教授に認めてもらってなんだか教授といい雰囲気になってくるし、長女は夫とのラブラブ生活を取り戻すし…って思って見てたら…
けっこうハッピーエンドのラスト。ちょっと驚く、なんじょそら系のドンデン返しが用意されております。
韓流映画恐るべし。
パパの採点。１０点満点中８点。
私が苦手な恋愛映画ではありますが、けっこう面白く見ることができたのは、予想していた以上に色っぽいシーン満載だったからでしょうか。

こういう映画は楽しんで見れるんですよね～　スケベな私でございます。

容疑者・室井慎次

２００５年フジテレビ・ＲＯＢＯＴ作品
監督　君塚良一
主演　柳葉敏郎、田中麗奈、哀川　翔、八嶋智人、筧　利夫、真矢みき

大人気ドラマ「踊る大捜査線」のスピンオフ企画の中の一作。
これまでの底抜けに明るい仕立てのドラマとはうって変わって、めっちゃ陰鬱な空気をもった作品です。
室井＝柳葉さまは警察のエリート、キャリア組で監理官をしております。
彼が、警察の内部の権力闘争に巻き込まれてしまいまして、ある事件の捜査のやりかたそのものを訴えられてしまうわけです。
で、拘留されて容疑者になってしまう。
警察上層部は「辞表をだしたら告訴を取り下げる」みたいなムードになっておりまして、告発側の弁護士は「勝つためには手段を選ばない」男、灰島＝八嶋さまなんてえ強烈な男だし。
柳葉さまは自らの職を辞する覚悟で、権力闘争の向こうに覆い隠されそうな「真実」を探りだそうとします。
さてさてどうなることやら。
柳葉さまは相変わらずいいですね。
でもびっくりしたのは、弁護士役の八嶋さまと吹越満さま。
めっちゃええ感じでよかったです。
パパの採点。１０点満点中８点。
９点にしようかとも思ったんですが、私的にはこのあとに続くドラマ「弁護士・灰島秀樹」がお気に入りですので、泣く泣くこちらを１点減点。
ちょっと暗かったですしね。しかしクライマックスはとにかく見事でした。

悪魔のシスター

１９７３年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　マーゴット・ギター、ウイリアム・フィンリー、チャールズ・ダーニング

今回からスタートで、私のお気に入り監督さんの作品をピックアップしてまいります。
最初にとりあげるのはブライアン・デ・パルマ監督でございます。
デ・パルマ監督ってね、かなり個性の強い映像手法を使う人です。
「殺しのドレス」とか「キャリー」なんかでは「スプリット・スクリーン」（今では「２４」シリーズですっかりおなじみの、画面を分割して緊迫感をもりあげる手法ですな。日本では金田一シリーズの「女王蜂」で、市川監督が印象的なスプリット・スクリーン演出を見せてくれていました）とか、「３６０度旋回カメラ」（これは「ミッドナイト・クロス」とかこの「愛のメモリー」でめっちゃ印象的だった技法。日本ではドラマ版の「世界の中心で愛をさけぶ」でこの技法を使っておりました。「あずみ」ではさらに進化した、縦方向３６０度旋回カメラ技法が登場。びっくりしました）なんかで世界中をあっと言わせました。
この「悪魔のシスター」ではさほど実験的な手法は使ってはおられません。
回想シーンの、ザラザラした質感のモノクロ画像くらいでしょうか。
テーマは結合性双生児。腰のところでつながったまま生まれた、双生児が主人公。
「半神」ってマンガがありましたよね。野田秀樹さんの舞台にもなりましたが。あの世界です。
その双生児のうち一人が死んでしまいまして、医師たちは死んだ娘と生き残った娘を切り離します。
しかし、死んだはずの娘の意識が生き残った娘に乗り移って、それがもとになって凶悪な事件が頻発すると、そういったお話。
うぐぐ。とってもホラーな題材ですが、サスペンスタッチに仕上がってしまうあたり、さすがにデ・パルマ監督の力量を感じさせます。
ちなみにこの映画が公開された当時は空前のオカルトブーム。
「エクソシスト」「ヘルハウス」と並んで、この作品もオカルト映画として紹介されましたが…厳密にはちがいますよね。
この映画、どっちかってえとサスペンスだし。
パパの採点。１０点満点中７点。
デ・パルマ監督の日本上陸作品でございます。とはいいながら、私的にはこの作品よりももっともっと好きな作品がいくらでもありますので、この作品に関してはちょっと評価低め。
結合双生児を描くってテーマそのものもちょっと苦手だなあ。

愛のメモリー

１９７６年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　クリフ・ロバートソン、ジュヌヴィエーブ・ビジョルド、ジョン・リスゴー

お気に入り監督さんのピックアップ。
ブライアン・デ・パルマ監督作品集でございます。
前回ご紹介した「悪魔のシスター」で日本に紹介されたデ・パルマ監督、そこからはホラーっぽいミュージカル「ファントム・オブ・パラダイス」を撮り、その次の作品がこの「愛のメモリー」。
デ・パルマ監督はこの作品のあと、同じ７６年に、映画史に残るホラー映画の傑作「キャリー」さらにそのあと「フューリー」を撮ることになります。
主人公は実業家ロバートソンさま。彼は結婚記念日のパーティー後、妻と娘を誘拐されてしまいます。
追跡される途中、二人は事故死。
あ～あ。
って思っていたら、いきなり十数年後にお話がすっ飛びます。
後に「ファム・ファタール」なんかで使われる、強引な「…十数年後…」パターンでございます。
ここらの処理が、なんかとってもデ・パルマ監督らしい。
普通の作品だと、いったん現在をちょこっと映してから話が過去に戻る、みたいな撮り方するんですが。
めっちゃ集中して映画見てたら、いきなり話の時間がポーンって飛んでしまう。
びっくりしちゃいます。で、おっさんになったロバートソンさまが、妻との思い出の海岸を歩いておりましたら、妻とそっくりの女、ビジョルドさまに出会います。
やがて二人は恋におちるわけですが、それはとんでもない仕掛けの幕開けでございました…
「この世に大切なのは愛し合うことだけと、あなたは教えてくれるう～」って松崎しげるさまの「愛のメモリー」とは全く関係ありません。
このタイトルの「愛のメモリー」ってのもちょっとどうかなとは思いますが。
確かに「愛のメモリー」なんだけど。
パパの採点。１０点満点中８点。
「悪魔のシスター」「ファントム・オブ・パラダイス」で、このあと「キャリー」に「フューリー」。
ものの見事にホラー系作品ばかり撮っておられますなあ、デ・パルマ監督。
その中にポツンとこういう純然たるミステリーが入ってくるといったところ、好きだなあ。
私はとにかくサスペンス作家としてのデ・パルマ監督をめっちゃ評価しておりますので、上記の

ホラー系の作品よりもこの作品のほうが評価が高いです。

フューリー

１９７８年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　カーク・ダグラス、アンドリュー・スティーブンス、エイミー・アービング

お気に入り監督、ブライアン・デ・パルマ監督作品でございます。
中近東っていうのでしょうか。
アラブとか、なんかそんな国で休暇をとっていたスパイの息子が、別のスパイ組織に誘拐されてしまいます。
父親がダグラスさま。誘拐される息子がスティーブンスさまです。
それとは別に、アメリカの高校に通う女子高生アービングさまの周囲に、不思議な減少が次々に起こります。
どうやら彼女は念動力をもっている様子。
誘拐された青年と、この少女。
この二人が、やがてとんでもないかかわりをもつことになるわけですね。
「キャリー」に続いてデ・パルマ監督がとりあげたのは、やっぱり超能力ものでございます。
誘拐されたダグラスさまの息子も超能力者でありまして、彼は怒り（フューリーですな）の力で、とてつもない力を発揮することになります。
彼の念動力シーンがごっついよくできております。
けっこう怖い。このサイコキネシスシーンだけがひたすら有名になってしまった感のある、不思議な作品でございます。
私はかなり長い間、この作品の主演って、マイケル・ダグラスさまだと思っておりましたが…
間違ってましたなあ。
お父さんのほうでした。
デ・パルマ監督ですが、この作品のあとはすでにご紹介済みの「殺しのドレス」、「ミッドナイト・クロス」、「スカーフェース」、「ボディ・ダブル」を撮りまして、話題作「アンタッチャブル」を監督します。
パパの採点。１０点満点中６点。
デ・パルマ監督ものとしては、イマイチらしさに欠ける作品にような気がします。
ところどころ、すんごく光る描写とかあるにはあるんですが、「別にこの作品の監督ってデ・パルマじゃなくても…」みたいな印象が残ってしまう作品でございます。
デ・パルマ監督作品にしては点数低め。ごめんなさい。

アンタッチャブル

１９８７年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　ケビン・コスナー、ショーン・コネリー、チャールズ・マーティン・スミス、アンディ・ガルシア、ロバート・デ・ニーロ

お気に入り監督、ブライアン・デ・パルマ監督作品でございます。
デ・パルマ監督作品という以前に「ケビン・コスナー主演もの」みたいな括られかたすることが多い一本です。
デ・パルマ監督、徐々にその手腕が認められて、大スターを主演させたメジャーな作品を監督するようになりましたが、そういう作品の場合、いまいちデ・パルマらしくない作品になってしまうようです。
ヒッチコキアンの名匠もプロデューサーには勝てないということでしょうかね。
禁酒法下のアメリカ。
財務省の特別捜査官エリオット・ネス＝コスナーさまが、ギャングの大ボス、アル・カポネ＝デニーロさまに戦いを挑むわけですな。
買収されない、脅迫にも屈さない、まあ言わばギャングたちには「触ることができない」捜査官たちなんで「アンタッチャブル」。
テレビの連続ドラマなんかでけっこうお馴染みの素材を、緊迫感のある映像に仕上げるのはさすがの手腕です、デ・パルマ監督。
さすがにこの作品ではスプリットスクリーンとか３６０度旋回カメラなんてアクの強い演出はしておりませんが、スローモーションを使った「階段の乳母車」のシーンはまさに映画史に残る名シーンでございます。
あと、「屋上からの墜落」シーンとか、「バットの場面の直後の俯瞰」シーンとか。
ここらの場面は、さすがの演出。デ・パルマ監督の類まれなる映像センスが光る名場面でございます。
デ・パルマ監督のこの後の監督作品。
この作品のあと、「カジュアリティーズ」、「虚栄のかがり火」、そして「レイジング・ケイン」を撮ります。
パパの採点。１０点満点中８点。
コスナーさま、デ・ニーロさまがええのはもう当然でございますが、ええとこ全部かっさらっていったのがコネリーさま。
ガルシアさまもけっこうおいしい。
役者さんをすごく光らせるように撮るのも巧い監督さんやなあと再認識させてくれた一編です。
欲を言うと、デ・ニーロさまにももうちょっと暴れる場面作ってもらいたかったですね。
名優デ・ニーロさまの見せ場が少し少ないように感じてしまいました。

レイジング・ケイン

１９９２年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　ジョン・リスゴー、ロリータ・ダヴィドヴィッチ、スティーブン・バウアー

お気に入り監督、ブライアン・デ・パルマ監督作品でございます。
本作はねえ。何といいましょうか、異常者もの。
「悪魔のシスター」とか「殺しのドレス」みたいな世界ですね。原点に帰ろうって意識があったのか、それとも過去の作品へのオマージュみたいな気持ちがあったのでしょうか。
主人公（なんだろうなあ）の心理学者リスゴーさま。
彼は子供の心理を研究しておりまして、子育てが子供の心理に与える影響という研究テーマに固執しております。
彼には双子の弟ケイン（もちろんリスゴーさま二役ざます）がおりまして、彼は心理学者の研究を助けるような行動をとります。
しかしその方法ってめちゃくちゃだったりして、心理学者リスゴーさま慌てまくる、みたいな感じで物語が展開していきます。
心理学者の住む町では次々と失踪事件が起こるわけでございまして、やがてその事件と双子の間にある接点が発見され、それがとんでもない隠された事実とともに全貌を現すわけでございますが…
これ以上は書かないほうがいいかなあ。
って、「悪魔のシスター」と「殺しのドレス」みたいな世界って書いてしまってるから、勘の良い人なら映画見なくてもだいたいの話の流れは予想つくだろうと思うのですが。
「トワイライト・ゾーン」第四エピソードとか、「クリフハンガー」とかで強烈な巧さを見せつけたジョン・リスゴーさま、大活躍の熱演でございます。
この作品、ジョン・リスゴーさまって強烈な個性の役者さんの存在なしではここまでの作品にはならなかったかもしれません。
しかし悲しいかな、主人公がジョン・リスゴーさまであるがゆえに、中盤でネタがばれてしまうような感じがしてなりません。
デ・パルマ監督の演出とか、リスゴーさまの演技とかの問題ではなく、キャスティングそのものが映画の結末を予測させるというか。
こうなってしまうなら、いっそ舞台役者系の「無名だけど巧い役者さん」なんかを起用したほうがよかったのではないかと思ってしまいます。
デ・パルマ監督のこの後の監督作品。
この作品のあと、「カリートの道」、「ミッション・インポッシブル」、「スネーク・アイズ」、「ミッション・トゥ・マーズ」、「ファム・ファタール」、「ブラック・ダリア」のあと、近作「リダクテッド 真実の価値」を完成させます。

パパの採点。１０点満点中８点。
決して面白くないわけではないでのすが、上にも書きましたように、ジョン・リスゴーさまが巧すぎて、逆にネタバレしてしまうという皮肉な作品となってしまいました。
ごめんなさいね。歯切れの悪いコラムで。
舞台される人なら、ロベール・トマの舞台劇「泥棒家族」の原題をイメージしたらわかるかも。
余計わからなくなったかなあ。ほんまこのへんでやめときます。ま、そんな世界でございます。
次回からはこれまた私のフェイバレット・ディレクター、ピーター・ハイアムズ監督の作品を続けてご紹介。
まずは「カプリコン１」のご紹介でございます。

カプリコン・１

１９７７年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　ジェームズ・ブローリン、エリオット・グールド、ブレンダ・バッカロ

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
ハイアムズ監督の評価を決定づけた初期の傑作が本作。
サスペンス、アクション、ラストは「男っていいなあ」系の爽やかな幕切れ。
私はこの一本でピーター・ハイアムズフリークになってしまいました。
とはいってもこの人、かなり職人的にいろんな作品撮る人で、私が大好きな「男ってええなあ」系の作品は、本作と「シカゴコネクション～夢みて走れ」と「プレシディオの男たち」あたりでしょうか。
ハイアムズ監督は撮影もこなす人で、そこらのすぐれた感性と手腕はこれまた本作と、「２０１０年」、「タイムコップ」、「サドン・デス」、「レリック」あたりの特撮映像で堪能することができます。
さて「カプリコン・１」。
人類初の有人火星探査ロケット「カプリコン・１」が発射されることになります。
しかし発射直前にトラブル発生。ここでロケット打ち上げを中止したりしたらＮＡＳＡは全世界の笑いものにされてしまう。
そこで考えるわけですな。
ロケットは無人で発射する。
で、飛行士たちは火星探査の任務を終えて無事に帰ってきたことにする。
かくして無人ロケットは発射され、地球に残ったパイロットたちは、西部にあるＮＡＳＡの基地で「火星のセット」の前で探査活動をする芝居をやらされるわけでございます。
この様子は全世界に中継されます。
火星にむかった無人の「カプリコン・１」は、地球に戻る直前、世界中に中継しているカメラの前で、爆発してしまいます。
えらいこっちゃ。
パイロットたち、普通の生活に戻れなくなってしまうわけですね。
パイロットたちはＮＡＳＡのスタッフたちによって監禁に近い状態に追いやられます。
あかん、このままやったらＮＡＳＡに消されてしまうわい。
そう気づいた彼らは、基地を脱出するわけですね。
ここらの展開がすごく面白いです。なかなかの傑作でございます。
ハイアムズ監督のこの作品前後の活動についてちょっと書いておきましょうね。
監督が日本で最初に紹介されたのは映画デビュー作の「破壊！」でございます。
監督第二作が高い評価を得た本作「カプリコン１」。

その後、「ハーノバー・ストリート」、「アウトランド」「密殺集団」を監督しまして、そしてそして、問題作「２０１０年」を完成させることになります。
パパの採点。１０点満点中９点。
この映画に９点をつけずしてどの作品に９点をつけるべきでしょうか、ってくらいお気に入りの作品です。

２０１０年

１９８４年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　ロイ・シャイダー、ジョン・リスゴー、ヘレン・ミレン

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
とはいっても、この作品がお気に入り監督のハイアムズ監督作品であるってこと、長い間知らなかったです。
だって作風あまりにも違うんだもん。
この作品、かのスタンリー・キューブリック作品「２００１年宇宙の旅」の続編。
原作者のアーサー・Ｃ・クラークさまの了解を得て、前作で謎のまま残された数々の問題を解決していきます。
私はねえ、この作品、「２００１年宇宙の旅」の続編だから見たわけであって…
あと、お気に入りアクターのロイ・シャイダーさまの主演だから見たわけであって…
ハイアムズ作品としては見ておりませんで。
んで、いくらハイアムズ作品だからってねえ、その、あの、「面白くない」ものは面白くないわけでありまして。
申し訳ありませんが、この作品に関してはハイアムズ作品では最低評価となってしまいます。
えっとね、「２００１年宇宙の旅」の映画版って、あれはあれで完結したもの、完結させるべきものであったと思います。
あとになって解説とか講釈とかつけるべきじゃないと。
後半、急激に哲学的かつ難解になっていきますでしょ。
あとは皆さんでご自由に解釈してください、みたいな、謎のまま終わるべき世界だったんじゃないかなと思っております。
「２０１０年」の中では、ディスカバリー号のその後とか、船長のその後とか、モノリスの謎とか、そしてさらに作品世界に隠された（とハイアムズ監督が設定した）驚愕の事実なんかが描かれますが…
どうなんやろ。
この作品についてはできればコメント保留ってのが一番いいんじゃないかと思います。
キューブリック作品で提示された謎。
その謎の答えは、それぞれの人が持っていればいいわけであって、「続編でございますよ～」みたいな顔で、謎解きされちゃうと、「へえ、そうやったんや」って思ったりするわけで。
というか、この作品はあくまでもキューブリック作品が提示した謎について、作品スタッフが「謎の答えはこうこうなんとちゃいますやろか」って考えた内容を映画にしただけのもので、それ以上でも以下でもないと思うんです。
そんなのはそれぞれの人が頭の中で構築すればいい話であってですねえ。

今日の私はなんか辛口ですが。
まあ、あんまりお勧めしない作品でございます。
とにかく「２００１年宇宙の旅」って敵がデカすぎました。
もっと無難な作品の続編チャレンジすればよかったのに。
パパの採点。１０点満点中５点。
上記の理由で、ハイアムズ作品にしてはおそらく最低評価になると思います。

シカゴ・コネクション～夢みて走れ

１９８６年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　グレゴリー・ハインズ、ビリー・クリスタル、スティーブン・バウアー

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
私はとりあえずこの作品を見ましてハイアムズ監督フリークになっちまいました。
コミカルでアクティブな、とってもええ感じの刑事もんでございます。
主人公の刑事コンビを演ずるのは、おお、グレゴリー・ハインズさま。それにビリー・クリスタルさま。
この芸達者の二人、すっごいええ感じでドラマを作っていくわけですね。
女好きで調子の良いハインズさま。転職ばかり考えているクリスタルさま。
この二人、麻薬ルート「シカゴコネクション」を追っているわけですね。
一攫千金を「夢見る」クリスタルさまは、この事件でビッグマネーを手にすることができるんじゃないかって感じで頑張るわけですな。
んで、ビッグアクションを展開させながら走る走る。
んで、ラストは「男ってええなあ」みたいな結末でございます。
おお、これぞハイアムズ監督の世界。
っていいながら、「男ってええなあ」系の作品って少ないけど。
クライマックスのアクションシーンとか中盤のカーチェイスはさすがの出来です。
とても面白い作品ですので、是非ごらんいただきたい作品です。
パパの採点。１０点満点中８点。
９点つけようかなあとか思ったんですが、とりあえず８点にしておきました。
私的にはめっちゃポイント高い一本です。
この映画の原題は「Ｒｕｎｎｉｎｇ　Ｓｃｅｒｅｄ」。
原題の中には「シカゴ」も「コネクション」も「夢」も出てきておりません。
でも映画のイメージはやっぱり「夢みて走れ」なんですなあ、これがまた。
私も夢みて走りたいざんす。

プレシディオの男たち

１９８８年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　ショーン・コネリー、メグ・ライアン、マーク・ハーモン

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
この映画を見たのはロードショー直後。
ビデオ解禁の直後だったような記憶がありますです。
この後、「恋人たちの予感」でブレイクするメグ・ライアンさまが出演しております。
プレシディオ軍事基地で起こった殺人事件。
この事件の捜査で対立する軍の大佐コネリーさまと市警のハーモンさま。
あるあるって設定でございます。
で、しかも大佐の娘ライアンさまとハーモンさまがつきあったりするもんだから、話がややこしくなってしまうわけですな。
物語そのものは推理サスペンスアクション。
しかし物語の核になるのはやっぱりハーモンさまとライアンさま、ライアンさまとコネリーさま、コネリーさまとハーモンさまのあーだこーだってえ人間関係でございます。
こいつがけっこう面白い。
というか、殺人事件よりもこちらのほうが強烈に印象に残ってしまいます。
で、最後はやっぱり、「男ってええなあ」みたいな終わり方。
「カプリコン１」とか「シカゴ・コネクション～夢みて走れ」なんかは、「友情ってええなあ」みたいな感じでしたが、今回は「世代が離れてても、男どうしってええなあ」系でございますな。
いやあ、ほんま。
男ってええもんでございますな。
って書いてしまいますと、ネタバレになってしまうのですが。
そうです。ライアンさまとハーモンさま、うまくいく。
で、親父、それを許す。
で、ハーモンさまとコネリーさま、理解しあって、男っていいなあと。
だから、いい映画だから見なされ。
ほんま。で、ほんわかしてくださいませ。
パパの採点。１０点満点中７点。
ショーン・コネリーさま、とにかくいいですね。
超あたり役を降りて演技派に転向して、これほど成功した人は他にいないんじゃないでしょうか。
潔くカツラを外したのがよかったんでしょうか。

タイムコップ

１９９４年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　ジャン・クロード・ヴァン・ダム、ミア・サラ、ロン・シルヴァー

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
近未来のお話。
タイムトラベルが可能になり、それと同時に時空犯罪が多発します。
主人公のヴァン・ダムさまは、そんな時空犯罪を摘発する刑事「タイムコップ」なわけでございますね。
時空犯罪を取り締まるタイムコップ＝ヴァン・ダムさま。
彼はかつて最愛の妻を目の前で爆殺されたって暗い過去があります。
ここでいうタイムマシンは、過去には戻れるけれども、まだ確定していない未来には行くことはできないってものです。
ヴァン・ダムさまは大恐慌時代で株で大儲けを企む男を逮捕しようとしますが、それはかつての同僚。
その同僚はろくな裁判もなしにあっさり死刑になってしまいます。
彼の事件の裏に黒幕の存在を感じたヴァン・ダムさまは、タイムマシンシステム計画を推進してきた議員が怪しいとにらみますが…
果たしてタイムコップはこの犯罪を止めることができるのでしょうか。
タイムトラベルものってことになりますと、やっぱり「タイムパラドックス」の問題がでてまいります。
本作も、「ん？おかしいんとちゃうのん？」って設定がけっこう出てきたりなんかしますが、こういう映画でそのへんのことをツッコミはじめたら、物語そのものが成立しなくなっちゃうから、あえてツッコミはしません。
それにしても、うむむ。とほほ。
せめて素人の私にくらいつっこまれないような脚本、準備していただきたかったっすね～
ピーター・ハイアムズ監督の作品をちょこっとおさらい。
監督は「シカゴ・コネクション～夢みて走れ」を撮ったあと、「プレシディオの男たち」撮り、その後「カナディアン・エクスプレス」、「カウチポテト・アドベンチャー」を監督したあと、本作「タイムコップ」のメガホンをとります。
その後、すでにご紹介済みの「サドン・デス」の後、「レリック」を完成させます。
パパの採点。１０点満点中７点。
撮影もしっかりこなすハイアムズ監督、かなり面白い映像を見せてくれています。
タイムマシンの造形はちょっとチープかな。
ここらをもうちょっと凝ってくれたらもっと楽しめたんですが。

クライマックスはやっぱりアクション。
でも同じハイアムズ〜ヴァン・ダムコンビで考えると、「サドン・デス」のほうが面白かったように感じました。

レリック

１９９７年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　ペネロープ・アン・ミラー、トム・サイズモア、リンダ・ハント

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
ハイアムズ監督といえば、「男ってええなあ」系の作品をけっこう撮る監督さん。
そんなハイアムズ監督が、珍しく女性を主人公に撮ったモンスター系ホラーでございます。
アマゾンの奥地に「レリック」ってえ生物がいるって伝説がありまして、ある研究者がアマゾンへまいります。
これが物語の発端。
現地で採取された木の葉がシカゴ博物館の女性研究員、ミラーさまのもとに送られてまいりまして、それと時期を同じくしてシカゴで謎の殺人事件が発生します。
死体は引き裂かれ、脳下垂体がなくなっているなんておぞましい状況だったわけですな。
市警の警部・サイズモアさまは変質者の線から事件を追います。
ミラーさまは木の葉に付着した謎の液体を鑑定。
それはある生物の体液で、ＤＮＡを鑑定した結果、アマゾンに派遣された研究者のものだと判明します。
さらに引き裂かれた死体にも同じＤＮＡをもつ体液が採取されます。
で、だんだんわかってくる。レリックってのは寄生生命体で、ＤＮＡに直接干渉して劇的な生体の変化を起こすなんてことがわかります。
ってあたりで物語の雰囲気はサスペンスからホラーアクションへシフト。
「レリック」に寄生されて獣人と化してしまった研究者との対決が、物語の核になるわけですな。
クライマックスのスペクタクルシーンは出色。
もうこれだけでおなかいっぱいになってしまいます。
前半から中盤にかけて、かなり暗い（物語の雰囲気も、画面も）雰囲気で進んでまいりますが、ひょっとしたらこのクライマックスを際立たせる意図があってあえて暗く撮ったのかも。
パパの採点。１０点満点中７点。
ちょっと点数低め。ハイアムズ監督、だんだん勢いがなくなってきたというか、個性に欠ける職人監督っぽくなってきたというか。
奮起を期待したいところでございます。

エンド・オブ・デイズ

１９９９年アメリカ映画
監督　ピーター・ハイアムズ
主演　アーノルド・シュワルツェネッガー、ガブリエル・バーン、ケヴィン・ポラック

お気に入り監督、ピーター・ハイアムズ監督作品でございます。
えっとねえ。ハイアムズ監督らしくない作品です。
この「らしくなさ」ってのは、けっこう随所に感じることができるわけでございますが。
で、同時にシュワルツェネッガー主演映画らしくない構成でもあります。
シュワルツェネッガー主演映画も、ハイアムズ監督作品も、どこか「おおらか」な空気が流れていて、「たぶんこの主人公は死なないやろうな～」みたいな見方をついついしてしまいがちです。
しかしこの映画に関していいますと、シュワルツェネッガーさまが登場してしばらくした時点で、「この主人公は最後は死ぬんだろうな～」なんて思ってしまう。
シュワルツェネッガー主演作品にしても、ハイアムズ監督作品にしても、こんな雰囲気をもったものがほとんどなかったんで、とりあえずびっくりしました。
１９９９年１２月を迎えたニューヨークが舞台。
要人警護の任についているシュワルツェネッガーさま。
彼は不思議な狙撃事件に遭遇します。
犯人は失踪していた神父だったわけですな。
なんでやねんってことを調べていくうちに、彼は摩訶不思議な事件に巻き込まれていくことになります。
２０００年からの１０００年を支配しようと企んでいる悪の魔王サタン＝バーンさま。
サタンは人間の花嫁を選ぼうとしておりまして、この女性をめぐってシュワルツェネッガーさまとバーンさまが肉弾相打つ戦いを繰り広げることになります。
ガブリエル・バーンさま、けっこう頑張っております。
しかし、演ずるのがサタンだから、どうやってもちょっとしんどいって思われるんじゃないでしょうかね。
シュワルツェネッガーさま、これもがんばっております。
妻と娘をテロで亡くし、自暴自棄になって自らの死に場所を求めている系のＳＰ。
かなりキャラにあわない役ですよね。
とにかくこの設定による悲惨さばかりが目立ってしまって、シュワさまが本来もっている雰囲気が損なわれてしまったような気ばかりする作品でございました。
パパの採点。１０点満点中６点。
うむむ。この作品もハイアムズ作品にしては評価低め。
だってぜんぜんらしくないんだもん。

特撮の冴えは相変わらず。映像そのものもきれいです。
でも大好きな監督のらしくない作品って、評価に困ったりしますよね。

未来世紀ブラジル

１９８５年アメリカ映画
監督　テリー・ギリアム
主演　ジョナサン・プライス、ロバート・デ・ニーロ、イアン・ホルム

お気に入り監督、テリー・ギリアム監督作品でございます。
っていうか、この映画はテリー・ギリアム監督作品だから見たってパターンではありませんで。
このころ、「出番は少ないけども、出演作品には強烈な個性を残す」って感じだったロバート・デ・ニーロさまの出演作品として見まして、結果みごとにはまってしまった作品でございます。
なんか、すっごくブルーになる作品でございます。
主人公のは政府の小役人であります。
近未来の政府ってのは、すべて機械に管理されているわけですね。
で、融通がきかなくて、ガチガチの管理社会になってしまっております。
プライスさまは現実社会のゴタゴタに疲れているみたいなところがありまして、自分が囚われの美女を救うスーパーヒーローになったところを夢想していたりします。
ある日、政府がある書類を発行しまして、処理の途中で役人の一人がその書類の上で蝿を叩きつぶしてしまいます。
コンピューターはそれをそのまま処理してしまい、テロリスト・タトル＝デ・ニーロさまと間違えて、靴屋のバトルさんが逮捕されてしまいます。
プライスさまはこの一件の事後処理を任されるわけですが、その処理がだんだんややこしくなっていって、やがてプライスさまの目の前に本物のタトル＝デ・ニーロさまが現れます。
タトルとつながる犯罪者である可能性を疑われたプライスさま、政府に逮捕され、洗脳されそうになります。
そこでスーパーヒーローになる夢がでてきて、夢と現実が次第に交錯をはじめて、ぐちゃぐちゃになりかけたときに、再びタトル登場…となるわけでございまして。
で、ラストにはささいな幻想ぶっ壊す、めっちゃダークな結末が訪れるってえ仕組みの作品。
ここまで書いていいのかわかりませんが。
ＢＧＭがひらすら明るくて、演出のタッチがけっこう軽いので、そんなに重くならずに見ることができる作品です。
しかし内容を思い出してみたら、けっこう重くてディープな作品ではありますなあ。
パパの採点。１０点満点中９点。
テリー・ギリアムさまって人は、イギリスＢＢＣの人気番組、「モンティ・パイソン」から出てきた人ですよね。
私は中学生くらいのときに「モンティ・パイソン」見てましたが、あのメンバーの中の一人が、こんなに有名な監督さんになるとは夢にも思ってなかったです。

時計じかけのオレンジ

１９７１年イギリス映画
監督　スタンリー・キューブリック
主演　マルコム・マクダウェル、パトリック・マギー、ウォーレン・クラーク

お気に入り監督、スタンリー・キューブリック監督作品でございます。
作品的にはかの大作「２００１年宇宙の旅」直後の作品。
映画の雰囲気とかさすがにちょっと古くさい感じがします。
しかし内容は強烈。
普遍性があって現在にも通ずるメッセージも含まれており、めっちゃダークな気分にさせられてしまう作品です。
さすがキューブリック監督でございます。
暴力と麻薬とセックスに明け暮れる青春を過ごしているマクダウェルさま。
まあ近未来の不良グループですわな。
彼は盗みの最中に仲間の裏切りで警察につかまってしまいます。
彼は服役中、「洗脳実験」を受けることになります。
目を強制的に見開いた状態で、暴力映像とかエッチ映像をひたすら見せられるわけですな。
目が乾いてきたら目薬さす、みたいな。
その強烈な洗脳のおかげで、彼は暴力やセックスを目にすると不快感を感じてゲーゲー吐いてしまう、なんて無害で善良な男になって釈放されます。
そんな彼を待っていたのは、そうです。昔の仲間。
お約束ですな。ボコボコにされてしまいます。
やがて彼は自分自身を変えてしまったその洗脳の非道さを訴え、政府と戦うと。
で、元の残虐な性格に戻ってめでたしめでたし。
めでたしめでたしなのかどうかわからないけども、なんとなくめでたしめでたしって終わりかたでございますね。
とりあえず物語よりも、映画全体を貫くポップなセンスと、音楽感覚に圧倒されます。
「２００１年宇宙の旅」以上にカルト的なファンが多いというのもうなずける傑作。
ではあるんですが、カルト的傑作だけあって、好き嫌いが激しい作品かと思われます。私は好きなんだけど。
パパの採点。１０点満点中９点。
とにかく作品全体の芸術的というかアート的というかポップというか、そんな感覚がとっても良い感じ。
おすすめの作品ではありますが、拒否反応がでてしまうと「なんじゃこりゃ」みたいな印象が残るかもしれませんね。

わらの犬

１９７１年アメリカ映画
監督　サム・ペキンパー
主演　ダスティン・ホフマン、スーザン・ジョージ、ピーター・ボーン

お気に入り監督、今回からサム・ペキンパー監督作品をご紹介してまいります。
ペキンパー監督のかなり前期の作品です。
かの歴史的傑作「ワイルドバンチ」の次に撮った作品でございます。
それまでのペキンパー監督は西部劇ばっかり撮っていたわけですが、監督の初の現代劇ってことで、けっこう注目された作品だったのではないでしょうか。
で、出てきた作品はやっぱり強烈なバイオレンス作品だったわけですな。
アメリカの数学者ホフマンさま。
彼はめっちゃ平和主義者でございます。
どんどん暴力的になっていくアメリカの体制に反発して、彼は妻ジョージさまの故郷イギリスとやってくるわけです。
でもねえ、イギリスの片田舎に越してきちゃったわけで、この片田舎ってのがけっこうバイオレンスシティ。
アメリカの都会のような暴力ではなく、何ていうんだろう、西部劇の舞台っぽい粗暴な田舎町だったわけですな。
ジョージさまは結婚前に恋人だった男につきまとわれ、主人が留守の間にその男にレイプされちゃいます。
そんなことがあったあと、ひょんなことから町のならず者一家に殺されそうになった精神薄弱の男をかくまってしまうことになったホフマンさま夫妻。
男の身柄を渡せと迫るならず者ファミリー。
こうなったら戦うしかないってことで、戦うことを選ぶ平和主義者。
オオマイガーッド。
一人の男が、自分たちを守るために戦いはじめ、やがて自らの暴力性に目覚めていくって様子を、演技派ダスティン・ホフマンさまがたっぷり見せてくれます。
ペキンパー監督の演出以上に、ホフマンさまの熱演が光ります。
スーザン・ジョージさまはええ感じでいやらしい。
っていうか、無神経に色っぽい。
そらなあ、イギリスのむっちゃ田舎町を、アメリカナイズされたムチムチ短パンでうろうろしてたら、そら頭に血がのぼって狙うやつも出てくるやろ。
って犯罪者の側に立って記事書いちゃいけないんだろうけど。
パパの採点。１０点満点中９点。
なんかねえ、めっちゃせつなくなってくる作品です。

主人公夫婦にはめっちゃ同情はするんだけど、こんなんなる前にどうにかできんかったん？とか、なんでこんなんならなあかんの？みたいに、関西弁で訴えたくなるようなせつない映画でございます。
かなり好きな映画です。

ガルシアの首

１９７４年アメリカ映画
監督　サム・ペキンパー
主演　ウオーレン・オーツ、イセラ・ベガ、ギグ・ヤング、ロバート・ウエーバー

お気に入り監督、サム・ペキンパー監督作品です。
サム・ペキンパー監督の、最もサム・ペキンパーらしい映画って何だろうって考えたら、結局「ワイルドバンチ」か、この「ガルシアの首」かってことになるかと思います。
あと「戦争のはらわた」もけっこうそういう系なんですが。
滅びの美学っていうんでしょうか。いや、美学じゃないなあ。滅びの美学って人は言うけど、それって全然美学なんかじゃなくて、どんよりしたもんなんだよ、みたいなことを感じさせてくれるというか。
サム・ペキンパー監督ってね、バイオレンス派とか言われますでしょ？
でも、見ようによっては、「ワイルドバンチ」だとか「ガルシアの首」だとかより、「ランボー」とか「コマンドー」とか、昔の西部劇とか、そういう作品のほうが、よっぽど無機質に人が死んでいきますでしょ？
「ランボー」や「コマンドー」が悪いって言ってるんじゃないですよ。
あれはあれでメッセージがあるからいいと思うんですが、ペキンパー監督って、バイオレンス派の監督だとか言われてるんだけど、むしろ暴力とか死とかを、丁寧に、しっかり捉えようとしているからああなるんじゃないかなって思ったりして。
これくらいのこと、みなさんわかってるでしょうが。
すんげえ大金持ちがおったそうな。
その娘が妊娠したそうな。
娘を妊娠させたのは誰じゃ。
そいつの首を持ってきた奴に賞金をくれてやると、そういうことになりましてですね。
殺し屋だとか賞金稼ぎだとかが、その男＝ガルシアの首を狙うわけですな。
バーのピアノ弾きがオーツさま。彼には恋人ベガさまがおります。オーツさまは嫌がるベガさまを連れて、ガルシア探しをはじめます。
ガルシアってのは事故で死んでいるわけですね。
だからガルシアの墓を探しあてた者が大金を手にすることができるわけです。
で、ああだこうだ。
物語途中でオーツさまは恋人ベガさまを失います。
賞金は彼女と暮らす金にしようと思っていたわけですね。
目的を失いながらもオーツさまはガルシアの首を手に入れるために、撃ちまくり殺しまくり。
で、最後にはめっちゃダークになるラストが待ち受けておりまする。
パパの採点。１０点満点中７点。

ちょっとねえ、強烈すぎます。
嫌いじゃないですよ。
しっかりとした作品だし。でも好きじゃないなあ。
「ワイルドバンチ」とか「戦争のはらわた」は好きなんだけど。
西部劇・戦争っていう、人が大量に死んでも変じゃない状況は許せるのに、この作品は好きじゃないっていうところで、私はすでにペキンパー監督の意図を読み違えているのかもしれないですが。

キラー・エリート（１９７６）

１９７６年アメリカ映画
監督　サム・ペキンパー
主演　ジェームズ・カーン、ロバート・デュバル、ギグ・ヤング、バート・ヤング、ボー・ホプキンス

お気に入り監督、サム・ペキンパー監督作品です。
えっとですねえ、「ゴッドファーザー」の演技で一気に人気俳優グループに入ることになったジェームズ・カーンさまとロバート・デュバルさま競演の作品でございます。
ジェームズ・カーンさまっていうと、最近ではシュワルツェネッガーさまの「イレイザー」なんかに上司役で出演してましたね。
うおおおお、懐かしい～、みたいな感じで見てしまいましたが。
今でこそそんな感じですが、この映画の公開当時は、めっちゃ人気があった俳優さんです。
この映画は中学生くらいのとき、ジェームズ・カーンさまがめっちゃ見たくて見に行った記憶があります。
カーンさまは民間の殺し屋っていうか、スパイっていうか、そういう危ない仕事をする組織の一流エージェント。
デュバルさまは彼の相棒です。
亡命者の身柄保護みたいな仕事があって、二人は無事その男の身柄を保護するわけですが、突然デュバルさまが裏切り、亡命者を射殺。
カーンさまは肩と足を撃たれる重傷を負います。
デュバルさまへの復讐を決意したカーンさまは、大手術を受け、リハビリをこなし、太極拳をマスターするわけです。
ここらのカーンさまがめっちゃかっこよかったですね。
杖とかつきながら太極拳アクションしたりします。
回復したカーンの前にボス＝ギグ・ヤングさまが現れ、新しい任務が言い渡されます。
仕事は命を狙われている要人保護。
暗殺チームの中にデュバルさまがいるって情報を得て、カーンさまはその仕事を引き受けます。
んで、ドンパチがあって、例によってドンデン返しがあって。
この映画がペキンパー監督作品だってこと、長い間知らなかったです。映画の資料とか見てて、とんでもない映画にとんでもない人が出てたとか、意外な作品を意外な人が監督してたりとか、そんなことにけっこう出会ったりして、なんか楽しいです。
でもこの作品、バイオレンスはバイオレンスなんだけど、そんなに強烈なシーンの記憶がないんですよね。
かなり昔に見たせいかもしれませんが。どっちかってえと、あんまりペキンパーらしくない映画かもしれません。

パパの採点。１０点満点中６点。
記憶が古すぎて、めっちゃ評価に困ります。
中学生のころって、なんか残酷な映像をあまり残酷だと感じなかったりするでしょ？
今みたら、きっとバイオレンス描写をちゃんと意識して見るだろうから、めっちゃブルーになるかもしれませんね。
でもやっぱペキンパー監督だし。
近いうちに見直そうと思っている作品です。

バットマン＆ロビン・ミスターフリーズの逆襲

１９９７年アメリカ映画
監督　ジョエル・シューマッカー
主演　アーノルド・シュワルツェネッガー、ジョージ・クルーニー、クリス・オドネル、ユマ・サーマン

この本の元原稿となる、「ブログ形式での映画紹介」をしていたころのオンエアの関係で、こういう並びになってしまいました。嫌いな作品ではありませんが、ペキンパー監督作品と並ぶくらいこの作品が好きってわけではありません。わざわざ書かなくてもいいですが。
シリーズ第四作になって、作品の雰囲気がちょっと明るくなったように感じるのは私だけでしょうか。
これってやっぱり洒落っ気のあるクルーニーさまの個性かなあ。
なんかいつも眉間に皺よせてるようなマイケル・キートンさまとか、いつも悩んでいるように見えるヴァル・キルマーさまより、なんか常に悪戯考えてそうなクルーニーさまのバットマンだから、こんなに明るく感じるのでしょうかね。
まあね、とりあえず過去三作を思うと、ジョーカーとペンギンはやりすぎだし、キャットウーマンは重すぎるキャラだし。
リドラーとトゥーフェイスもちょっとエグかったしね～
そういう意味では、今回のミスターフリーズはコミック調キャラを徹底させようとしたのか、あまりエグさ暗さは感じませんでした。
ゴッサムシティにまたもや怪人登場。
その名もミスターフリーズ＝シュワルツェネッガーさま。
天才原子物理学者が、実験中の事故でこうなっちゃったわけですな。
あと、植物学者が食虫植物の毒に冒されて生まれた悪女ポイズン・アイヴィー＝ユマ・サーマンさまなんかも登場。
この悪人軍団に立ち向かうのは、クルーニーさまバットマンと、オドネルさまロビン。
今回はさらにバットガールなんかも登場。めっちゃ明るくて楽しいです。
私的にはシリーズで一番お気に入りです。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかくシュワルツェネッガーさまもクルーニーさまも嬉々として役を演じているっぽいのが感じられて、それだけでとっても楽しめます。
っていうかシュワルツェネッガーさまやりすぎかも。
とにかくあまり難しいこと考えずに面白くみられた一本でございました。

００７カジノロワイヤル（１９６７）

１９６７年イギリス映画
監督　ジョン・ヒューストン、ケン・ヒューズ、ロバート・パリッシュ、ジョセフ・マクグラス、ヴァル・ゲスト
主演　デヴィッド・ニーヴン、ピーター・セラーズ、デボラ・カー、ウイリアム・ホールデン、ウディ・アレン、ジョン・ヒューストン、オーソン・ウエルズ、ウルスラ・アンドレス

２００６年版のダニエル・クレイグ主演、「００７カジノロワイヤル」とは同じタイトル、同じ原作の全く違う作品ってふうに考えないとあきません。
イアン・フレミングの原作本の第一作で、この一作だけの映画化権をもっていたプロデューサーが、五人の監督と三人の脚本家、超豪華キャストを起用して撮った００７のパロディ映画。
作品の冒頭でいきなりジェームズ・ボンド＝ニーヴンさまはすでに引退しております。
彼のもとにスパイ組織のえらいさん（ヒューストンさまとかホールデンさまとか）がやってきまして、現場復帰を要請します。
敵スパイ組織スメルシュが、米英ソのスパイをどんどん消していってると、そこでスメルシュ壊滅を頼みにやってきたってわけですな。
渋々仕事を引き受けるボンド。
彼はボンド＝００７を敵アジトに何人も潜入させ、本物がどれかわからなくさせるって変てこな作戦をたてます。
アンドレスさまだとかセラーズさまだとかが００７として敵アジトに潜入するわけですな。ここらでだんだんわけわからんくなります。なんせ全部００７なんだけど、００７の活躍をそれぞれ丁寧に描いていきますもんで。スメルシュ最強のスパイがウエルズ。彼はカジノのバカラ賭博で荒稼ぎしております。そこで賭博の名人（っていうんだろうか）セラーズ００７が彼と対決することになります。で、あーだこーだ。結局めっちゃたくさんの００７、みんなして敵につかまってしまうわけですが、敵アジトが００７だらけになってしまってわけわからんくなって、最後には俯瞰の画面ほとんどが００７、みたいな状況になってしまいます。ここらがイギリスっぽいパロディなんでしょうなあ。それでいてラストはけっこうダークな終わりかた。うむむ。テリー・ギリアムっぽい。そういえばテリー・ギリアムもイギリスのコメディ番組「モンティ・パイソン」の出身だもんなあ。これってイギリスっぽい笑いなのかなあ。
パパの採点。１０点満点中７点。
この映画は「００７」として構えて見ました。結果、何じゃこりゃあって感想を持ちましたね。
今なら笑って見られるんでしょうが、中学生くらいの「００７を見たかった少年」にはついていけない内容でございました。
もう一回見たい作品でございますね。

野獣死すべし

１９８０年角川春樹事務所作品
監督　村川　透
主演　松田優作、室田日出男、小林麻美、鹿賀丈史

「遊戯シリーズ」、テレビドラマ「探偵物語」、「蘇る金狼」などで、かっこいいけどどこかコミカル、みたいなキャラクターを演じ続けてきた今は亡き国際派スター松田優作さま。
この作品以降、松田さまはますます独自の路線を進むようになります。
鬼気せまる演技ってのはこういうのを言うんでしょうなあ。
コミカル系の演技を期待していた当時高校生だった私は、そのあまりの強烈さに唖然としてしまいました。
同級生のほとんどみんなが似たような感想もっていたように記憶しています。
戦場をわたりあるき、暴力と血に魅せられた男、伊達＝松田さま。
彼は平穏な毎日を送るふりをしながら、その牙をといでいたわけですな。
まず彼は刑事を殺害して拳銃を強奪、その銃を使って賭場を襲い、現金を強奪します。
彼の次の計画は銀行強盗。
周到に用意を進めるわけですね。一方、殺された刑事の部下室田さまは、犯人の目撃情報から、かなり早い段階で松田さまを疑いはじめています。
松田さまをマークする室田さまですが、彼は美人令嬢の小林さまとデートしたりのノホホンとした毎日を送っておりまして、なかなか尻尾を出さないわけでございます。
松田さまはたまたま知り合った男真田＝鹿賀さまを仲間に加えて鍛え上げ、銀行強盗計画を実行にうつします…
めっちゃ強烈な作品でございます。
何より松田さまと鹿賀さまの演技がすごいです。
途中の二人のかけあいのシーンなんか、どちらも目が普通じゃない。
二人の演技合戦を見るだけでも価値のある作品と言わせていただきましょう。
パパの採点。１０点満点中６点。
えっとねえ、悪くはないんですが、私はやっぱり「遊戯シリーズ」とかの松田優作さまをアニキと慕っておりましたので、この作品の優作アニキはあんまり好きじゃないです。
もう一度見直そうかなあなんて思っております。

１９４１

１９７９年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　ジョン・ベルーシ、ダン・エイクロイド、ネッド・ビーティ、三船敏郎、クリストファー・リー、ナンシー・アレン、ウォーレン・オーツ、ミッキー・ローク

物語の舞台になるのは１９４１年１２月。
かのパールハーバー奇襲攻撃の直後でございます。
西海岸に日本軍の潜水艦が出現。
潜水艦艦長の三船さま、なんとハリウッドを攻撃するつもりでございます。
でも事前の調査不足のおバカな艦長、しかたなくそのへんにいてた兄ちゃんを拉致。
ハリウッドがどこか聞こうとする。
でもその兄ちゃんの名前がたまたまヘイウッドさんだったりしまして、話がドガチャガになったりするわけですな。
もちろんこの潜水艦出現事件とは別に、いろんな事件があったりするわけですが、映画的な仕掛けが一番楽しめたのはここらのエピソードでございます。
ベルーシさまは真珠湾の次の攻撃目標は西海岸だって思い込んでいる飛行機のり。
けっこう危ない男でございまして、この男がまたまた話をややこしくしたりします。
スピルバーグ監督初のコメディです。
コメディなんだけど、物語の運びや粋なセリフで笑わせるのではなく、どっちかってえとパロディシーンなんかで笑わせようとする感じですね。
それが鼻につくとか、あまり笑えないとかって方向で評価されてしまうと、あんまり面白くないって結論になってしまいます。
そういう意味ではけっこう賛否が分かれる作品には違いありませんね。
パパの採点。１０点満点中７点。
コメディもあまり好んでは見ないタイプのジャンルですね～
ただ、私はコメディよりはパロディ映画なんかのほうが好きな人種ですから、むしろパロディシーンのほうが楽しめました。
ベルーシさまとかエイクロイドさまのバタバタとかはちょっとついていきにくかったかな。
しかしながらとりあえず「ブルースブラザーズ」のコンビに一点献上でございます。

必殺Ⅳ・恨みはらします

１９８７年松竹・テレビ朝日作品
監督　深作欣二
主演　藤田まこと、村上弘明、三田村邦彦、かとうかずこ、千葉真一、真田広之

ここらで私の大好きな映画たちをご紹介してまいりたいと思います。
とりあえず日本映画をわわわってとりあげますね。
まずは時代劇。とはいっても普通の時代劇をとりあげないってのがいかにも私らしいなあ。
時代劇で一番好きなのは、すでにご紹介している「将軍家光の乱心・激突」なんですが、その作品とほぼ同じ感じで好きなのがこの作品です。
「この世には、晴らせぬ恨みを金で晴らしてくれる仕事人って奴らがいるそうで」みたいなダークな裏稼業、「仕事人」の活躍を描いた作品。
しかし監督は深作監督。
アクション監督は、おお、サニ千葉でございます。
前述の「将軍家光の乱心・激突」でもアクション監督を務めた千葉真一さま。
ここでもなかなかかっこええアクションを見せてくださいます。
監督・深作さま、アクション監督・千葉さま。
このメンバーで普通の時代劇になるわけないし、ましてや普通の「必殺」映画になるわけありません。
ただでさえテレビドラマ版よりもチャンバラ・殺陣シーンが多い映画版ですが、もう今回は「時代劇の殺陣」を通り越して、ジャパニーズアクションムービーみたいな仕上がりになっております。
まあ考えてみれば主人公の中村主水＝藤田さまはそもそも「剣の達人なんだけど昼行灯を演じている男」って設定ですから、そうとうな剣の名手なわけですが…
それにしてもアクション俳優として絶頂期の真田広之さまとタイマンはれるほどの剣の使い手だとは知らなんだ。
でも中村主水、立ち回りシーンではいつも後ろ向き～
物語を簡単に。
謎の美青年奉行がやってまいります。
これが真田さま。彼の登場とともに町に残虐な殺しが頻発しはじめます。
どうやら真田さまが影でよからぬ動きをしているらしい。
真田さまに殺された者の家族が、仕事人に奉行殺しを依頼します。
で、奉行一味対仕事人の戦いが始まるわけですね。
とにかくアクションだけでも必見。
しかもキャラクター設定は「必殺」のまま。
こんな作品を作ってしまえるくらい、シリーズとしての「必殺」は懐が深かったわけですね。

パパの採点。１０点満点中８点。
私は劇団員時代、二度ほど「必殺」の現場にお邪魔したことがあります。
そんなご縁で９点献上しようかなとも思ったんですが、ここからお気に入り映画がけっこう登場しそうですので、とりあえず８点ってことで。

真田幸村の謀略

１９７９年東映作品
監督　中島貞夫
主演　松方弘樹、萬屋錦之介、あおい輝彦、真田広之、梅宮辰夫、片岡千恵蔵

大好きな映画たちシリーズです。
この映画はねえ、当時、東映で、なんとなくシリーズっぽくなっていたシリーズの中の一本です。
最初の作品は「柳生一族の陰謀」。二作目がこの作品で、三作目が「徳川一族の崩壊」でございました。
劇場公開をリアルタイムで見たのはこの三部作（なのかなあ）の中では「徳川一族の崩壊」だけだったです。
ってことはどういうことかというと、この映画、公開されてしばらくしてからビデオで見たわけです。
とりあえず時代劇。
「とりあえず」ってのがすごいですわな。そもそも作品はコンセプトとして「猿飛佐助が宇宙人だったとしたら…」みたいなところからスタートしているようです。
こんななんでもありなスタートラインをもった作品、普通の映画になるはずなどありません。
冒頭、徳川家康＝萬屋さまの居城・江戸城の上空を巨大な隕石が通過します。
とりあえずこんな始まりかたする時代劇なんか知りません。
豊臣方の刺客が、家康暗殺を企てます。刺客が討ち取ったのは残念ながら影武者。
家康は報復攻撃として、隠れキリシタンだとか忍者だとかを狩ります。
豊臣家から距離をおき、隠れ里で暮らしていた真田幸村＝松方さま。
彼の父＝片岡さまは忍びの者が放った猫（猫の爪に毒が塗っております。おお、生体兵器ではありませんか）にひっかかれて死んでしまいます。
幸村は「草の根のもの」（まあゲリラの意思を持つものって解釈でいいと思います）を団結させ、家康を討とうと心に誓うと。
そんな彼が出会ったのが、猿。
佐助＝あおいさまでございます。
登場シーンでいきなりゴリラのかぶりものかぶっております。
ありえへん。
しかもこの佐助、茶髪リーゼント。
ありえへん。
そんな変な佐助、それでも面妖な術だけは使います。
佐助を仲間にすることに成功した幸村は、それ以降、「こいつは」と思われるメンバーたちを集め、家康暗殺のための精鋭部隊を組織するわけですな。

これが真田十勇士。
ここらへんの解釈がとても面白い。
佐助に面妖な力を鍛えられた十勇士、家康暗殺を行動に移すわけでございます…
パパの採点。１０点満点中８点。
悲しいかな東映作品でございます。
これがもし東宝作品で、特撮を円谷プロなんかが担当していたら、ひょっとしたら特撮映画史に残るような怪作に仕上がっていたかもしれませんね。

白い巨塔

１９６６年大映作品
監督　山本薩夫
主演　田宮二郎、東野英治郎、小沢栄太郎、加藤嘉、田村高廣

大好きな映画たちシリーズです。
社会派ドラマっていうんでしょうか。
医学会、というか、大学病院の内幕を暴いた山崎豊子さまの原作小説を、山本薩夫監督が渾身の映画化って感じです。
この作品に関しては、ちょっと前に連続ドラマで放送されてましたですね。
そちらのほうで内容なんかをご存知の人とか多いんじゃないかと思いますが。
映画ではドラマで唐沢さまが演じていた主人公・財前をいまは亡き名優・田宮二郎さまが演じておられます。
舞台は大阪の国立大学病院。
翌年退官となる教授東野さまの後任人事でちょっとごちゃごちゃするわけですな。
派閥間抗争だの多数派工作だの。
教授選挙の最有力候補の財前＝田宮さまは、その傲慢で不遜な態度のせいで、担当の東野教授からは嫌われております。
しかし腕はピカイチ。
んだもんで、東野さまは別の教授候補を推す。
田宮さま、それに対抗して多数派工作に奔走する。
そんな折、田宮は仲間の助教授里見＝田村さまからある患者の手術を依頼されます。
手術は無事に成功。しかし術後まもなくして、その患者は死んでしまいます。
ここらから物語は、教授選と患者が起こした裁判、二つの事件が並行して描かれます。
えっとねえ、とても長い原作でして、原作では財前が教授になるまでの「白い巨塔」と、そこからあとの「続・白い巨塔」に分かれております。
映画は「白い巨塔」部分の映画化。
しかしこの映画を見に行ったころの私は、「続…」の最後の部分まで映画でやってくれるものだと思い込んでおりまして、物語の展開の遅さにイライラしたことだけ覚えております。
パパの採点。１０点満点中８点。
めっちゃ好きで、９点くらいつけたい作品なんだけどなあ。
もっと好きな作品がでてくることわかってるんで、泣く泣く８点。

華麗なる一族

１９７４年東宝作品
監督　山本薩夫
主演　仲代達矢、田宮二郎、佐分利信、月岡夢路、山本陽子、二谷英明、京マチ子

好きな映画たちシリーズです。
この作品も、昨日の「白い巨塔」と同じく山崎原作・山本監督の社会派ドラマ。
えっと、キムタクさま主演でドラマ化もされた作品ですよね。
あらすじ。
主人公一家万俵家は財閥ですな。
父は佐分利さま。妻月岡さま。長男仲代さま。その妻山本さま。次男目黒裕樹さま。長女は香川京子さまでその夫が田宮さま。
で、長女が酒井和歌子さま。
この一族は、銀行・鉄鋼会社・倉庫・不動産など、阪神地方にめっちゃ強い地盤を持っている一族。
この一族のああだこうだが描かれます。
映画の長さそのものは三時間三十分。
そらねえ、三時間半も時間あったら、いろんなドラマ描けますわ。
物語は彼らの銀行と、自分たちよりも上位になる銀行（頭取は二谷さまざます）との合併話を縦軸に、父佐分利さまと長男仲代さまの親子のあーだこーだを横軸に、どっしりたっぷり描きます。
仲代さま・田宮さま・佐分利さま。
ここらの役者さんがとにかくいいです。
もちろん他の役者さんたちの顔ぶれもけっこうすごい。
こんな超豪華な役者さんたちが同じフレームに入ってしまうわけですから、いやあ、映画の力ってすごいんだなあ。
パパの採点。１０点満点中９点。
映画館に見に行って、いきなり中途半端なところで話が途切れて、休憩のアナウンスが入ったりしました。
休憩のある映画なんて初めてだったから、めちゃびっくりしましたです。
迷わず９点献上。傑作でございます。

金環蝕

１９７５年東宝作品
監督　山本薩夫
主演　仲代達矢、宇野重吉、三国連太郎、京　マチ子、神山　繁、西村　晃、高橋悦史

お気に入り作品をつらつらご紹介しております。
ここんとこ連続してご紹介しております、山本薩夫監督の代表作です。
もちろん「華麗なる一族」も「白い巨塔」も代表作なんだけど、私はこっちのほうが好きですね。
日食のとき、太陽と月と地球の距離の関係で、月のほうが小さく見えて太陽が完全に隠れなかったときに、月のまわりに太陽の輪のような光ができることがあります。
これが金環食。昨年日本でも観測された金環日食と同じ意味です。
辞書で調べたんですが、「金環食」が正しいようです。
で、「食」のところに腐蝕の「蝕」を入れるってのがけっこう意味深な感じがします。
周囲は輝いているが、内部はどす黒く腐っているって意味らしいです。
う～ん。よくできたタイトルですね。
昭和三十年代後半のダム建設にからむ汚職が描かれます。
ダム工事を、総理（永井智雄さま）はＡ建設に受注させたいが、副総裁（神山さま）はＢ建設に落札させたい。
んで足のひっぱりあいや妨害工作や不正な動きやらがあって、官房長官（仲代さま）とかが暗躍して、ごちゃごちゃ。
で、それをかぎつけた業界紙記者（高橋さま）が消されたり、影の金融界のボス（宇野さま）が動いて爆弾質問議員（三国さま）を動かしたり。
政治ってこんなに面白いドラマになるんだって見本のような作品です。
実在の事件をモデルにした作品で、作中の福流川ってのは福井県の九頭竜川なんだとか、冒頭の総裁選で戦ったのは池田勇人と佐藤栄作なんだとか、仲代さま演ずる官房長官のモデルは田中角栄なんだとかは有名な話でございます。
日本演劇界の重鎮だった当時劇団民芸の座長、宇野重吉さまがとにかくいいです。
というより、登場人物ひとりひとりにたっぷり見せ場が用意されていて、役者さんがたの演技合戦を見るだけで十分な値打ちのある作品でございます。
パパの採点。１０点満点中９点。
映画を見終わったあと、「この映画に出会えてよかった…」って思える名画でございます。
この作品、大好きです。

不毛地帯

１９７６年東宝作品
監督　山本薩夫
主演　仲代達矢、山形　勲、神山　繁、田宮二郎、日下武史、山本　圭、北大路欣也、高橋悦史、丹波哲郎

お気に入り作品のご紹介。
山崎豊子原作・山本薩夫監督の一本です。
「華麗なる一族」「金環蝕」あたりと比べると、若干地味な印象がのこる作品。
前二作はほんま、華麗なる群像劇だったですが、今回は主人公・仲代さまの心理とかがメインに描かれておりますので、そういう意味でちょっと地味な印象が残るのかもしれません。
元陸軍将校で、終戦後シベリヤに抑留されていた仲代さま。
彼は帰国後、大阪の商社に迎えられます。
会社が仲代さまに任せたのは自衛隊の次期主力戦闘機の売り込み。
陸軍～防衛庁の人脈を利用しようとしたわけですな。
最初のうちは元陸軍の人たちとかかわる仕事を嫌がっていた仲代さまですが、政治家たちの利権優先の戦闘機選定を目の当たりにし、次第にその仕事にのめりこんでいきます。
こうなると仲代さま、とにかくやり手。
あらゆる手段を使って自社が扱う戦闘機を売り込んでいくわけでございます。
タイトルの「不毛地帯」ってのは、仲代が抑留されていたシベリヤのイメージ。
あまりの寒さに草も木も生えない。このシベリヤのイメージが、作品のあちこちで使われます。
さむざむとした、そして荒涼たる大地。
政治・商社・組織の中もまた、シベリヤのような不毛な土地だっただあ、って思わせる演出でございます。
仲代さまの扱う戦闘機が「ラッキード」。
ライバル商社の担当者、田宮さまの推す戦闘機が「グラント」。
う～ん。かすってる。こんな映画見たら、だれでも「ロッキード」「グラマン」を連想するでしょうに。
ってことはこの登場人物のモデルはあの人で…なんて、「金環蝕」みたいな「現実の事件のモデル当て」みたいな楽しみ方した人も少なくないでしょうね。
パパの採点。１０点満点中８点。
間違いなく面白い映画なんですが、昨日・一昨日にご紹介した二作と比べるとちょっと印象が軽い映画ですね。
惜しいんですが。やむなく８点。

蒲田行進曲

１９８２年松竹作品
監督　深作欣二
主演　松坂慶子、平田　満、風間杜夫、蟹江敬三、清川虹子

お気に入り作品のご紹介。
邦画の監督さんではダントツで好きな故・深作欣二監督の作品です。
つかこうへいさまの人気舞台戯曲の映画化。
主人公のヤスには舞台で同じヤスを演じ続けてきた平田　満さま、銀ちゃんには同じくつか劇団の風間杜夫さまが扮しております。
舞台で小夏を演じた根岸季衣さまは今回は出番なし。かわいそう。
小夏は当時の日本映画界を代表する名女優・松坂慶子さまが扮しております。
タイトルは蒲田行進曲なんだけど、東京・蒲田の撮影所の話ではなく、京都の撮影所の話です。
松竹作品だから、帷子の辻の京都松竹（京都映画って名前です。本当は）が舞台ではないかなと思います。
ちょっと落ち目の人気俳優銀ちゃん＝風間さま。
彼は蟹江監督の次回作・新撰組の映画に賭けております。
彼の役は土方歳三なわけですな。
ところが坂本龍馬役の原田大二郎さまがいいところを全部もっていってしまって、面白くない。
このままでは作品の主役は原田さまのもの。そこで風間さま、自分を慕う大部屋俳優のヤス＝平田さまに、「これをやっちゃたら大怪我間違いなし」ってくらい危険な「階段落ち」をしてほしいと懇願します。
平田さまは、妊娠した「風間さまの愛人」の小夏＝松坂さまを押しつけられてヘラヘラしているようなかわいそうなキャラ。
平田さまは風間さまのため、松坂さまのために、危険な「階段落ち」に挑むことになります…
もおねえ、泣けます。とりあえず泣きたいときはこの映画。若いころ劇団していた関係で、京都にも芝居にも撮影所にも格別の思い出がありますから、いろんなシーンで泣けてしまいますです。
ドラマの世界からいきなり現実に引き戻されるようなラストもとにかく大好き。
スタッフキャストの映画への特別な思いがひしひしと伝わってくる一本です。
パパの採点。１０点満点中１０点。
やっぱり満点ですね。
この映画は。途中、平田さまが松坂さまの出産費用を稼ぐために危険なスタントシーンに挑む場面がありまして、そこでアクションスター役として千葉真一さま・真田広之さま・志穂美悦子さまが特別出演されています。
これはこれで時代を感じてしまう演出ですよね。

復活の日

１９８０年角川春樹事務所作品
監督　深作欣二
主演　草苅正雄、緒形 拳、オリビア・ハッセー、渡瀬恒彦

お気に入り作品のご紹介。フェイバレットディレクター、深作欣二監督の作品です。
文庫本と映画の強烈なコラボレーションで日本映画に革命（？）をもたらした角川映画の作品。
原作はＳＦ小説界の重鎮・小松左京先生です。
細菌兵器として開発された驚異的な致死率をもつ殺人ウィルスを積んだ飛行機が、事故で墜落。
ウィルスはじわじわと蔓延し、人類のほとんどが死滅してしまいます。
残されたのはウィルスが生存できない環境の、南極に残された人々だけ。
しかし、ソ連の無人報復ミサイルが作動し、わずかに残された人類さえも破滅の危機にさらされます。
わずかに残った人類を救う方法は一つ。
ウィルスの蔓延する「北」に向かい、ミサイルの発射を止めることでした…
原作小説で活字的に印象に残ったエピソードとかがけっこうバッサリ切られておりまして、映像的にインパクトのある「ミサイル発射後」が丁寧に描かれておりました。
しゃあないか。緒形 拳さま演ずる医師の場面がとにかく印象に残っています。
出演時間こそ少なかったですが、やはり名優をええところで起用すると作品に重みが出ますよね～
草刈さまも頑張っておられますが、この人の最高の名演技は「世にも奇妙な物語」の「ズンドコベロンチョ」だと信じておりますので、うむむって感じ。
申し訳ありませぬ。
しかしＳＦもアクションも時代劇もヤクザ映画もきちんとこなす、深作監督の懐の深さには驚かされます。
深作監督のその他のＳＦ作品は、「ガンマ３号・宇宙大作戦」「宇宙からのメッセージ」など。
うむむ。ほんますごい監督さんです。
パパの採点。１０点満点中７点。
大好きな監督さんの作品ですが、原作が大好きなものだっただけにちょっと期待外れって印象が残りました。
しかし「ミサイル発射」からクライマックスにかけての映像美はさすがって感じです。

上海バンスキング

１９８４年松竹・テレビ朝日作品
監督　深作欣二
主演　松坂慶子、風間杜夫

お気に入り作品のご紹介。
これまたフェイバレットディレクター、深作欣二監督の作品です。
そもそもこの作品、串田和美（昔は作演出名が串田和美で、役者のときは藤川延也さんでした。今では役者名も串田さんになっていると思います）さま・吉田日出子さまが所属する「オンシアター自由劇場」の当り舞台の映画化です。
原作戯曲は斎藤憐さま。「自由劇場」の舞台では、劇団の役者さんが実際にブラスやバンド演奏を行うってのが話題になり、再演を重ねるうちに劇団員のみなさんがだんだん演奏が上手になっていった、みたいな話が話題になりました。
バンスってのは「前借り」って意味です。タイトルは「上海前借り王」って感じでしょうか。
前借りってのはもちろん給料の前借りって意味ともう一つ、「夢の前借り」って意味も込められております。
上海で夢をバンスするジャズメンたちの希望と挫折が壮大なスケールで描かれます。
戦争の暗い影が漂う上海。
ジャズのバンドマン風間さまは、妻の松坂さまとともにパリに向かう途中、上海に立ち寄ります。
ってことになってますが、実は風間さまは最初から上海でジャズをやるつもりでやってきたわけですな。
風間さまは上海に着いた早々トラブルに巻き込まれ、ひどい目にあいそうなところを地元の中国人の顔役に助けられます。
その顔役、自分の店のバンドマンとシンガーを探していたわけでして、うちの店で働くなら多目にみてやる、みたいなことになります。
松坂さま、夫のためにクラブのジャズシンガーになるわけですね。
風間さま、ジャズと酒の日々を満喫しますが、そこにもしだいに戦火が迫ってきます。
そんな中で、二人の「夢」の幕切れが、静かに描かれるわけですな。
「蒲田行進曲」と同じく、舞台戯曲が原作なんですが、こちらは「蒲田行進曲」のような明るいラストにはなりませんでした。
ちょっとどんよりした感じ。見終わったあとの爽快感って意味では、オンシアター自由劇場の舞台のほうがよかったです。
パパの採点。１０点満点中８点。
厳密な意味での映画ではありませんが、吉田日出子さま・串田和美さまらオンシアター自由劇場のメンバーによる「上海バンスキング」のビデオもあります。

こちらはかなり舞台に近いノリで作られております。
深作監督版と見比べるのも面白いかもしれません。

火宅の人

１９８６年東映作品
監督　深作欣二
主演　緒形　拳、いしだあゆみ、原田美枝子

お気に入り作品のご紹介。やはりフェイバレットディレクター、深作欣二監督の作品です。
壇一雄さま…皆様ご存知でしょうか。
作家さんなんだけど。
壇ふみさまのお父さん。
壇ふみさまってご存知でしょうか。ＮＨＫの「連想ゲーム」なんかに出演してたタレント女優さんなんですが。
今では壇一雄さんのほうが有名かもしれませんなあ。
しかし、この映画が封切りされたころは明らかに壇ふみさまのほうがメジャーでございました。
その壇一雄さまの自伝的小説を深作監督が映画化した作品でございます。
作家さんの自伝的小説だもんで、もちろんアクションとか皆無です。
私が知っている中では、深作作品の中で一番地味な映画。
でもね、その分圧倒的な映像美が楽しめる作品です。
「火宅」ってのは文字通り「火事のお宅」。
火事の家のようにバタバタとしていて、悩み事が絶えない。
そんな勢いで恋愛に生きる人を描くって感じで映画を見ていただいたらいいかと思います。
主人公の一雄＝緒形さまは妻に先立たれ、後妻を迎えます。
平和に過ごされる日々。しかし子供の一人が病気で高熱をだし、それが原因で障害児となってしまいます。
妻はそれがもとで宗教にかぶれてしまいます。
緒形は女優・原田さまと同棲することになります。
緒形さまと原田さまが日本全国を旅してまわる場面があるわけですが、もう、圧倒的な映像。
すげえって思ってしまいました。
深作監督渾身の演出。なんかねえ、日本の四季の空気だとか温度だとかが伝わってくるような美しい映像。
こんな映像を深作監督が撮ったってことにとりあえずびっくりしてしまいました。
で、結局、緒形さまと原田さまは別れて、緒形さまは家庭に戻る。
ほんわかしたラスト。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかくコミカルにも感じられる緒形さまの名演技が光ります。
もう、やたら巧い。この人、どうしてこんなに巧いんでしょうか。
悪役やらせても、善人やらせても一級品です。

「孔雀王」とか「影の軍団・服部半蔵」なんか見たときはびっくりしましたが。
それでも存在感はピカイチだったしなあ。この映画に関しては緒形さまの名演技に 1 点献上させていただきましたです。

忠臣蔵外伝・四谷怪談

１９９４年松竹作品
監督　深作欣二
主演　佐藤浩市、高岡早紀、渡瀬恒彦、津川雅彦、石橋蓮司、荻野目慶子

お気に入り作品のご紹介。
これでもかのフェイバレットディレクター、深作欣二監督の作品です。
物語はタイトル通り、四谷怪談と忠臣蔵の強引なコラボ。
四谷怪談の主人公、民谷伊右衛門＝佐藤さまは実は赤穂浪士の一人だったんだってお話。
お家断絶となった赤穂藩の元藩士・民谷＝佐藤さま、堀部＝渡瀬さまらは、四谷の長屋に住みながら、大石＝津川さまらとともに吉良邸への討ち入りの機会を狙っていたりします。
佐藤さまには妻がおりまして、これが岩＝高岡さま。
高岡さまのお腹の中には佐藤さまの子供がおります。
ある日、街角で琵琶を弾く佐藤さまの姿に惚れてしまった姫様がおりまして、これがなんと吉良家の重臣の娘＝荻野目さま。
佐藤さまは討ち入りの大願を捨て、荻野目の家に婿入りして仕官しようとするわけですな。
荻野目さまの家の者たち（石橋さま・渡辺えり子さま・蟹江敬三さまあたりです）は、高岡さまに毒を飲ませ、殺してしまいます。
さあさここから怪談スタート。
おなじみの怪談エピソードから、あっと驚く流れで討ち入りのシーンへシフト。
巧い演出でございますなあ。
赤穂浪士の討ち入りに、お岩さんと民谷がうろうろするって半端じゃないインパクトのある映像が楽しめます。
もう、めっちゃ面白い。
こんな面白い時代劇、そうそう見られるもんじゃないですぜ。
パパの採点。１０点満点中９点。
アイデアの勝利ですね。めっちゃ面白い。
出演陣も、深作作品にふさわしい、芸達者な役者さんばかりです。
キャスティングと原作プロットだけでほとんど作品は成功したようなもんなんでしょうが、それを深作監督が演出したりするもんですからね～
時代劇映画の歴史的傑作と勝手に評価させていただきたいと思いますです。

ＨＯＵＳＥ・ハウス

１９７７年作品
監督　大林宣彦
主演　池上季実子、大場久美子、松原　愛、小林亜星、鰐淵晴子、南田洋子

お気に入り作品のご紹介。
これまたフェイバレットディレクター、大林宣彦監督の作品です。
独特で癖のある映像で知られている大林監督。
ＣＭ界から商業映画に参入したのはこの作品が初めてになります。
この映画のポスターとか、見る機会があったら見ていただいたらわかるかと思いますが…めっちゃわかりやすいポスターです。
家のイラストが書いてあって、その家のドアに牙が生えていて、そこからべろーんとでっかい舌が出ている。
もうおわかりでしょう。
「人を食う家」の話。
かといってすごく普通のホラーになっているかというとそうでもない。
幻想的でテレビ的なホラー作品に仕上がっております。
池上さまら仲良し高校生たちが、夏休みに池上の叔母、南田さまの家に遊びにいくわけですね。
もうあからさまに怪しくて気味悪い洋館でございます。
女の子たち、キャピキャピしながら、短パンとかミニスカートとかではしゃぎまくっております。
そんな女の子たちが、一人また一人と、「家」に食われていくわけですな。
最後のほうになって南田さまってのはもう死んでいて、亡霊になって来訪者を食いながら若さを保っていたのだあ、みたいな話が明らかになって、きゃあああああってなって終わると。
まあそんな話でござんす。
まあポスターとキャスト見たらだいたい話はわかるでしょうが。
というより、この映画は物語は筋立てなんかはむしろどうでもいいのであって、とにかく大林監督の独特の映像手法を堪能していただければいいかなって作品です。
大林監督はこの後、ブラックジャックの映画化作品などのメガホンをとったあと、かの「尾道三部作」を完成させます。
パパの採点。１０点満点中７点。
この映画を見た当時の私は、めっちゃホラー映画にはまっていた時期だったように記憶しております。
この映画もね、だいたい同時期に公開されたオリバー・リードさま主演の「家」みたいな正統派ホラーを期待して見に行きましたので、ちょっと肩すかしくらったような記憶があります。
んでもって大林作品を見たのって、この映画が最初だったし。

だからどっちかというと、「何この映画？」って印象だけが残ってしまって、あまり高い評価しておりませんでした。
ちゃんと見直したい作品です。

転校生

１９８２年作品
監督　大林宣彦
主演　尾美としのり、小林聡美、佐藤　允、樹木希林

お気に入り作品のご紹介。
フェイバレットディレクター、大林宣彦監督の作品です。
大林作品の中では私的最高傑作であります。
大林監督がとにかくこだわっている尾道。
そこを舞台にした尾道三部作の第一作。シリーズはこのあと「時をかける少女」「さびしんぼう」と続きます。
さて「転校生」。
主人公の尾美さまは中学生でございます。
８ミリなんぞを愛する、ちょっとエッチで元気な普通の男の子。
彼の学校に一人の女の子が転校してまいります。それが尾美さまの幼馴染の小林さま。
けっこうかわいい。キュート系。
ここで小林さまがキュートでかわいければかわいいほど、後半のドラマが生きてくるわけですね。
尾美さまも同じ。彼が元気であればあるほど映画は面白くなります。
幼馴染の小林さま、なにかにつけ尾美さまにつきまとう、ちゅうかかわいくからかったりするわけですね。
二人が町はずれの神社に通りかかったとき、事件が起きちゃう。からかう小林さま、それを邪険にする尾美さま。
ふとした拍子に、バランスを崩した小林さま、神社の石階段からおっこちそうになります。
彼女を助けようと手をのばす尾美さまですが、不運なことに彼も巻き添えになって小林さまといっしょに石段をころげ落ちることになります。
ごろごろごろ。
ここらの映像、めっちゃいいです。
石段の下でしばらく倒れていた二人、それぞれの家に帰る。
しかし、ちょっと変。
なんと、階段をころげ落ちた拍子に、小林さまと尾美さまの心と体が入れ替わってしまいます。
尾美さまの身体で心が小林さまの男の子。
心は尾美さまなんだけど身体が小林さまの女の子。
もう、ここからは尾美さまと小林さまの演技合戦です。
演技派の天才少年と天才少女、尾美としのりさまと小林聡美さま、どちらもとにかく巧い。
二人は相談して、お互いの家族に心配をかけないようにってことで、それぞれお互いの家で暮

らすってことになるわけですな。
やがて尾美さまが家庭の都合で引っ越すことになってしまいます。さあさどうなる…
大林監督の技量を見せつけた感のある本作、ただ、やはり尾美さま・小林さまの巧さが圧倒的。
もちろん彼らをキャスティングした監督の目、彼らをみずみずしく撮りあげた監督の技量も確かだったわけですよね。
パパの採点。１０点満点中９点。
小林聡美さまは確か「金八先生」デビュー組だったと思います。
ドラマではあまり目立ってなかったような気がしますが。
まあ、後にＶ６の中心メンバーになる長野君だとか、今では名優の浅野忠信様なんかも三年Ｂ組卒業生ですからね。
このドラマで目立つ目立たないってのはあまり関係ありませんかね。

さびしんぼう

１９８５年作品
監督　大林宣彦
主演　富田靖子、尾美としのり、藤田弓子、小林聡美、樹木希林

お気に入り作品のご紹介。
今回も大林宣彦監督の作品です。
尾道三部作の第三作。
ほんまねえ、ええ作品です。なんていうんだろう。画面全体からやさしいオーラが流れだしてくるというか。
富田靖子さまがねえ、とにかくかわいい。
この人、つい最近、すごく久しぶりにドラマで見ました。
えっと、主人公は尾美としのりさまでございます。
彼はお寺の跡取り息子。本当はカメラ小僧なんだけど、親にうるさく言われてピアノの練習に明け暮れるみたいな子。
彼には気になる女の子がおります。これが富田さまね。彼女、いつも寂しげな顔をしているので、尾美さま、彼女のことを「さびしんぼう」って呼んだりしております。
でもなかなか気持ちを伝えることができない。
うんうん。わかるよ。青春やなあ。
やがて彼の目の前に謎の女の子が現れるようになるわけですね。
なんかピエロみたいな女の子。「さびしんぼう」って名乗ります。
これも富田さま。二役でございます。
このねえ、「さびしんぼう」のほうの富田さまがめっちゃええんですわ。
表情とか、仕草とか、抜群でございます。
「さびしんぼう」は何かと尾美さまにかまってくるわけですな。この「さびしんぼう」ってのが誰なのかみたいなプチ謎がだんだん大きくなっていくわけですが、その謎が映画後半になって一気に解決していくあたり、さすがの展開でございます。
途中に出てくる小林聡美さまと樹木希林さまがめっちゃ強烈。
おいしいところもっていくキャラってこういう人たちのこと言うんでしょうね。
パパの採点。１０点満点中８点。
かなりいい映画。好きな作品ではあるのですが、やはり大林作品では「転校生」「ふたり」が圧倒的なマイベストでございまして、この「さびしんぼう」はやっぱりちょっとだけ落ちますかね。
いい映画なんだけど。富田靖子さまかわいいし。残念だなあ。

青春デンデケデケデケ

１９９２年作品
監督　大林宣彦
主演　林　泰文、大森嘉之、浅野忠信、岸部一徳

お気に入り作品のご紹介。今日も大林宣彦監督の作品です。
この作品は、「尾道三部作」と「新尾道三部作」の中間くらいの時期に撮った作品ではないかと思います。
このタイトルを見て、まさかベンチャーズのギターの「デケデケデケデケ」だとは思わずに、電車の「デケンデケン、デケンデケン」のことだと思い込みまして、鉄道少年の映画なんだと勝手に思っておりましたです。
タイトルになっているのは、ベンチャーズの「パイプライン」の「デケデケデケ」って音でございます。
映画そのものはあまり起伏のある物語ではなく…
というか、中学時代からバンドをやっていた私からみるとめっちゃ普通の青春時代が描かれます。
あったもんなあ、こんな話。
ってエピソードが積み重ねられて一本の映画になった感じです。
主人公が昼寝をしておりましたらですねえ、ラジオから流れるベンチャーズのギターの「デケデケデケデケ」って音に「電気的衝撃」を受けまして、ギターを買って、バンド作って、恋をして、うまくなるために合宿して、片思いのメンバーのために音楽室でミニコンサートやって、クラブみたいなところでバイトやって…
で、文化祭でコンサートやって。
なんかねえ、自分の青春時代そのまま映画にしてくれたような気がして、後半なんか涙が止まらなかったりしました。
でも映画のタッチはきわめて明るめ。
寸劇みたいな演出が入ったり、ミュージカル仕立てになったり。
うんうん、大林監督らしいといえばらしい演出手法でございますね。
えっとね、とにかくいいのが岸辺一徳さまでございます。
なんかねえ、鬼気迫る演技見せてくれています。
なんかここでも涙出ちゃったなあ。どこの場面のことを言ってるか、映画を見られた人ならおわかりだと思いますが。
パパの採点。１０点満点中９点。
とにかくこういう系統の映画は反則でございます。「青春デンデケデケデケ」「蒲田行進曲」「リトルダンサー」、このへんの、私の人生とリンクする要素が多い作品は、もうだめですわ。
涙腺ゆるゆるになってしまいます。

もうちょっと年とって、もし小説売れたりしたら、どんな作品で涙腺ゆるゆるになるんでしょうか。
「火宅の人」かなあ。「ミザリー」だったらいやだなあ。

天国と地獄

１９６３年作品
監督　黒澤　明
主演　三船敏郎、仲代達矢、香川京子、木村　功、加藤　武、三橋達也、山崎　努

お気に入り作品のご紹介。
今日から巨匠黒澤　明監督の作品。
日本映画のクオリティの高さを世界中に見せつけた大監督でございますね。
しかしながら、私は黒澤作品、そんなに見てないんですよね。
この作品と、あとは後期、「デルス・ウザーラ」以降の何本かしか見ておりません。
本当は、アーリーな時期の作品とか集中的に見たいんですがね。
近いうち、時間つくって見てみようかなあ。
さて「天国と地獄」。
原作はエド・マクベインさまの「キングの身代金」でございます。
シューズメーカーの重役、三船さまの運転手の息子が誘拐されます。
もちろん犯人は三船さまの息子と運転手の息子を取り違えたわけです。
犯人は三千万の身代金を要求します。連絡をうけて警部＝仲代さまが登場。
こいつがまたすんごい冷静な人です。とりあえず人質の安全を確保してから犯人逮捕の手段を考えようって作戦でございます。
犯人は三船さまに新幹線に乗れと指示します。警察の捜査をかいくぐるように犯人は金を奪って逃走。
幸いにも誘拐された子供は無事戻ります。
さあ、ここから警察と犯人の知恵比べが始まるわけですね。
次第に捜査の手が迫りつつあることを察知した犯人は、共犯者を始末しようとしますが、逆にそれが警察に決定的な証拠を残すことになります…
タイトルの「天国と地獄」は、クライマックスの犯人のセリフからとられております。
驚異的なクオリティの作品。しかし、この映画の誘拐トリックを模した事件が実際に起こり、最悪の結果となったことにより、ショックのあまり監督がしばらく映画を撮ることができなくなったってえのは有名なお話でございます。
パパの採点。１０点満点中９点。
三船敏郎さま、仲代達矢さま、山崎　努さま。
作品中で三つの極を形成する三人の名優の演技がたまらないです。何度でも見たくなる傑作でございます。

影武者

１９８０年東宝作品
監督　黒澤　明
主演　仲代達矢、山崎　努、萩原健一、大滝秀治、室田日出男

お気に入り作品のご紹介。
巨匠黒澤　明監督の作品。武田信玄の影として生きることになった男を、壮大なスケールで描きます。
「風林火山」の軍として知られる甲斐の武田軍。
その総大将・武田信玄＝仲代さまはすでに死んでいるのではないかとのうわさが流れます。
その噂は真実でありましてですね。信玄は徳川家康の居城を攻めているときに、狙撃されて亡くなっているわけです。
信玄は死ぬとき、「自分が死んだあと、三年間は自分の死を隠し、守りを固めて動くな」と言います。
んだもんで信玄と瓜二つの弟、信廉＝山崎さまが影武者を務めていたわけですな。
しかし信玄と信廉が並んでいる構図が必要なわけで。
信玄が生きていると周囲に信じさせるためには、もう一人の影武者が必要となるわけです。
新廉は盗人で、信玄にそっくりの男を影武者に仕立て、遺言を守ろうとするわけですね。
側近たちも影武者を信玄として扱います。面白くないのは信玄の息子、勝頼＝萩原さま。
折りしも徳川の攻勢が始まろうとしておりまして、主戦派の勝頼は守りに徹しようとする他の重臣たちと対立。
独断で兵を動かします…
さてさて、武田軍の運命やいかに。
さすが黒澤監督。さすがの映像美です。画面の隅々にまで目の行き届いた、すんげえ戦国絵巻が繰り広げられます。
すごいなあ、すごいなあとひたすら感動してしまった作品でございます。
パパの採点。１０点満点中９点。
この映画の主演は、当初、勝　新太郎さまでした。で、山崎さまの役が若山富三郎さま。でもこうなっちゃった。
黒澤監督と勝新さま、撮影開始直後にやっちゃったたわけですね。
勝さま、多少のことがあっても自分がおろされるとは思っておられなかったようで。
でも、勝さまクラスの、しかも主役を簡単に変えてしまうってあたりがやっぱり黒澤監督のすごいところなんでしょうなあ。
まあ肖像画などで見る武田信玄のイメージって間違いなく仲代さまじゃなくて勝さまですから、完全主義の黒沢監督であればなおさら、勝さまを説得するべきだったんじゃないだろうか、なんて思ったりもしますが。

勝さまヴァージョンの「影武者」、見たかったです。
セット撮影の宣伝用予告編を見た記憶がありますが、なかなかでした。期待していただけに残念です。

乱

１９８５年東宝作品
監督　黒澤　明
主演　仲代達矢、根津甚八、寺尾　聡、隆　大介、ピーター

お気に入り作品のご紹介。
これまた黒澤　明監督の作品。シェイスクピアの「リア王」を戦国絵巻風に翻案した超大作。
黒澤作品には、かつて「マクベス」を翻案した「蜘蛛巣城」なんて傑作がありましたですね。
舞台だと蜷川さんの「ＮＩＮＡＧＡＷＡマクベス」なんかがありましたが。
逆に「用心棒」だとか「七人の侍」なんかは「荒野の用心棒」だとか「荒野の七人」なんかに翻案されましたですね。
今回の物語は、毛利元就の「三本の矢」のエピソードと「リア王」の物語を豪快にシンクロさせた物語でございます。
仲代さまが演ずるのは老将・小早川秀虎。
すごい名前ですなあ。小早川秀虎やて。このお殿様が、引退して息子たちに家督を譲るってことになります。
父は三本の矢の話をして、三人の兄弟たちで力をあわせて小早川家を盛り立てていくようにって話をするわけです。
長男次男（根津さま・寺尾さま）はなんとなく話を聞いているふりをしたので、父から城を賜るわけですな。
三男は「父上、甘いですぞ」みたいなことを言って父の怒りを買い、追放されてしまいます。
ところがところが、長男の嫁さんは過去に秀虎＝仲代さまに親兄弟を滅ぼされた恨みがありまして、夫を操縦して小早川一族を戦わせ、滅ぼそうとするわけですね。
で、次男は次男で、長男の城を手に入れようと動き始めます。
かくして秀虎＝仲代さま、リア王と同じ運命をたどるわけでございます。
シェイクスピア演劇で重要な役目を担う「道化」ですが、今回はその難役にピーターさまが挑戦。
とっても素晴らしい演技をしておられます。
パパの採点。１０点満点中８点。
題材が題材だけに、とっても重い気分が残ります。
こいつはまあ仕方ないところですわな。
しかしですなあ、クライマックスで主人公二人が死んでしまってからがちょっと長いような気がしましたね。
最後の石垣のところのエピソード、必要だったのかなあ。ちょっと私にはわからないですけど。

竜二

１９８３年作品
監督　川島　透
主演　金子正次、永島暎子、もも、北　公次、佐藤金造

お気に入り作品のご紹介。
伝説の名優、金子正次さまの主役デビュー作にして遺作。
えっと、金子さまは１９８４年の日本アカデミー賞新人賞を受賞しましたが、そのときすでに故人だった金子さまに向けて、プレゼンターの大島渚監督が泣きながら、「（今後も日本映画のためにがんばってくださいという祝辞を）金子君に伝えられないのが残念だ」って言ったことをよく覚えております。
主演・脚本が金子正次さま。
ただ、脚本は別名義で書いております。
金子さま、この作品を撮りまして、次回作の「ちょうちん」のシナリオを書きあげた後、癌で他界します。
主人公の竜二＝金子さまは、ヤクザのえらいさんです。
今は肩で風きるような羽振りの良い男なんですが、彼はかつて拘置所に入れられましてですね、その保釈金を妻・長島さまの両親に出してもらったりした過去があります。
妻の両親がその保釈金を出してくれた条件っていうのが二人の離婚だったわけですな。
しかし竜二も、年をとるにつれてヤクザ生活に物足りなさを感じるようになるわけですね。
妻に会いたい、子供を抱きたい。
そんな気持ちで、やがて彼はカタギになることを決意します。
両親・妻・子供、みんな竜二がカタギになったことを喜びまして、ここから竜二にとっては貧しいが楽しい生活が始まります。
そんな竜二の生活を変えることになったのは、かつての兄弟分の訃報だったわけです。
シャブ中になった兄弟分にわずかな金さえ工面してやることができなかった自分。
その兄弟分が死んだときを境に、彼は仕事を休みがちになり、妻との喧嘩が絶えなくなり…
そしてついにはヤクザの道に戻っていきます。
って簡単に書いてしまいましたが、元ヤクザのカタギの男が、次第にまたヤクザの道に戻ってしまうってあたりの心理を積み重ねる描写が実に巧みで、このへんの描写の秀逸さがこの作品に重みと深みを与え、それゆえに日本映画史に残るヤクザ映画の傑作として評価されることになったのではないかと思います。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかく金子正次さまがめちゃめちゃいいです。
本当に、この人の作品をもっと見たかったと思います。

時代屋の女房

１９８３年作品
監督　森崎　東
主演　渡瀬恒彦、夏目雅子、津川雅彦、平田　満

お気に入り作品のご紹介。
村松友視様の原作小説の映画化。
この作品の主演女優の夏目雅子さまもまた、昨日ご紹介した金子正次さまと同様、若くしてこの世を去られた名優でございますね。
この作品が映画化されたときの「こぼれ話」みたいなエピソードがありましてね。
当時のこの作品の森崎監督、ほとんど役者さんに演技の指示をしない監督さんだったようで。
夏目さま、摩訶不思議な女、しかも二役にかなりご苦労されたようでございます。
なんでも、最後まで悩みながら役作りされておられたご様子。
しかしそれがために、とらえどころのない、不思議な、それでいて透明感すら漂う「女」が表現されております。
東京の下町で骨董品屋「時代屋」を営む男。
これが渡瀬さま。
彼の店に真弓＝夏目さまって女がころがり込んでくるわけですな。
で、居ついてしまう。で、ふいっといなくなったかと思うと、しばらくしてまた帰ってくる。
猫みたいですな。
本当に子猫かかえてやってくるわけですが。
真弓がふいといなくなっている間に、美郷＝夏目さま（二役）って女性が現れます。
彼女も時代屋のマスターにとっては通りすぎるだけの女性なわけですが。
この美郷って女性が登場したあたりで観客はまるでわからなくなるわけでして。
真弓は美郷と同一人物なんじゃないかとか、そうじゃないんじゃないかとか、ひょっとして双子？とかまさか多重人格？とか。
夏目雅子様もどう演じるべきなのか、演じ分けるべきなのかそうじゃないのかわからずに演技している、みたいなところが見てとれて、観客もまた監督の演出と夏目さまの演技に振り回される、みたいな展開になってしまいます。
で、結局美郷＝夏目さまは時代屋から出て行き、それからしばらくして何事もなかったように真弓＝夏目さまが戻ってくる。
なんかむじなに化かされたような不思議な話でございます。
夏目雅子さまが演ずるこの二人の女ってのが何かを象徴しているのか、いないのか。
さっぱりわからなかったですが、年をとって当時の森崎監督の年齢に近くなった今なら、この作品の意味みたいなものがもっと感じ取ることができるんじゃないかなって思ったりします。
パパの採点。１０点満点中７点。

渡瀬さま・夏目さまはとにかくすばらしいですが、共演の津川雅彦さまの演技も素晴らしかったです。
しみじみと見てしまう一本ではないかと思います。

瀬戸内少年野球団

１９８４年ヘラルド作品
監督　篠田正浩
主演　山内圭哉、大森嘉之、佐倉しおり、夏目雅子、大滝秀治、加藤治子、郷ひろみ、岩下志麻

お気に入り作品のご紹介。
これまた夏目雅子さまが素晴らしい演技をされている映画でございます。
監督は名匠篠田正浩監督。
とにかく情感いっぱいの作品を撮らせたらこの人の右に出る人はいないんじゃないでしょうか。
まあ「少年時代」の世界です。この映画も。
終戦直後から物語は始まります。
終戦直後ですから、小学生の主人公たちにとってはあらゆる価値観が一瞬にして崩壊するわけですね。
それまで軍人になることを夢見ていた少年たちは、これから何をすべきなのか、どう生きるべきなのか、どうなりたいのかがわからない日々を過ごすことになるわけです。
それは大人たちにとっても同じことだったりして。
そんな淡路島の小学校に一人の転校生がやってくるわけです。
女の子で、名前は武女（むめ）＝佐倉しおりさま。
彼女は海軍提督の娘でありまして、父が裁判を受けている間、遠い身寄りを頼ってこの島にやってきたらしいってことがわかります。
大人たちの間には、米軍と仲良くして羽振りの良い者もいます。
そういう人が子供たちにキャンデーを配る。
そんな大人たちの姿を見て、先生＝夏目さまは子供たちに野球を通じてフェアプレーの精神を教えようとするわけですな。
その先生にも、戦地に言ったまま帰らない夫・郷さまと、彼女に思いをよせる弟・渡辺　謙さまとの板挟み、みたいな状況があったりして。
で、あーだこーだのことがあったあとに郷さまが帰ってきたりして、その郷さまは戦地での負傷で松葉杖をついているけれども元野球の名手だったりして。
で、ラストはやっぱり別れ。
井上陽水さまの「少年時代」が流れて欲しいエンディング。
やっぱり泣いちゃいましたよ。この映画見たとき。
パパの採点。１０点満点中９点。
この映画で一番オイシイところを演じた少年、バラケツ役の大森嘉之さまですが、執筆にあたってちょこっと調べてみたら、ちょうど数回前にご紹介した「青春デンデケデケデケ」の「寺の息子」役の人でございました。
ちょっとびっくりしてしまいました。

鬼龍院花子の生涯

１９８２年東映作品
監督　五社英雄
主演　仲代達矢、岩下志麻、夏目雅子、仙道敦子、佳那晃子、高杉かほり

お気に入り作品のご紹介。
もうねえ、文句なしの夏目雅子さまの代表作。
五社英雄監督の代表作としてもこの作品を推す人って多いと思います。
土佐の高知の侠客、鬼龍院政五郎＝鬼政＝仲代さまって人がおりまして。
大正から昭和ごろのお話。
「鬼龍院花子の生涯」ってえタイトルの映画ではありますが、実際は「鬼龍院政五郎の後半生記」でございます。
正妻は岩下さま。妾が佳那さま。
この妾の子が花子＝高杉さまでございます。
で、この家に（花子が生まれる前に）養女としてやってきたのが松恵（仙道さま～夏目さま）。
彼女の目を通して「鬼政」の壮絶な生きざまが描かれるわけですね。
鬼政一家と対立するのは末長一家でございまして、この末長が内田良平さま。
その女が夏木マリさまでございます。
大人になった松恵が高校教師（山本圭さま）と恋仲になって、それに鬼政がからむストつぶしの話とかがあって、みたいな感じで、けっこうごちゃごちゃした人間模様が描かれます。
クライマックスは末長一家に拉致された花子を助け出すために鬼政が命をかけて宿敵一家に殴り込みをかけるって感じ。
もう、このへんったら「女の情念を描かせてもアクションを撮らせても巧い五社監督」の真骨頂って感じでございます。
とにかく面白い作品でございますよ。
パパの採点。１０点満点中９点。
「なめたらあかんぜよ」って夏目雅子さまが絶叫するシーンがテレビスポットでも使われ、この言葉けっこう流行りました。
作品中では岩下志麻様が一回、夏目雅子様が一回、この台詞を言います。
「私ゃあ、土佐の高知の侠客、鬼龍院政五郎、鬼政の娘ぜよ。なめたら…なめたらあかんぜよ」って、こんな台詞、死ぬまでに一回でいいから言ってみたいものでございます。

ラヂオの時間

１９９７年東宝作品
監督　三谷幸喜
主演　唐沢寿明、鈴木京香、西村雅彦、戸田恵子、細川俊之、井上　順

お気に入り作品のご紹介。「古畑任三郎」で時代の寵児となった三谷幸喜さま。
そこからは舞台はもちろん、映画にドラマにと。とどまるところを知らない快進撃でございます。
そんな三谷さまが映画に進出しはじめたころの作品。
そもそもは「東京サンシャインボーズ」の傑作舞台劇でございます。
第三舞台の鴻上さんが映画進出しようとしてうむむって結果になったのとは好対照ですね。
っていうより、それって第三舞台と東京サンシャインボーズの演劇的スタンスの違いなんじゃないかって気もするんですが。
まあこういう演劇論的話は置いておきまして。
「ラヂオの時間」のお話。
主婦の鈴木さま（役名も鈴木さんです）、初めて書いたシナリオがラジオドラマ化されることになります。
しかも生放送のラジオドラマ。
各部門のチェックが終わり、いよいよ本番、と思いきや、主演女優（っていうか声優っていうか）の戸田さま、自分の役名が気に入らないと文句をいい始めるわけですね。
プロデューサーの西村さまは戸田さまのわがままを聞いてしまい、彼女の役名はメアリージェーンになってしまいます。
そしたら相手役の細川さまが、自分の役名も変えろと言い出します。
で、生放送ラジオドラマはとんでもない方向に進みはじめるわけですね。
舞台の熱海はニューヨークに変更。台本の急な書き直しができない鈴木に代わってシナリオの書き直しをした放送作家は物語を把握していなかったためにまたまた物語が変わり、さらに舞台が変わり、俳優たちは勝手な設定を口走ったりする。
ディレクターの唐沢さまは頭をかかえ、作家の鈴木さまは次第にキレはじめます。
果たしてラジオドラマはどんな結末を迎えるのでしょうか…
舞台劇と映画の良い形でのシンクロってこういう作品を言うのだろうと思います。
「十二人の怒れる男」や「情婦」、「暗くなるまで待って」、「ダイヤルＭをまわせ」などに代表されるように、過去、高い評価を受けた舞台劇の映画化は、ほとんどが密室劇だと思うんですね。
そうじゃない作品もたくさんあるのですが、この作品に関して言えば、基本形を崩さなかった三谷さんの勝利でございましょうね。
パパの採点。１０点満点中９点。

とにかく面白い。キャスティングのセンスも抜群です。
細川俊之さんがこれほど素晴らしいコメディアンだとは思いませんでした。
とにかく、これも日本映画史に残る傑作だと言っていいのではないかと思います。

人間の証明

１９９７年角川春樹事務所作品
監督　佐藤純彌
主演　松田優作、ジョージ・ケネディ、三船敏郎、岡田茉莉子、夏八木　勲、ジョー山中

お気に入り作品のご紹介。
「角川映画」の功罪っていろいろあるとは思うんですが、私は「角川映画」ってものをかなり好意的に評価している人でございます。
実際にね、角川映画がなかったら、横溝正史先生も森村誠一先生も高木彬光先生も赤川次郎先生も山田風太郎先生も読んでなかったんじゃないかと思うんですよ。
角川映画があったから読んで、面白くてハマったっていう作家さん、めっちゃ多いです。
そういう意味ではね、私の同世代人にとっては、角川映画ってある意味、映画ってメディアと本、とくに文庫本との距離を縮めた画期的なムーブメントだたんじゃないかなって、思っております。
さてさて。そんな角川映画（角川春樹事務所ですわな）の第二作。
（第一作は「犬神家の一族」ね）森村誠一作品の映画化でござんす。
一人の黒人男性・ジョー山中さまが殺害されます。
彼はデザイナー岡田さまがファッションショーを行っているビルのエレベーターの中で死んでいたわけですな。
なぜか西条八十の詩集を手に持って。
黒人男性が出発するとき、住んでいたスラムで言い残した言葉、「キスミーに行く」、そして死ぬ間際につぶやいた「ストウハ」って言葉。
この言葉は何を意味するのかってところから捜査がはじまるわけでございます。
さてさて、この事件とは別に、その夜、一人のホステスが車に轢かれて事故死します。
この二つの「死」が、やがてつながっていくわけでございますね。
推理小説としては、こんな面白い小説あったのかと思うくらい感動した原作ですが、やはり二時間前後の映画の「尺」にこの物語を押し込めるのは無理があったようです。
公開当時、にわか森村誠一ファンになっていた中学生の私は、ちょっと残念に思った記憶があります。
アメリカロケまでして、かなり頑張ってはいたんですが。
むしろ刑事・松田さまの父にまつわるエピソードとアメリカ人刑事・ケネディさまのエピソードをバッサリ切ってしまったほうが、映画としてはすっきりしたかもしれません。
映画として処理するにはドラマが複雑すぎたような気がします。
パパの採点。１０点満点中７点。
後にこの原作は竹之内　豊さま主演でテレビドラマ化されました。
なかなか面白かったんですが、さすがに１９７０年代の原作を２０００年代に翻案するのは厳

しかったようですね。
竹之内さま版のドラマもやっぱり「ん？」って感じだったと書いておきましょう。
ちなみにこの作品の主題歌は故・ジョー山中さまが歌っておられます。名曲ですよ。

野性の証明

１９７８年角川春樹事務所作品
監督　佐藤純彌
主演　高倉　健、薬師丸ひろ子、中野良子、夏八木　勲

お気に入り作品のご紹介。
「お父さん…何かが来るよ…みんなでお父さんを殺しに来るよ…」
「っありがとう～ぬうくう～もりおおおお、っありがとう、あ～い～を…」って、当時のテレビスポット完全再現できる人、私の同世代にはきっと多いはず。
「お父さん…」って言うのは薬師丸ひろ子さま。
この映画でデビューだったはずです。
もう、めっちゃくちゃ可愛かったです。
この映画の少し後、角川映画「時をかける少女」で原田知世さまがスクリーンデビュー。
クラスの中は薬師丸さま派と原田さま派に真っ二つに分かれましたです。
昔話はこれくらいにして。「野性の証明」でございます。
自衛隊特殊工作員の演習地近くの村で、村民のほとんどが惨殺されるって事件が起きます。
自衛隊はこの事件をもみ消し、この事件に深く関与していた隊員・高倉さまは除隊して姿を消します。
数年後。村で唯一の生存者の少女・薬師丸さまと高倉さまは親子としていっしょに暮らしております。
薬師丸さまは事件当時の記憶を失っております。
この事件を追っている刑事が夏八木さま。
夏八木さま、執拗に高倉さまをマークするわけでございます。
そんなことをしている間に、次の事件が起こるってのは「人間の証明」と同じパターンやなあ。
今回は極悪非道の暴走族集団＋地元の権力者一家と、巨悪を告発しようとする地元新聞社との戦い。
やがて高倉さまらと懇意にしてた女性新聞記者が、暴走族グループによって乱暴された末に殺されるに至り、健さまの怒り爆発。
特殊工作員として培った能力を駆使して、悪党軍団をバッタバッタとなぎ倒します。
ごめんなさいね、ここから若干ネタバレ。

健さまが悪党の頭をカチ割った瞬間、薬師丸さま、すべてを思い出します。
「お父さんを殺したのは、この人よ」みたいな感じでございます。
健さまの手には夏八木さまによって手錠がはめられます。
実は村人皆殺し事件の犯人は薬師丸さまの本当のお父さんでございました。
健さまが特殊訓練中に村にたどりついたとき、重症の脳の病気に冒されていた薬師丸さまの父は

、村人全員を殺した末に、自分の娘まで殺そうとしていたわけですね。
で、健さまは薬師丸さまを助けるために彼女の父を殺したと、そういうことだったわけです。
逮捕された健さま・薬師丸さま・夏八木さまの前に立ちはだかるのは、ずっと健さまを監視していた自衛隊の特殊部隊。
彼らは自衛隊の演習の事故にみせかけて健さま・薬師丸さま・夏八木さまを消して、すべての証拠を闇に葬ろうとしていたわけでございます…
パパの採点。１０点満点中８点。
原作小説には、健さま逮捕後のエピソードはなかったと思いますが、気のせいでしょうか。
そもそも「野性の証明」って、戦車とかヘリコプターとかが飛びまくるような小説じゃなかったような記憶があるんですが。
ま、面白かったからいいか。とりあえず薬師丸ひろ子さまがめちゃかわいいので１点献上でございます。

家族ゲーム

１９８３年ＡＴＧ作品
監督　森田芳光
主演　松田優作､由紀さおり、伊丹十三、宮川一郎太

お気に入り作品のご紹介。
この映画を見たとき、けっこう衝撃を受けました。
音楽が流れない映画なんて見たことなかったんで。
この映画の直後に、テレビドラマで長渕剛さま版「家族ゲーム」が製作されましたが、映画とドラマは明らかに設定だけが同じで全く別の作品として捉えたほうがいいのではないかと思います。
映画版はですねえ、良くも悪くも「森田ワールド」でございます。
この世界、好きな人にはこたえられないんでしょうが、嫌いな人にはかなりキツい。
私はねえ、森田監督の映画って作品ごとで評価がけっこう違うんですが。
森田監督の演出手法がはまる作品とはまらない作品ってやっぱりあると思います。
で、この作品はってえと、まあけっこうはまったほうだろうなって思います。
主人公の宮川一郎太さま、高校受験を控えた中学三年生。
彼はけっこう問題児でありまして、いままで何人も家庭教師を雇いはしたものの、いずれも長続きしないって結果が残っております。
そんな宮川さまの目の前に現れたのは、まったくもって何を考えているのかわからない男・松田さまでございます。
宮川さまの父・伊丹さまは、宮川さまの成績をあげたら特別ボーナスを払うと約束しまして、松田さまはこの仕事を引き受けるわけですね。
松田さまが教えたのは勉強だけじゃなかったりします。
ケンカのやりかたとかも教えたりする。
ビンタもありのスパルタ指導で、宮川さまの成績は次第にあがっていきます。
ついには志望校に合格したりします。
あらめでたや。しかし合格祝いの食事会で、松田さま、なぜかおお暴れ。
このへんの必然性とかちょっとわからなかったです。
ま、いいか。面白かったから。
パパの採点。１０点満点中８点。
えっと、お受験を題材にしたホームドラマ、なんですが、登場人物みんななんか変。
タイトル通り、みんなで「家族ごっこ」しているみたいな空虚ささえ漂ってきます。
だから松田さま、最後に暴れたのかなあ。
ちょっとよくわからないけど。
このへんのわけわからなさとか、エンディングの不可解さとか、逆に強烈な印象として残ってし

まうから映画って不思議でございます。
とりあえず、演技派として開眼した時期の松田さまに１点献上でございます。

台風クラブ

１９８５年ＡＴＧ作品
監督　相米慎二
主演　三上祐一、紅林　茂、松永敏行、工藤夕貴、大西結花、天童龍子

お気に入り作品のご紹介。
って書いていいんだろうか。実はあまり「お気に入り」でもないんですが。
えっと、この映画が製作された１９８５年当時って、劇団生活の真っ只中でございました。
この映画にね、劇団で仲が良かった女の子が出演しておりまして、劇団の同期生の子と見にいきました。
同期生っていっても二つ年下の子だったですが。
結論…わけわからんかった。
横で見ていた同期生、もっとわけわかってなかったです。
でも、たった二歳でも年長者だもんで、とりあえずわかったふりをして彼に解説したりなんかして。
うむむ。でもねえ、実は私もわかってなかったんだよん。
ごめんね、よっしゃん。あのとき多分的外れな解説したと思うんだけど。
えっと。
あらすじって何をどう説明すればいいんでしょうか。
えっとね、中学の仲良しグループみたいな女の子たちがおりまして、彼女たちは夜のプールに忍び込んで泳いでおりまして、たまたま泳ぎにきていた同級生の子を溺れさせたりします。
担任が駆けつけて怒られて。
ちょうどそのころ、台風が近づいてくるわけですな。
この、台風が近づいてくるって時期にもいろんな事件とかがあるわけですが、まあ、何といいましょうか、エピソードとエピソードがからまりあって次のエピソードにつながって、っていう感じの物語ではなく、単発の短いエピソードが積み重ねられていくような展開です。
で、台風がきます。
やっぱり大雨。
放課後、仲良しグループの女の子たちと、数人の男の子が学校に残り、台風が過ぎるまで学校で過ごそうよ、って感じになります。
真夜中、男女入り乱れて下着姿で踊ってですねえ、みんな疲れて寝ていたら朝になりまして、映画前半から哲学的なこと言ってた少年が、いきなり窓から飛び降り自殺して、なんとなく終わり。
え？って感じでございます。
映画雑誌とかで物語の流れ予習していたにもかかわらず、ついていけなかったです。
難しすぎて理解不可能な作品でございました。

というより、冒頭のプールのシーンでのフィルム長まわしのシーン見ただけでもう戦意喪失でございます。
きつかった作品です。
パパの採点。１０点満点中７点。
えっと、それでもこのコラムでとりあげたってのはね、劇団時代の私のアイドル、天童龍子さまの下着姿が見られるってだけでございまして。
私的にはそれだけで７点つけてしまいます。
龍子ちゃん今どこで何してるんでしょう。幸せな奥さんとかになっていてくれたらいいなって思います。

＜３９＞刑法３９条

１９９９年松竹作品
監督　森田芳光
主演　鈴木京香、堤　真一、岸部一徳、杉浦直樹、樹木希林、江守　徹

お気に入り作品のご紹介。
私的には、森田芳光監督の最高傑作はこの作品ではないかと思っております。
本当によくできている作品です。堤　真一さまがもう、最高の演技をしておられます。
堤さまって、この作品あたりでブレイクしたんじゃなかったでしょうか。
今じゃああんた、「姑獲鳥の夏」だとか「オールウェイズ・三丁目の夕日」だとかで、めっちゃ普通に主役はれる役者さんですもんね。
そういう意味では、今乗りに乗ってる名優堤さまのルーツをたどるって意味でもこの作品なんか見たらいいんじゃないかと思います。
主人公は精神鑑定人でございます。
裁判なんかでよくありますわな、精神鑑定。
裁判所からの依頼をうけて、被告となっている人が犯行当時正常な精神状態であったのかどうかってことを鑑定する人でございます。
この鑑定の結果、犯人が心身喪失の状態であったってえことが認定されちゃいますと、その被告人は無罪になっちゃいます。
そら被告人にしてみたら心身喪失状態だったってえことにしたいわなぁ。
ごめんなさい。ネタバレさせないとここから先、書けないんで。
けっこう有名なお話ですから書いてもいいかなあとか思いますが、未見の人はここから先、読まないようにね。
映画はこれをさらに一歩進めて、「心身喪失状態であったってことを認めさせて無罪を勝ち得るために、心身喪失状態を演じ、周到な殺人計画を練り上げた、ある復讐殺人犯の物語」って感じになります。
で、物語は逆の立場、すなわちその殺人を立証する側としての「精神鑑定人」の視点で描かれます。
鈴木さまは大学で精神鑑定の研究をしております。
彼女が、教授杉浦さまのサポート役として精神鑑定をすることになった容疑者が堤さま。
彼は近くに住む夫婦を殺害しております。堤さまと被害者には直接の関連はないわけですね。
杉浦さまの診断によると、堤さまは多重人格障害、乖離性同一性障害の疑いがあるってことになっております。
普通の人格と、暴力的な別人格が堤さまの中にいるんだって診断です。
ところが鈴木さまはそうじゃないんじゃないかと疑って、調べはじめるわけです。
果たして真実はどこにあるのか…ってお話。

とにもかくにも堤さまの演技が素晴らしいです。これがまた森田監督の癖のある演出にぴったりとはまっております。
この作品見るまで森田作品ってちょっと苦手だったんですが、この映画みて全然印象変わってしまいました。
とにかく素晴らしいの一言に尽きる作品でございます。
パパの採点。１０点満点中９点。
森田作品ってね、リアルですごくいいんですが、見ててときどきイライラしたりしますよね。
「もうちょっとセリフでかい声でしゃべってくれ～」とか思ってしまいます。
特にテレビやビデオで見てるとつらいですね。
オンエアって音楽とのバランスよくないから。
なんとかならないでしょうか。

五条霊戦記

２０００年作品
監督　石井聰互
主演　浅野忠信、隆　大介、永瀬正敏、岸部一徳、船木誠勝

好きな映画シリーズ。
「五条霊戦記」でございます。
義経と弁慶の物語を斬新な解釈で映像化した作品。もうねえ、こういう新解釈型の映画大好きでございます。
「将軍家光の乱心・激突」にしても、「真田幸村の謀略」にしても、「忠臣蔵外伝・四谷怪談」にしても。
それぞれに斬新な新解釈、ありましたでしょ？
そんな新解釈マニアの私がうむむと唸った、義経弁慶の新解釈ムービーでございます。
時は平安末期。
平家が隆盛を極めた時代ですな。京都の五条橋界隈で、鬼が出るとの噂が流れます。
狙われるのは平家の侍たち。
鬼の正体は遮那王、後の源義経でございます。
これが浅野さま。
彼は側近の者（自分の影武者と僧兵でございますな）を引き連れて、悲願の源氏再興を果たすべく、平家の武者狩りを繰り返していたわけでございますな。
この遮那王、とにかく強い。やたら強い。向かうところ敵なしって感じでございます。
しかし彼の前にたちはだかる者がおりまして。弁慶でございます。
これが隆　大介さま。
弁慶はありがたい仏様のお告げを聞きまして、鬼退治をするために京都にやってくるわけでございますね。
しかし弁慶ってのは破戒僧でございまして。
めっちゃ顔こわいし。
弁慶は無宿者の刀鍛冶・永瀬さまを案内人として、遮那王の住む森にやってくるわけですね。
剣士としての血が騒いだか、遮那王は次第に弁慶との戦いにのめりこんでいきます…
なんか、義経と弁慶があまりにも殺伐とした戦いを繰り広げるので、どうなることかと戦況を見守っておりました。
遮那王ってどう見ても源氏の大将になるキャラじゃないし、弁慶も義経の忠臣となりそうなキャラじゃないなあ、って思ってみておりましたら…
ラストで、とんでもない大仕掛け。
そうくるか〜って落とし方されました。なんか心地よくだまされたような気分で気持ちよかったです。

パパの採点。１０点満点中９点。
この映画を見た直接の動機って、船木さまが出ておられたからでして。
船木さまって、格闘技団体「パンクラス」の代表をされておられた人。
格闘技好き人間の私としては、船木さまが出ているだけで見る価値ありの映画だったわけですが、思っていた以上に面白かったです。
浅野忠信さま、すごく良い雰囲気をもった役者さんになりましたね。ちょっと注目していきたいと思っております。

シザーハンズ

１９９９年アメリカ映画
監督　ティム・バートン
主演　ジョニー・デップ、ウィノラ・ライダー、ダイアン・ウィースト

大好きシリーズはちょっとお休みしまして、ここから通常の作品紹介です。
独特の映像世界で知られるティム・バートン監督の作品。
私はこの映画が一番好きですね。
えっと、「象の鼻はどうして長いの？」「それはね…」系の物語展開。
「どうして雪は降るの？」からお話が始まります。
老科学者（なんとヴィンセント・プライスさまでございます）が人造人間デップさまを作りますが、完成寸前に亡くなってしまいます。
デップさまの手はとりあえずつけられたハサミのまま。
たまたま科学者の家を訪れたウィーストさまが彼を家に連れて帰ります。
両手がハサミの人造人間ですが、デップさま、最初はそのハサミをどう使っていいかわからないわけですな。
やがて彼は庭の植木を動物の形に仕上げたり、近所の奥さんだとかペットだとかの毛をきれいに刈る、なんてことをして人気者になります。
ウィーストさまの娘がライダーさま。
デップさまは彼女に好意を抱きはじめますが、大好きな彼女に近づくと、逆にハサミで彼女を傷つけてしまうわけです。
何て悲しいんでしょ。
彼女に限らず、大好きな相手がいて、その人を助けようとしたり、優しくしようとすると、意に反して相手を傷つける。
なんかこんなこと最近あったような…
もうええやろ、この話は。
デップさまはもとの科学者の家に逃げ込みます。
それでも人間は彼をそっとしておいてはくれなくて、やがて悲劇の結末が訪れるわけですね。
パパの採点。１０点満点中９点。
書き忘れましたが、映画の冒頭で「雪」が降る理由は、デップが愛した彼女のために、氷の彫刻を作り続けておりまして、その氷のかけらが雪となって町に降るってことです。
ええ話やなあ。
今、改めてこの映画見たら、もうボロボロでしょうね。最近の私、涙腺ゆるいから。

仮面ライダー龍騎・エピソードファイナル

２００２年東映作品
監督　田崎竜太
主演　須賀貴匡、松田悟志、杉山綾乃、加藤夏希、荻野　崇、涼平、菊地謙三郎

なんか懐かしいって感じがしてしまいますね。
平成仮面ライダーの初期の作品の映画版でございます。
平成以降の仮面ライダー（仮面ライダークウガ以降です）は、主役にイケメン俳優を配しまして、ストーリーも大人の試聴に耐えうる作品づくりをしておられます。
んだもんで、子供よりおとうちゃんおかあちゃんが面白がって見るって状況が生まれておりますなあ。
仮面ライダーから大人向け作品に進出する若手俳優さんもけっこう多く、オダギリさま・要さま・佐藤 健さま・水嶋ヒロさま・瀬戸康史さまなんかはいずれも仮面ライダー経験者でございます。
本作には「ミスターお水」須賀さまが出演しておられます。
エピソードファイナル、とはいうものの、ドラマの最終回を映画でやったっていう「エヴァンゲリオン」パターンではなく、同じキャラクターを使った別の最終回です。
ドラマはドラマで最終回が別にありましたし、これとは別に「特別編」っていう別の結末をもったドラマもありました。
神崎（菊地さま）って科学者が作った「ミラーワールド」で戦う１３人のライダー。
最後に残ったライダーは自分の望みがかなえられるってことらしい。
愛する者を救うためとか、難病に冒されている自分自身のためだとかのそれぞれの目的のために、ライダーたちは殺しあうわけですね。
戦いは終局を迎えており、映画冒頭では残り六人になっております。
で、ある日突然、戦いのタイムリミットが宣告されます。
それによって一段と戦いは激化。テレビのメインキャラのライダーたちでさえ、バンバン死んでいきます。
そんな戦いの中で、龍騎＝須賀さまは、このミラーワールドに仕掛けられたとんでもない策略に気付くわけでございます。
さてその秘密とは…
殺し合いをするライダーって設定ですから、最終回だけにめっちゃブルーになります。
ドラマの最終回はこれに比べるととっても明るく、むしろ希望を残した終わりかたでしたし、特別編もそういう終わりかたでした。
どの結末が好みかは評価の分かれるところかと思います。
パパの採点。１０点満点中７点。
１３人の仮面ライダーって書きましたが、映画・テレビ・ゴールデンタイムにオンエアされたド

ラマの特別編の登場ライダー全部併せて１３人です。
今回のライダーはバッタとかカブトムシではなく、主に動物。
１３人ライダーの内訳は、赤龍・コウモリ・カニ・バッファロー・コブラ・サイ・エイ・ワシ・カメレオン・白鳥・虎・インパラ・黒龍。
なんか動物園みたい。
このうち、白鳥・黒龍・カメレオン・白鳥はドラマ本編には登場しませんし、特別編では白鳥・黒龍・インパラ・虎・ワシは戦闘シーンのみの登場で、変身前エピソードはありません。
映画に登場するのは、赤龍・コウモリ・バッファロー・コブラ・白鳥・黒龍のみでございます。
以上豆知識でした。

忍風戦隊ハリケンジャー・シュシュっとザ・ムービー

２００２年東映作品
監督　渡辺勝也
主演　塩谷 瞬、長澤奈央、山本康平、吉野紗香、白川裕二郎、姜 暢雄、高田聖子、西田 健

引き続き、ヒーローもののご紹介。
今、テレビでは戦隊ものと仮面ライダーを日曜早朝、「スーパーヒーロータイム」としてオンエアしております。
戦隊ヒーロー出身でスターになったっていえば、何といってもタイムレンジャーの永井大さまでしょうね。
あと「ガオレンジャー」の金子　昇さまと玉山鉄二さまとか。
照英さま（ギンガブルー）とか堀江　慶さま（ガオイエロー）なんかもそうですな。
このハリケンジャーからは、塩谷　瞬さまがブレイク。ただ、ドラマ界映画界でブレイクしたわけではなく、ワイドショー界でのブレイクでしたね。
あと、姜 暢雄さまが細かくいろんな作品に出演しておられます。あと、白川裕二郎さまは「芸能人筋肉王」とかの常連。
この「ハリケンジャー」は、五人戦隊って基本パターンを少し崩した形です。
三人の戦隊。サンバルカンのパターンですな。
ハリケンレッド（塩谷さま）・ハリケンブルー（長澤さま）・ハリケンイエロー（山本さま）。
三人は忍者でございます。で、この三人と流派の違う忍者がゴウライジャーチーム。
カブトライジャー（白川さま）・クワガライジャー（姜さま）の二人。
流派が違うもんだから、なにかと対立したりします。
しかし地球征服を企てる宇宙忍者って共通の敵がおりまして、それを倒すために協力しあうってのが作品の基本構造でございます。
ちなみにハリケンジャーのお師匠様が西田さま。
ゴウライジャーのお師匠様が団　時郎さまです。
おお、帰ってきたウルトラマンのＭＡＴのお二人ではありませんか。
映画のパンフレットで見ましたが、このお二人、未だにお互いには負けたくない、みたいな気持ちでおられるようですね。
こういう関係、いいなって思いますね。
さて映画のご紹介。今回のお話は、ドラマ本編で登場する「宇宙忍者」と戦うパターンではなく、それとは別の敵が宇宙からやってきて、そいつを退治するって話。
宇宙からやってきたプリンセスを助けるためにハリケンジャーとゴウライジャー、あと、シュリケンジャーが協力しあって戦うって物語。
パパの採点。１０点満点中７点。
本編ドラマでは、第六のレンジャー・シュリケンジャーっては変装の名人って設定です。

過去、戦隊ヒーローを演じた役者さんがたが「変装したシュリケンジャー」として特別出演されていました。
これはこれで面白かったです。

ビバリーヒルズコップ

１９８４年アメリカ映画
監督　マーティン・ブレスト
主演　エディ・マーフィ、ジャッジ・ラインホルド、ジョン・アッシュトン、リサ・エイルバッチャー、ロニー・コックス

「サタデーナイトライブ」でその才能を認められたエディ・マーフィさまの出世作。
それまではマーフィさま、「２４時間」とかでニック・ノルティさまなんかと組んでおりましたが、この作品で晴れてピンで主役張れるようになりましたです。
物語の主人公は、デトロイトの暴走刑事アクセル・フォーリー＝マーフィさま。
けっこうむちゃくちゃやる系の刑事さんでございます。この刑事のもとに、友人がやってまいります。
けっこう羽振りがよさそうな友人。
しかしその友人は殺されてしまいます。
友人のために復讐を誓ったマーフィさまは、休暇をとってその友人が働いていたビバリーヒルズへ向かいます。
ビバリーヒルズっていやああんた、田園調布か芦屋か、みたいな高級住宅地。
というかセレブの別荘地っていうか。デトロイトっていやあ鉄工労働者の町だから、まあ下町ですよね。
デトロイトでムチャクチャやる刑事がビバリーヒルズで同じようにムチャクチャやるわけですからそりゃあ映画は面白くなります。
こういう映画を見てましたら、やっぱり字幕なしで見たいなあって思ってしまいます。
字幕なし映画もときどきはチャレンジしてるんだけど、あれだけマシンガントークされたらぜったいついていけないだろうな～
でも、本当、字幕なしで楽しみたいですね、こういう映画は。
パパの採点。１０点満点中８点。
この映画のテーマ曲は、元イーグルスのグレン・フライさまの「ヒート・イズ・オン」でございます。
イーグルス時代は髭なんか生やして、ムサ苦しかったフライさま、お洒落にすっきりしてプロモビデオに登場。
びっくりしました。
この曲は劇団時代に、ある舞台のダンスＢＧＭとして使った曲です。懐かしいなあ。

ビバリーヒルズコップ２

１９８７年アメリカ映画
監督　トニー・スコット
主演　エディ・マーフィ、ジャッジ・ラインホルド、ブリジット・ニールセン

前作「ビバリーヒルズコップ」でブレイクしたエディ・マーフィさまの人気シリーズ第二弾でございます。
前作でビバリーヒルズ警察の人たちとすっかりお友達になったアクセル刑事＝マーフィさま、相変わらずデトロイトで暴れ回っております。
そんな彼のもとへ、ビバリーヒルズから連絡が入りまして、前作の事件で知り合った警部が撃たれてしまったってえことを聞かされます。
で、マーフィさまの手腕を高く評価しているビバリーヒルズの若い刑事たちが、彼に助けをもとめてくるわけです。
で、まあ、そこは映画でございますから、「ワシはデトロイトにめっちゃ仕事あんねん、すまん、行かれへんわ」とも言わずにマーフィさま、再びビバリーヒルズに向かうことになります。
けっこう律儀な男なんだなあ。
で、マーフィさま、警部を撃った犯人を追ううちに武器密売組織にぶちあたり、このワル集団と戦うことになります。
アクション・銃撃戦ともに格段のスケールアップ。
しかし、デトロイトの刑事がビバリーヒルズに登場するって設定、一度目はなんとか説得力を維持できましたが、二回目はちょっと強引さが目立ったような気がします。
パパの採点。１０点満点中７点。
エディ・マーフィさま、いいですね。
しかしながら、上記の「設定の強引さ」がちょっとひっかかって、あまり楽しめなかったです。

ダラスの熱い日

１９７３年アメリカ映画
監督　デビッド・ミラー
主演　バート・ランカスター、ロバート・ライアン、ウィル・ギア

こんな強烈な作品が１９７３年時点で製作されたってことにまず驚いてしまいましたね。
ダラスってことなんで、題材は当然ケネディ大統領暗殺でございます。
大統領の暗殺は１９６３年の事件ですから、その十年後の映画化でございます。
当然、ウォーレン委員会報告による「オズワルド単独犯人説」に異を唱える内容でございます。
えっと、ケネディ大統領暗殺事件については、オリバー・ストーン監督の「ＪＦＫ」なんて傑作がこの映画のあとに製作されるわけですが、この作品こそ年代的にオリバー・ストーン監督の作品に少なからぬ影響を与えた作品なのではないかと思います。
この作品は、バート・ランカスターさま扮する元ＣＩＡの偉いさんと、元軍人のロバート・ライアンさまが中心となって、暗殺の計画から実行までを犯人グループの視点で描きます。
こういう作品のあらすじってすごく書きにくいなあ。
えっと、ケネディ大統領の政治方針に反対する勢力ってのがいろいろおりまして、そういう人たちが「ケネディがおったらアメリカがダメになる」ってんで、大統領暗殺を企てるわけですな。
どんな人がどんな役割をもって、どんな仕事をした結果ああなったのかって話は、それこそ薮の中でございますので、あまり詳しく書けないですが。
しかし、この「ダラスの熱い日」と「ＪＦＫ」と、あとゴドレーさま＆クレームさま（なんと元ミュージシャン。元１０ＣＣの二人です）が製作総指揮をとった「ＪＦＫ暗殺の真実」ってビデオと、このへんを見たら、かなりわかりやすく「謀殺説」が理解できると思いますよ。
まあ全てが映画の通りであるわけはないだろうけど、少なくともオズワルドの単独犯行ではなかったんだろうな。
まあ暗殺の一つの可能性を、フィクションというテーブルの上で料理した、ドキュメンタリー風作品ってところでしょうか。
映画のクライマックスが、けっこう虚しい系の終わりかたをします。
本当、あの事件って何だったんだろうかって、今にしてみればそう思ってしまいますね。
パパの採点。１０点満点中９点。
非常によくできた映画です。主演のランカスターさま・ライアンさまの出番はやや少なめ。
だって黒幕なんだもん。
それだけにあまりしらない役者さんがスクリーンを行き来するわけでございまして、それはそれでけっこうリアルな感触をもって楽しむことができました。
是非「ＪＦＫ」と併せてご覧いただきたい一本でございます。

大統領の陰謀

１９７６年アメリカ映画
監督　アラン・Ｊ・バクラ
主演　ロバート・レッドフォード、ダスティン・ホフマン、ジャック・ウォーデン、マーティン・バルサム

「陰謀」を画策したのは言うまでもなく、ニクソン元大統領でございます。
ニクソン元大統領が失脚した、ウオーターゲート事件を描きます。
というより、事件が起こってからこの事件の真相を追う新聞記者の目を通して、「大統領（とその側近たち）の陰謀」が明らかにされていく様子が描かれます。
ワシントン・ウオーターゲートオフィスビルの民主党本部に侵入した男たち。
彼らは警備員に見つかり、警察に逮捕されてしまいます。
彼らは民主党の大統領選挙活動を妨害するために侵入したわけですな。
当初は単なる侵入事件として処理されかかっていた事件でしたが、ワシントンポストの新聞記者・レッドフォードさまとホフマンさまが、侵入犯のなかに元ＣＩＡの諜報部員がいたことなどから、事件の裏にある陰謀に気づきます。
ここからの展開が非常によくできている、という評価なんですが、実はこの作品を見たのは１９７６年のロードショー当時でございまして、当時中学生の私には何が何やら全くわけわからん状態でした。
まあ中坊に「ウオーターゲート事件」なんて理解できるわけないか。
そもそもウオーターゲート事件ってどんな事件なのかこの映画で初めて知ったわけですし。
ドキュメンタリーものは、やっぱりそれなりの予備知識をもって映画みないとだめですね。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにかく見た時期が悪かった映画。もう少し大人になってから見たらもっとちゃんとした感想持てたのかもしれませんが、私的には「とりあえず見た映画」の一本です。
でも、拳銃もナイフも出てこない映画なのに、「レッドフォードさまもホフマンさまもかっこええなあ～」って感想を持ったのは事実。
もう一回見直そうかなあ。

フォーリング・ダウン

１９９３年アメリカ映画
監督　ジョエル・シューマッカー
主演　マイケル・ダグラス、ロバート・デュバル、バーバラ・ハーシー、レイチェル・ティコティン

ある意味すごい映画です。
キレる中年の映画っちゅうか。
とっても現代的で恐ろしい設定の映画でございます。
えっと、主人公はとってもアブない男ダグラスさま。
その日のロサンゼルスはめっちゃ暑かった、みたいな始まりかたをします。
猛暑でその上大渋滞のハイウェイ。
ダグラスさま、プッツン。
いきなりキレて車を置いてスタスタ歩き出します。
んでドラッグストアへ。
別れた妻子に電話しようとするわけですな。
でも小銭がなかったりする。
両替は断られる。
しかたなくドリンクでも買って小銭をつくろうとしたら、今度はドリンクの料金のことで店のオヤジともめます。
ダグラスさま、プッツン。
いきなり店で暴れだす。
店をボコボコに壊して、びびったオヤジから小銭をゲット。
それでも代金は置いていくダグラスさま。
で、やっと妻に電話。
ダグラス、子供にプレゼントを買っていたわけで、そのプレゼントを渡すために今から妻のところへ行くと一方的に告げて電話を切ります。
その電話ボックスでチンピラともめます。
けっこう強いダグラスさま、チンピラを追い払いますが、今度はチンピラ君たち、仲間を連れて武装して戻ってきます。
チンピラ、マシンガンを乱射。
しかし因果応報、チンピラたちを乗せた車はいきなり事故ります。
こんなチャンスを逃さないキレキレダグラスさま、彼らからマシンガンを奪います。
ダグラスさま、あっちこっちで騒ぎを起こしながら、次第にごっつい武器（なんでバズーカ砲なんかがでてくるんざんしょ）をゲットしていきまして、完全武装で妻子に会いにいくわけでですな。

そんなダグラスさまを追う刑事がデュバルさまでございます。さあ果たして事件の結末は…
なんかバイオレンス版「わらしべ長者」みたいですね。
だんだん武器がすごくなって、それにともなってダグラスさまのキレっぷりがエスカレートしていくってのがちょっと笑えました。
パパの採点。１０点満点中７点。
マイケル・ダグラスさま、こういうわけわからん男をやらせても巧いですね。
そもそもこの人、ちょっとイッた系の目つきとかしてますからね。
でも「ディスクロージャー」とか「コーラスライン」とか「危険な情事」とかの普通の男なんかもできるし、「ウォール街」とか「ゲーム」とか「ダイヤルＭ」なんかのちょっと危ない系の人も演じることができるし。
さすがの名優でございます。

ウォルター少年と、夏の休日

２００３年アメリカ映画
監督　ティム・マッキャンリーズ
主演　マイケル・ケイン、ロバート・デュバル、ハーレイ・ジョエル・オスメント

とってもハートウォーミングな作品でございますよ。
タイトルの「ウォルター少年」がハーレイ・ジョエル・オスメントさまでございます。
この人やっぱり巧いですね。
なんだかとっても哀愁を帯びた顔しておりますが。
なんか不遇系の顔というか。「シックスセンス」も「Ａ．Ｉ．」も不遇キャラだったしなあ。
ま、ええでしょう。今日のお題は「ウォルター少年」やし。
オスメントさま、この映画では父がいなくて、色ボケした母に冷たくされるという不遇さでございます。
彼は夏休みの間、遠い親戚のじいちゃん二人組、ケインさまとデュバルさまのところに預けられます。
母は資格か何かを取得するための学校に行くってふりをして恋人とバカンスを楽しむみたいな雰囲気です。
実はこの変わり者のじいちゃん二人組はすっげえ金持ちで、でも貯めこんだ大金の隠し場所がわからない。
母と恋人はオスメントさまをじいちゃんたちのお気に入りにして、金のありかを知りたかったわけなんですね。
そんなこと知らないオスメントさま、偏屈者の二人のじいちゃんに困りながら夏休みを過ごすことになります。
ある日オスメントさま、じいちゃんがしまっていた古い写真を見つけます。
「この写真の女の人はだあれ」みたいなことがきっかけになって、じいちゃんたちはオスメントさまに、若き日の冒険談を話しはじめます。
この話を聞くうちに、次第にじいちゃんたちとオスメントさまとの間に心が通いはじめるわけですな。
なんかとってもいい話。じいちゃんたちの若き日の冒険物語と、現在のじいちゃんたちとオスメントさまの交流の物語が絶妙なバランスで配置されていて、けっこう面白かったです。
ケインさまとデュバルさま、さすがの名演技。しかしその二人を向こうにまわして、彼らと堂々とわたりあうオスメントさまの才能に改めて驚かされました。
パパの採点。１０点満点中８点。
とにもかくにも、主演三人の演技力にひっぱられた映画ですね、これは。
作品の後半で成長したウォルター少年が登場しますが、なんじゃこら。
もうちょっとオスメントさまに雰囲気の似た人って見つからなかったのかなあ。

「ニューシネマパラダイス」とか「おしん」とか見た時にも思いましたが、「この子はどう成長してもこうはならへんやろ」って思うキャスティングって、どうなんやろ。
オスメントさま登場シーンで採点すると９点くらいだったんですが、成長したウォルター少年がいただけなかったので１点減点でございます。残念。

パラサイト

１９９８年アメリカ映画
監督　ロバート・ロドリゲス
主演　イライジャ・ウッド、ジョシュ・ハートネット、ジョーダナ・ブリュースター

キッスの曲でパラサイトって曲がありましたなあ。「パラサイトイヴ」なんて映画もあったけど。言うまでもなくパラサイトってのは寄生虫って意味です。
宇宙からやってきた謎の寄生生物。
そいつに狙われた田舎の高校を舞台に、学生たちがエイリアンと戦うＳＦ作品でございます。
内気で運動が苦手な高校生ウッドさま。
彼は学校のフットボールグラウンドで、イモムシのような生き物を見つけます。そ
れと前後して、学校の教師たちが奇怪な行動をとるようになります。
このイモムシみたいなのが宇宙からやってきた寄生生物。
教師たちに寄生したこやつらは、またたく間に学園の生徒ほとんどに寄生してしまいます。
謎の生命体からたまたま逃れた数人の生徒たち。
彼らは仲間の一人、ハートネットさまが合成したドラッグが寄生エイリアンに効果があることを知り、それを武器に戦おうとします。
しかし、その数人の仲間の中にさえエイリアンがまぎれこんでいるかもしれない。
彼らは迫りくるエイリアンに寄生された教師や学生たちと戦いながら、同時に仲間を疑わなければならないわけです。
果たして彼らはエイリアンを撃退することができるのでしょうか。
イライジャ・ウッドさまとか、ジョシュ・ハートネットさまとか、若手スター役者さまがたがご出演。
けっこう面白く見ることができました。
やはりロバート・ロドリゲス監督ですね。面白く仕上げております。
脇を固めるベテラン組（ロバート・パトリックさまだとかフェムケ・ヤンセンさまだとか）もいいですね。
ＳＦＸもよくできており、非常にバランスのとれた作品であるって印象をうけました。
パパの採点。１０点満点中７点。
エイリアンと戦う主要キャストのうちの一人、ローラ・ハリスさまは、この後、「２４」のシーズン２で非常においしい役を演ずることになります。

ＡＬＷＡＹＳ・三丁目の夕日

２００５年「オールウェイズ・三丁目の夕日」製作委員会作品
監督　山崎　貴
主演　堤　真一、吉岡秀隆、薬師丸ひろ子、堀北真希、小雪、三浦友和

「ビッグコミック」に連載されていた西岸良平様の名作マンガ、「三丁目の夕日」の映画化でございます。
日本が一番希望に満ち溢れていた昭和３０年代。
東京の下町を舞台に、めっちゃハートウォーミングなお話が綴られます。
青森から就職のために東京にやってきた堀北さま。
彼女が住み込みで世話になるのは堤さま・薬師丸さまが夫婦でやりくりする自動車整備会社。
近所には小説家の吉岡さま、スナックのママの小雪さま、医者の三浦さまなどが住んでおりまして、そんな人たちがええ話を繰り広げるわけですな。
メインになる話は、堤さま・薬師丸さま・堀北さまの自動車整備会社のいろいろなエピソード。
これに、吉岡さまと小雪さまの恋物語、吉岡さまと「小雪さまを頼って預けられ、困った小雪さまが吉岡さまに預けた小雪さまの遠縁の少年＝須賀健太さま」とのエピソードなどが積み重ねられていきます。
２００５年の日本アカデミー賞はこの作品が独占。
それがとっても素直にうなずける名作でございます。
大阪のＡＭラジオで、「ゲロッパ」の井筒監督が、「こんなもんＣＧだけやないですか」って辛口コメントをされておられましたが、そのＣＧにだまされちゃいましたね～。
私は。
懐かしい香りのする暖かい映像に、はまってしまいましたがな。
そういう意味では安物の観客なのでしょうか。私って。
パパの採点。１０点満点中９点。
えっとですね。めっちゃええ音楽がぐわわってせりあがってきちゃうと、なんか涙が出てしまいます。
あきまへんなあ。
ほんま、監督の思惑通りの反応しちゃいました。
なんか悔しいんだけど、だって涙でちゃうんだもん。
三浦友和さまの焼き鳥の場面、吉岡さまと小雪さまの指輪の場面、クライマックスの吉岡さまと須賀さまの場面。
もうめっちゃずるずるでした。いい映画見せてもらいました。

１５ミニッツ

２００１年アメリカ映画
監督　マーク・クリストファー
主演　ロバート・デ・ニーロ、エドワード・バーンズ、ケルシー・グラマー

めちゃくちゃブルーになる映画ですね。
サイコな犯人が登場します。
犯人は二人組で、ロシア人とチェコ人。
彼らはビデオカメラを入手して、自分たちの犯罪の記録映画を撮影するという行為にとりつかれてしまいます。
彼らを追うのがニューヨークの有名な刑事デ・ニーロさま。
彼はマスコミをうまく利用することによって捜査を進める刑事。
当然、彼が手柄をたてればマスコミはますます彼を大きくとりあげる。
かくして彼はニューヨークで一番有名な刑事になってしまったわけですな。
デ・ニーロさまと火災調査官のバーンズさまは、ある火災現場で出会います。
彼らは火災の犠牲者は先に殺されており、証拠隠滅のために火がつけられたことを見抜きます。
実はこの殺人と火災はロシア人チェコ人の二人組による犯行だったわけでございます。
デ・ニーロさまとバーンズさまは協力しあって犯人逮捕を目指すわけですね。
デ・ニーロさまとバーンズさまは犯人たちが命を狙っていた目撃者の女性の身柄を確保。
これによって大きく事態は進展するかに思えましたが、そううまくはいかないもので。
刑事デ・ニーロさま、なんと犯人に拉致されてしまい、あろうことか殺されてしまいます。
どういうこっちゃ。
果たして主役の役者としては存在感に欠けるバーンズさま、犯人を逮捕することができるのでしょうか…
上に書いたように、三分の二くらい物語が進んだところで、主役だとばかり思っていたデ・ニーロさまがあっさり殺されてしまいます。
これにびっくりです。
なんてタイミングで主役が死ぬんだあ～、みたいな。
そこから作品の主役は、前半明らかに脇キャラだったバーンズさま。
映画を撮ってる最中にデ・ニーロさまが出られなくなる何か深刻で特殊な事情でも発生したのでしょうか。
謎や。
パパの採点。１０点満点中８点。
タイトルの「１５ミニッツ」は、「１５分あればどんな人間でも有名になれる」という、作中人物が引用するウォーホールさまの言葉からつけられています。
なるほどなあ。しかしとにかく、デ・ニーロさま。

調べてみたら主人公の刑事、デ・ニーロさまへの出演オファーの段階から物語中盤で殺されちゃう設定が確定していたようです。
それにしても勇気のある設定ですなぁ。

ショウタイム

２００２年アメリカ映画
監督　トム・デイ
主演　ロバート・デ・ニーロ、エディ・マーフィ、レネ・ロッソ、ウィリアム・シャトナー

ちょっと前、「ブラックダイヤモンド」と「ＤＥＮＧＥＫＩ」を続けて見て、わけわからんくなったことは記憶に新しいですが。（この二作は主演こそジェット・リーさまとスティーブン・セガールさまで違いますが、脇のＤＭＸとアンソニー・アンダーソンさまがどっちも似たような役柄してましたもんで…）
この映画も、前頁でご紹介した「１５ミニッツ」と続けて見てしまいました。
同じデ・ニーロさま主演。
どちらも刑事。
作品の内容とかタッチとか全然違うんですが、やはり同じ時期に同じ役者さんの映画を見たら記憶がごっちゃになります。
いかんいかん。
「１５ミニッツ」はかなり深刻な内容の作品でしたが、こちらはコメディタッチの刑事アクションもの。
けっこう気楽に楽しめました。
デ・ニーロさまは刑事でございます。けっこう敏腕。
彼は役者志望の警官マーフィさまに捜査の邪魔をされてしまいます。
で、そのとき、マーフィさまが連れてきていたテレビクルーの取材用カメラをブチ壊してしまいます。
デ・ニーロさま、ここぞとばかりにマスコミに叩かれるわけですな。
テレビ局はカメラの弁償金の代わりに、デ・ニーロさまに密着取材をさせてもらいたいなんて提案を持ちかけてきます。
しかも俳優志望のマーフィさまを相棒につけるなんておまけつき。
警察のイメージアップをもくろむ上司の命令で渋々「やらせだらけ」のテレビ出演を引き受けるデ・ニーロさま。
彼の出演番組はけっこう好評でございます。
そんな二人が、武器密輸・麻薬密売マフィアの捜査に乗り出し、やがてそれが大事件に発展することになりまする。
題材はとてもいいんですが、テレビショーと犯罪捜査のつながりをもう少しつけていただきたかったですね。
なんか、無理やりテレビショーと関連づけたみたいな印象が残りました。
笑えるシーンは、もちろん刑事さんがテレビショーの題材になるって点なわけですから、もう少しテレビショーがらみの波瀾の展開をふくらませて欲しかったです。

パパの採点。１０点満点中７点。
「宇宙大作戦」のカーク船長＝ウイリアム・シャトナー大先生が、テレビディレクター役でご出演。
いい味だしてます。相変わらずお元気そうです。

クローサー

２００２年香港・アメリカ合作
監督　コーリー・ユン
主演　スー・チー、カレン・モク、ビッキー・チャオ、倉田保昭

えっとねえ、なんかめっちゃええ感じの「スタイリッシュ・ハード・アクション」でございます。
いきなりこんな映画が登場したりするわけですから、やはり香港・中国って映画のレベル高いですね。
香港に本拠をおく大企業のコンピューターネットが、ウイルスの襲撃をうけます。
その危機を鮮やかに救ったのが「電脳天使」と名乗る人物。
企業はその電脳天使を探してお礼しようとします。
やがて電脳天使として現れたのは、めっちゃ美女スー・チーさま。
その企業の社長室に招かれた彼女、いきなり社長を暗殺します。
え？って展開。
実は「電脳天使」ってのは金で殺しを請け負う「殺し屋」だったわけですな。
パソコンを駆使し、企業の防犯カメラシステムに侵入してスー・チーさまをバックアップする妹がヴィッキー・チャオさまでございます。
この暗殺事件の捜査に、けっこう鋭い女刑事カレン・モクさまがからんでくるわけですな。
この三人が物語の中心になります。
チーさまとチャオさまの姉妹、秘密を知りすぎたってことで、雇い主から命を狙われることになります。
暗殺された会社社長と極めて近い人物であるこの雇い主、いやらしい政治力を使い、チーさまとチャオさまの線から「雇い主」に近づきつつあるモクさまもいっしょに片付けてしまおうとします。
チーさま・チャオさま・モクさま。
ここで三人の共通の敵が「雇い主」になるわけですね。
ここからどんどんと物語はハードに展開してまいりますよ～
果たして三人の運命やいかに。
スー・チーさま、ヴィッキー・チャオさま。
なぜかショートパンツで画面上を闊歩します。
この作品はテレビオンエアのものを見たのですが、そのときのナレーションコピーは「おみ足、全開」でございました。
けっこう無意味にフトモモ露出。
それがまた萌え萌え。
あと、敵のボディガード役で何と倉田先生がご出演。

あっちの世界にいきそうな目をしながら日本刀振り回しておられました。
倉田アクションは不滅ですね。
パパの採点。１０点満点中９点。
クライマックスで、メインキャラの二人のキスシーンがあったりするんですが、あれって必要だったのかなあ。
話の流れから、あの場面だけ不自然で、むしろ要らないような気がするんですが。
ま、いいか。二人ともかわいいし。

ボーン・アイデンティティ

２００２年アメリカ映画
監督　ダグ・リーマン
主演　マット・デイモン、フランカ・ポテンテ、クリス・クーパー

マット・デイモンさまの代表作っていったらおそらくこの作品になるんじゃないでしょうか。
ちょっと線の細い二枚目俳優だったデイモンさまが、実はハードアクションもこなせるムキムキ俳優だったんだって認められた作品でございます。
この作品の評価がけっこう高かったので、作品はシリーズ化されたってことは皆様御存知の通り。
主人公のデイモンさまは、海で漂流しているところを貨物船に助けられます。
撃たれております。んで、お尻のところにチップみたいなものが埋め込まれていたりします。
でも、記憶がない。自分が誰かわからないわけですね。
埋め込まれていたチップには、スイスの銀行の貸し金庫の情報が書き込まれておりまして、それをもとに彼はスイスの銀行へ。
貸し金庫には世界各国の多額の紙幣だとか、複数の身分証明書があったりします。
どういうことなん？自分って一体何者なん？って感じです。
そこへいきなり警官隊や警備員が乱入。
デイモン、身体が反応するままに警官をやっつけたり、当然のように屋上からの逃亡に成功したり。
で、銀行で出会った女性、ポテンテさまの車に乗って、パリへと向かいます。
実はデイモン、ＣＩＡに雇われた殺し屋で、ＣＩＡの依頼である政治家の暗殺未遂事件に関与していたことがわかってきます。
ＣＩＡの上層部スタッフは、彼が記憶喪失になったことなどもちろん知りません。
彼の口を塞ごうとします。かくしてデイモンさま対ＣＩＡの雇われ殺し屋の戦いが始まります…
マット・デイモンさまがめっちゃいいですね。かっこいいし、適度にムキムキだし。
緊迫した系の雰囲気がよく出せておりました。さすがですね。
パパの採点。１０点満点中９点。
原作はロバート・ラドラムさまの大ベストセラースパイ小説です。
原作の良さも多分にあるのでしょうが、とにかくキャスティングの勝利ですなあ。
クライマックスがちょっとゴタゴタしました。このへんの処理がもうすこし上手くできたらもっとよかったんですが。
ちょっと残念。

サイン

２００２年アメリカ映画
監督　Ｍ・ナイト・シャマラン
主演　メル・ギブソン、Ｍ・ナイト・シャマラン、ホアキン・フェニックス

え～、「シックスセンス」のＭ・ナイト・シャマラン監督による、ＳＦスリラーでございます。
予告編とか見まして、ミステリーサークル（ミス研のことではないですよ～）だとかＵＦＯだとかが出てくることがわかってましたので、どうなるんだろうって心配してたんですよ。実は。
シャマラン監督の持ち味って、やっぱり空前の「ラストのオチ」だと思うんですね。
「シックスセンス」みたいな。
で。
見てみたら。
けっこううまく落としてましたね。
でも「シックスセンス」ほどオチが効いてるわけじゃなくて。ちょっと微妙だなあ。
ギブソンさまは元牧師。妻が交通事故で悲惨な死にかたをしまして、神への信仰心を持ち続けることができなくなった人でございます。
そんな彼の家の畑に、突如ミステリーサークル（ミス研のことじゃないですよ。もうええか）が出現。
ほぼ同時に、ＵＦＯの目撃情報とか、宇宙人が撮影されたビデオとかがテレビ局に寄せられるようになります。
おお、これって宇宙人の襲来の兆候（＝サイン）とちゃうんやろけ～
サークル付近の住人たちは、万が一に備えて避難しますが、ギブソンさん、妻との思い出がつまった家から離れることができません。
やがて宇宙人さんがギブソン家に侵入してまいります…
物語中盤で、監督のシャマラン大先生自らご出演。こんな顔の人だったんだ、って思ってしまいました。
けっこう若い人なんですね～。
もっとおっちゃんやと思ってました。
パパの採点。１０点満点中８点。
最後にちょっとネタバレ。この作品、「サイン」ってタイトルをどう解釈するかによって、面白さ全然違うと思いますね。
とりあえず教授は、この「サイン」ってのはミステリーサークルだとかＵＦＯの出没だとかを指してると思っておりました。
「宇宙人の地球侵略の兆候＝サイン」って感じで。
だから逆に楽しめました。
って書くからネタバレなんですが。

本作中の「サイン」はそういうサインではありませんでした。
その意味は本編でお確かめくださいまし。

死の標的

１９９０年アメリカ映画
監督　ドワイト・Ｈ・リトル
主演　スティーブン・セガール、ベイジル・ウォレス、キース・デビッド

スティーブン・セガールの主演作品。
こういう肉体派俳優さんの映画って、どうしても内容似てきてしまいます。
ジェット・リーとか、バンダムとか。スタローンクラスになっても、内容とかいろんな映画がごっちゃになること多いですよね。
それって私の記憶力の問題なのかもしれませんが。
今回のセガールは麻薬取り締まり局の捜査官。
しかし作品冒頭の潜入捜査で、彼は相棒を失い、女性を巻き添えにして死なせてしまいます。
それによって彼は捜査官を続ける気持ちをなくしてしまいまして、故郷に帰ることになります。
しかしその故郷にも、麻薬の暗い影がひたひたと迫っているわけですな。
故郷を根城に暴れまわっているのは、ジャマイカの麻薬密売組織でございます。
ここのリーダーは、黒魔術だかブードゥー教だとかの呪術師だったりしまして、「おいおい、なんやそれ」みたいな感じになったりします。
まあしかし、呪いをかけたとか言いながら、実は手下が襲いにいくみたいな呪術師ですから、某教団の某教祖みたいなもんでしょうか。
実名あげてポアされるのいやだから某とか書きましたが。
さてさて、セガールは呪術に勝てるのでしょうか。
そして故郷の平和を取り戻すことができるのでしょうか。
国家権力の後ろ楯をもたないパターンのヒーロー映画です。
でもねえ、刑事やＦＢＩじゃない人間がこんなむちゃくちゃしたらあかんと思うんですが。
まあ刑事同行だから良いといえば良いんだろうけど。
パパの採点。１０点満点中６点。
さすがにね、同系統の映画が続くと飽きてきますね、セガールもの。
ってことだから、ＤＭＸさまを起用しての「ＤＥＮＧＥＫＩ」で作風を変えたのはやはり正解だったのではないかと思います。

タッチ

２００５年作品
監督　犬童一心
主演　長澤まさみ、斎藤祥太、斎藤慶太、安藤　希、若槻千夏、宅間　伸、風吹ジュン、本田博太郎、小日向文世

「おんねがぁいターッチ、ターッチ、そこにターッチ」
かの有名な「あだち充」様の人気コミックスの映画化。
ていうか、アニメがひたすら有名でございますな。
「懐かしの傑作アニメベスト〇〇」なんて番組がありましたら、常に上位に入ってくる傑作アニメでございました。
で、今回は映画版。
えっとね、なんか長澤まさみさま一人のために作られた映画って感じですわな。
というか何というか。あまりにも長澤まさみさまだけが目立つ作品になってしまいました。
というか何よいうか。
斎藤兄弟が…　あえてこれ以上書きませんが。
双子の兄弟、上杉達也と和也（斎藤祥太さま、斎藤慶太さま）。
隣に住んでいるのは浅倉南（長澤まさみさま）でございます。
三人の夢は、甲子園に出場すること。いつしか達也と和也は、どちらが南を甲子園に連れていくかってことを競い合うようになります。
高校野球部のエースとして活躍する和也。
兄の達也はなぜかボクシングなんぞをしていたりしまして。
達也がなぜ野球をやらなかったかってえのは、弟和也に気をつかってのことだったわけですな。
そんな和也は、あと一勝で甲子園に行けるという、地区大会決勝の日の朝、道路に飛び出した子供を助けるためにトラックに轢かれて命を落とします。
三人の高校は甲子園出場を逃してしまうわけですね。
んで、達也は野球部に入部して、弟和也の代わりに翌年の大会で南ちゃんを甲子園に連れていこうとするわけですな。
って、お話とかわかってるだろうとは思いますが。
映画では南ちゃんの新体操エピソードをばっさり切ってしまってました。
まさみちゃんのレオタード姿、見たかったのにな～
パパの採点。１０点満点中７点。
えっとね、「タッチ」の映画化にあたって、和也と達也のキャスティングには、今だとやっぱり斎藤兄弟しかいないだろうとは思います。
思うんだけど…
やっぱりちょっと違うかな。

和也が亡くなったところから物語がスタートする「タッチ」を映画化するとしたら、斎藤君の起用はありえないと思うんですわ。
もっと上杉達也のイメージに近い若手さん、いっぱいいてると思うんですよね。
ってことは、斎藤君はとにかくイケメンの双子だから起用されたわけであって。
でも、映画を見る限りにおいては、斎藤君が双子として出ていることがそれほど効果をあげているとも思えず…
これなら上杉兄弟のイメージに近い役者さんに一人二役してもらって合成とかで処理するほうが、映画的にはよかったんじゃないかと思います。
斎藤兄弟…悪くはないんだけどな～

Ｘメン２

２００３年アメリカ映画
監督　ブライアン・シンガー
主演　ヒュー・ジャックマン、ハル・ベリー、パトリック・スチュワート、ファムケ・ヤンセン、イアン・マッケラン

Ｘメンシリーズの第二弾。
アメリカンコミックを題材にしたＳＦアクションでございます。
前作で捕らえられた反人間派のミュータント・マッケランさま。
それによって人類に平和がもたらされたわけですが、大統領がテレポート能力のあるミュータントに襲われるって事件が発生します。
それによってミュータントを管理制圧しようとする機運が高まるわけですね。
ホワイトハウスに対ミュータント秘密部隊のリーダーが召集され、彼の指示によってミュータント狩りが始まります。
しかし不自然な大統領襲撃だとか、強引なミュータント狩りだとかを変だと感じたのがわれらがＸメンなわけですな。
Ｘメンのリーダー・スチュワートさまは、獄中のマッケランさまと面会し、その不穏な動きの裏にあるものを探ろうとします。
一方、前回の事件が決着したときに旅にでた鋼鉄の骨格をもつ鉄の爪男のジャックマンさま、旅から戻ってＸメンチームに合流いたします。
これで主要キャストが終結。
今回はさらに、新しい能力を持ったミュータントたちが登場します。
秘密部隊のリーダー。反人間派ミュータント＝マッケランさま。親人間派ミュータント＝スチュワートさま。
三者それぞれのリーダーたちの思惑が入り乱れ、話はとってもややこしい方向に進んでまいります。
クライマックスの盛り上がりも素晴らしいです。
で、三部作の第二作ではお約束の「トゥ・ビー・コンティニュード」的な終わり方。やってくれます。
パパの採点。１０点満点中８点。
物語の終わらせかたが実に巧いですよね。こんな終わり方されたら、第三作見ないわけにはいかないです。
そのへん、あまりにも姑息なので１点減点。とにかく楽しめました。

ミスター・ベースボール

１９９２年アメリカ映画
監督　フラッド・スケビシ
主演　トム・セレック、高倉　健、高梨亜矢、デニス・ヘイスバート、レオン・リー、亜仁丸レスリー、穂積隆信

これはかなり前に見た映画です。
私的にはちょっと評価の低い作品。
面白くないわけじゃないんですが、明らかに好みじゃない映画でございます。
カテゴリーとしてはスポ根コメディ映画になると思います。
というか、野球ネタはかなりおとなしめで、日本とアメリカ、さらには日本野球とアメリカの野球のカルチャーギャップがメインで描かれております。
アメリカ大リーグのスタープレイヤー・セレックさまが日本にやってきます。
彼の移籍先チームは中日ドラゴンズ。
なんで中日なんやろ。
監督は高倉　健さまでございます。
セレックさまは日本の習慣だとか、日本のプロ野球の習慣に戸惑いながらも助っ人としてがんばるわけですね。
やがてセレックさま、高倉さまの娘・高梨さまに恋をしてしまいます。
ボスの娘に恋をした助っ人さんでございます。さてさてどうなることやら。
とりあえず大リーガー役のトム・セレックさまが中日ドラゴンズに移籍するって設定だけで見てしまった映画でございます。
中日ファンとしてはそれだけでけっこう楽しめた感があります。
これが広島だったらきっと見てなかったでしょうなあ。阪神でも見てなかったです。きっと。
パパの採点。１０点満点中６点。
確かに面白いし、よくできている映画ではありますが、うむむ。ちょっとねえ。
あまりにも物語の展開に乏しかったですので、あまり楽しめなかったですね。
もう少し物語展開が起伏に富んでいたらもっと楽しめたんだけど。
やっぱり私はスポーツものの映画って向いてないのかもしれませんなあ。

ワイルド・シングス

１９９８年アメリカ映画
監督　ジョン・マクノートン
主演　ケヴィン・ベーコン、マット・ディロン、ビル・マーレー、テレサ・ラッセル、デニース・リチャーズ、ネーブ・トーラー

ごめんなさい。
この作品ってネタバレさせないと何もかけない種類の作品なんで未見の方はご注意ください。
ドンデン返しに次ぐドンデン返しに次ぐドンデン返し。
に次ぐドンデン返し。
くらいの作品。
少し前なら、「情婦」「生きていた男」「悪魔のような女」あたりがドンデン返しムービーの定番でございました。
最近だと「ユージアル・サスペクツ」とか「冷たい月を抱く女」とか。
ただ、ひっくり返しの回数の多さは、この作品がダントツ。
ってこういうことを書いてしまうと、それだけで「この映画ってドンデン返しがすんごい回数ある映画なんだってよ～」って気持ちが先入観になってしまって、「だまされる感」を楽しめなくなってしまいますからね～
とにかく誰がワルで誰が騙されてて誰がもっとワルなのか、みたいなことが二十分ごとくらいにころころ入れ替わる強烈な作品。
ディロンさまは高校の教師。
彼は生徒・リチャーズさまをレイプしたってことで告発されてしまいます。
お金持ちのワガママ娘のリチャーズさま。
誠実な教師ディロンさま。
真相はいかにって裁判が始まるわけですが、検察側は、リチャーズさまの友人のトーラーさまを証言台に座らせます。
彼女もまた、ディロンさまにレイプされたと証言。
ディロンさまにとっては絶対不利な状況。
弁護士のマーレーさまはトーラーさまの証言の矛盾を突き、彼女の証言が偽証だと見抜きます。
生徒指導の仕事でディロンさまと交流のある警察官・ベーコンさまも裁判の成り行きを見守ります。
さてどうなるか。
ここからもう、ノンストップの勢い（二十分に一回くらいの割合でドンデン返しがひたすら起こり続けます）で騙す側と騙される側が入れ替わっていきます。
こんなにすごい映画も珍しいですよ。
パパの採点。１０点満点中９点。

えっと…めっちゃくちゃ面白かったんですが…途中から「もうええやろ」って思ってしまいました。
ドンデン返しが続きすぎるのもよくないってことでしょうか。
しかし、この物語展開、私の作家的予測の範囲を軽く超えておりました。
そういう意味では予測不可能な映画。
でも、最後の最後の結末部分だけはちょっとだけ予測できるかも。

ユージュアル・サスペクツ

１９９５年アメリカ映画
監督　ブライアン・シンガー
主演　ガブリエル・バーン、ケヴィン・スペイシー、スティーブン・ボールドウイン、ケヴィン・ポラック

久しぶりの映画数珠つなぎです。
今回は前頁でご紹介しました「ワイルド・シングス」から「ドンデン返しが効いている映画」つながりで、「ユージュアル・サスペクツ」のご紹介。
ガブリエル・バーンさまとケヴィン・スペイシーさま、今では超メジャーなこの二人の名優ですが、私はこの映画を見た時点ではどちらもはっきりわかってなかったです。
「ユージュアル・サスペクツ」ってのは、まあ「いつもの容疑者」みたいな感じの訳になるんでしょうか。
カリフォルニアの埠頭で、船が爆発します。
で、積荷のコカインと大金が消えてしまいます。
で、「なんでこんなふうになったか」を描くわけですな。
警察は、事件で無傷で生き残った男・スペイシーさまを尋問いたします。
この「尋問」の回想として物語が進行していきます。
ある事件の捜査のために、五人の「いつもの容疑者」が集められます。
しかしこの事件に関して、彼らは証拠不十分ってことで釈放されます。
五人の男たちはこの機会に犯罪チームを組むことになります。
まずは押収品を乗せたパトカーを襲撃。
大量の宝石をゲット。
盗んだ宝石を金に換えるために故買屋とコンタクトをとりますが、そこで新しい話を持ちかけられます。
しかしその話は、伝説のギャング、「カイザー・ソゼ」の罠であり、彼ら五人はそれぞれ過去に「カイザー・ソゼ」のものを盗んだという過去があることが明らかになります。
「カイザー・ソゼ」は、復讐のために彼らを操っていたわけですな。
彼らが最初に集められたこともそもそも仕組まれたものだったわけでして。
そして彼らは、「カイザー・ソゼ」から見逃してもらう代わりに、危険な仕事を引き受けるよう強要されるわけでございます。
果たしてその仕事は成功するのか…
と、わわわって書きましたが、物語がかなり複雑に入り組んでいる上に、ひっかけや伏線があちこちにちりばめられておりまして、かなりややこしい。
しかし頑張ってついていってください。
ラストには、映画史上に残るドンデン返しが用意されておりますよ～

パパの採点。今日から１００点満点。９２点です。
とにかくガブリエル・バーンさまとケビン・スペイシーさまが素晴らしいですね。
何度でも見たくなる犯罪ミステリーの傑作でございます。

交渉人

１９９８年アメリカ映画
監督　Ｆ・ゲイリー・グレイ
主演　サミュエル・Ｌ・ジャクソン、ケヴィン・スペイシー

数珠つなぎでございます。「ユージュアル・サスペクツ」から、主演のケヴィン・スペイシーさまつながりで「交渉人」のご紹介。
この映画も面白かったですね～
「交渉人」ってえのは、人質事件だとかの際、犯人と交渉を行う刑事のこと。
本作で登場する交渉人は、シカゴ警察の交渉人。
シカゴ警察のサミュエル・Ｌ・ジャクソンさまと別地区で活躍するケヴィン・スペイシーさまが物語の二人の主人公です。
ジャクソンさまは、同僚から警察基金の横領を思わせる不透明な金の流れがあるらしいって話を相談されます。
詳しい話を聞くために彼のもとに行くと、すでに同僚は殺されています。
かくしてジャクソンさまは殺人と横領の容疑者となってしまいます。
ジャクソンさまは濡れ衣を晴らすため、警察のビルに人質をとってたてこもります。
警察の内部の誰が横領にかかわっているかわからない状況です。
そこで彼は自分に対する交渉人として内部の人間ではなく、別の管轄区のスペイシーさまを指名します。
さあここからジャクソンさまとスペイシーさまの頭脳と頭脳の戦いが始まるわけですね。
俺ならああする、俺ならこうするって予測と予測の駆け引き。
しかし、横領事件の鍵を握る人物が、ＳＷＡＴの発砲によって死んでしまいます。
さらに警察上層部とＦＢＩの指示で、スペイシーさまは事件の担当から外されてしまいます。
しかし何かに気づきはじめたスペイシーさま、ビルに潜入してジャクソンさまと会おうと試みますが…
もう、頭脳と頭脳の格闘技。
そして後半はこの二つの頭脳が真犯人を探そうとするわけですな。
全体の構成もバランスも申し分なし。素晴らしい作品でございます。
パパの採点。１００点満点で８５点です。
もう少し高い点数つけようかな、とか思いましたが、クライマックスでちょっとひっかかるシーンがありまして。
なんで？みたいな。
このシーンがなくて、同じようなラストにつなげることができたら９０点超えてたんだけどな。

マシンガン・パニック

１９７３年アメリカ映画
監督　スチュワート・ローゼンバーグ
主演　ウォルター・マッソー、ブルース・ダーン、ルイス・ゴセット・Ｊｒ

映画数珠つなぎでございます。
「交渉人」から、「警官主人公のミステリ」つながりで、「マシンガン・パニック」。
犯罪小説の傑作、「笑う警官」の映画化でございます。
深夜バスの車内。後部シートに座っていた乗客が、突然鞄を開けて、ゴソゴソと何かを始めます。
何してるんだろうって思ってたら、男は実はマシンガンを組み立てていたわけで、突然そいつを乱射。
乗客のほとんどを射殺して、犯人はいずこかへ立ち去ります。
この事件を追うことになるのが、殺人課の刑事マッソーさまでございます。
被害者の一人が警官でございまして、マッソーは実はこの事件は大量殺人そのものが目的だったのではなく、犯人のターゲットはその警官で、残りの被害者は巻き添えだったのではないかと推理します。
そして彼は、警察の内部の暗い部分を追うことになるわけですね。
って書いたけど、内容なんかとにかくウロ覚え。
多分異常性欲か何かがからんでいたような記憶があるんだけど。
手元にある資料片っ端からひっくり返してみましたが、詳しい内容の記述とかほとんどなかったりして。
っていうか、ほとんどの資料が、冒頭のマシンガン乱射シーンの記述ばっかりでございまして。
この作品って、むしろ後半のどんよりした部分がメインになっていたと思うんですが。
かくいう私の記憶も、とにかくマシンガン乱射シーンしか残っていないわけで。
どういうことざんしょ。こんな映画も珍しい。
パパの採点。１００点満点で６５点です。
とにもかくにも、映画的なハイライトシーンが作品冒頭に登場せざるを得ないわけでございまして、そういう意味ではとっても不遇な題材だったと考えざるを得ないですね。
どうしてもそこから先の部分を盛り上げることが難しくなってしまいます。
で、題材として一番伝えたい部分が説明臭くなって、付け足しみたいに感じられてしまって。
そういう意味ではミステリの映画化って難しいですよね。

サブウェイ・パニック

１９７４年アメリカ映画
監督　ジョセフ・サージェント
主演　ウォルター・マッソー、ロバート・ショウ、マーティン・バルサム、トニー・ロバーツ

映画数珠つなぎでございます。
「マシンガン・パニック」から、ウォルター・マッソーさまつながりで、「サブウェイ・パニック」。
えっと、確かに乗客、パニック状態にはなるんだけど、このタイトルってどうなんやろ。
一時期、一世を風靡した「パニック大作映画」の流れに乗ろうとしたのか、しなかったのか。
映画の製作年度から思いますに、「大地震」とか「エアポート７５」なんかの時期とかぶりますよね。
だからパニック映画として売りたかったんじゃないでしょうか。
ちなみに映画の原題は「ペラム発１２３号の乗っ取り」でございます。
「１時２３分ペラム発」って訳していた本もあったけど。
「テイキング・オブ・ペラム１２３」ですから、前者が正解ですよね。
四人の男たちがニューヨークの地下鉄を乗っ取ります。
彼らは乗客を人質にして、１００万ドルの身代金を要求します。
犯人グループがショウさま・バルサムさま・ロバーツさまら。
これに対する警察がマッソーさまでございます。
警察と犯人グループのスリリングな交渉。暴走する地下鉄の迫力満点の描写。
「交渉人・真下正義」の物語って、この映画を参考にしたんでしょうね。
個人的には「サブウェイ・パニック」のほうが好きですが。
ロバート・ショウさまがめっちゃいいです。ウォルター・マッソーさまもすごくいい。
ロバート・ショウさまって、「００７ロシアより愛をこめて」をテレビオンエアで見たときから大好きな役者さんだったんですが、亡くなってしまいましたよね。
もうちょっと活躍して欲しかったんだけどなあ。
パパの採点。１００点満点で８５点です。
ウォルター・マッソーさまをキーワードにした数珠つなぎですから、普通だったら「おかしな二人」にいって、ジャック・レモンものにつなげるのが普通の流れなんでしょうが、なんとなくこの作品を思いだしたので、こっちをご紹介しました。
作品的には「おかしな二人」よりも「サブウェイ・パニック」のほうがはるかに好きですね～
やっぱりコメディは苦手なのかな、私って。

スティング

１９７３年アメリカ映画
監督　ジョージ・ロイ・ヒル
主演　ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード、ロバート・ショウ

映画数珠つなぎでございます。
「サブウェイ・パニック」から、敵役のロバート・ショウさまつながりで、「スティング」。
マーヴィン・ハムリッシュさまのご機嫌な主題曲「ザ・エンターティナー」のピアノの旋律が印象的です。
詐欺師たちを描いた傑作映画。
レッドフォードさまはちょっとシケた詐欺師でございます。
彼は黒人の老詐欺師と組んで仕事をしていましたが、ある日、そうとは知らずに暗黒街の顔役・ショウさまの手下をカモってショウさまの組織の金を巻き上げてしまいます。
で、レッドフォードさまの師匠でもある老詐欺師は殺されてしまいます。
復讐を誓ったレッドフォードさまは、引退状態にあった伝説の詐欺師・ニューマンさまと組んで、「自分が騙されたことにさえ気づかない詐欺」を計画し、ショウさまから大金を巻き上げようとします。
まずはレッドフォードさまがイカサマポーカー賭博でショウさまに近づきます。
そしてショウさまにイカサマ競馬で大もうけをしようともちかけるわけですな。
このイカサマ競馬がニューマンさま・レッドフォードさまの大仕掛けなわけでございます。
もう、本当、これぞ一世一代の大イカサマって感じ。
しかし簡単に詐欺は完成しないわけでして。
ニューマンさまを狙うＦＢＩだとか、ショウさまが「組織の金を盗んだ詐欺師を始末しようとして」差し向けた殺し屋だとかが動き回り、さらにはショウさまも一筋縄ではいかない大物。
さてさて、二人の詐欺師たちはショウさまをうまくカモれることができるのでしょうか…
もうねえ、最初の主題曲を聴いただけでどっぷりと「スティング」の世界に入り込んでしまいます。
とってもすばらしい時間を約束してくれる一本。
数度にわたるドンデン返しもめっちゃイカしてます。
こんな映画にめぐりあえたってことを神様に感謝したくなる一本でございます。
パパの採点。１００点満点で９５点です。
「とにかく見ろ」って感じの映画。これからこの映画を見る人は幸せですね～　本当にそう思います。

ハスラー２

１９８６年アメリカ映画
監督　マーティン・スコセッシ
主演　ポール・ニューマン、トム・クルーズ、メアリー・エリザベス・マストラントニオ

映画数珠つなぎでございます。
「スティング」から、ポール・ニューマンさまつながりで、「ハスラー２」。
「ハスラー」は見ておりません。なんかしらんけど「ハスラー２」は見ました。
この映画の予告編、めっちゃかっこよかったもんで。スコセッシ監督作品だし。
第一作は、若きハスラーのニューマンさまが、老獪なハスラー「ミネソタ・ファッツ」に戦いを挑み、一度は負かされるものの再起して再び戦いを挑むっていう、なんかスポ根ものみたいなノリのビリヤード映画でございましたが…
今回の作品はその２５年後。
かつての「若き天才ハスラー」ニューマンさまもすでに現役を引退しておりまして、今ではセールスマンなんぞをしております。
ある日、彼はビリヤード場で、次々と相手を負かし続ける「若き天才ハスラー」クルーズさまと出会います。
クルーズさまの姿に自分の若き日を重ねあわせた彼は、クルーズさまを一流のハスラーに育てあげようとするわけですね。
クルーズさまはやはり天才。しかし傲慢。
ビリヤードの何たるかをクルーズさまに教え込みたいって思いと、俺ももう一度やってみたいって思いとが高まり、ついにニューマンさまはビリヤードの世界にカムバックする決意を固めます。
そしてクルーズさまの目の前にたちはだかるわけでございます…
ポール・ニューマンさまはこの作品でアカデミー主演男優賞を受賞いたします。
さすがの貫禄さすがの名演技。やはりこれくらいの大物になりますと、立っているだけで雰囲気がかもし出されるっていうか何というか。
トム・クルーズさまもがんばっております。
考えてみたら、ジョージ・Ｃ・スコットさま（タップス）、ダスティン・ホフマンさま（レインマン）、ジャック・ニコルソンさま（ア・フュー・グッドメン）などなど、本当に共演者に恵まれていますね、トム・クルーズさまって。
この映画ではポール・ニューマンさまだし、競演が縁になって奥さんもらっちゃったし（ニコール・キッドマンさま。別れちゃったけど）。
そういえば、ケン・ワタナーベさまもトム・クルーズさまと競演しましたよね。
謙さま、いつかアカデミー賞とって欲しいんだけどな…
パパの採点。１００点満点で７５点です。

面白いことは面白いんだけど、第一作を私が勝手に見ていないから、若干減点しておきました。
「ハスラー」を見たあとでこの映画を見たら評価かわるかもしれませんが、「１」「２」ものはとにかくそういう評価をされてしまわれがちなんだってことを十分にわかった上で製作者サイドも続編製作したわけでしょうし。
だからちょっと評価は低めに設定。「ハスラー」見てから見たかったですね。

タップス

１９８１年アメリカ映画
監督　ハロルド・ベッカー
主演　ティモシー・ハットン、ジョージ・Ｃ・スコット、ショーン・ペン、トム・クルーズ、ロニー・コックス

映画数珠つなぎでございます。
「ハスラー２」から、トム・クルーズさまつながりで、「タップス」。
なんかねえ、とってもせつない青春を描いた映画でございます。
こういう青春もありなんですよね。
そしてこういう生とかこういう死とかもありなんだろうなあ。私たちが知らないだけで。
士官学校が物語の舞台です。
その学校に入った生徒たちは卒業するまでの間、徹底的に士官としての心得だとか規律だとかを叩き込まれるわけですね。
でも時代はそんな学校の存在を許さなくなっています。
校長スコットさまは、ハットンさまが最高学年になる年の新学期に、学校の来年度廃校を発表します。
どんより。しかし事態はもっと悲惨になります。
士官学校の教師でもある将軍、町の若い奴の喧嘩を止めようとして、そのとき銃が暴発。
若い奴が死亡してしまうという事故が起こってしまいます。
この一件がもとになり、士官学校の即時廃校が決まってしまいます。
これを知った生徒たち、ハットンさまをリーダーとし、学校資材の銃や手りゅう弾で武装して学校に篭城。
生徒たちのこの反乱は、やがて最悪の結果をもたらすことになります…
私がこの映画を見たとき、この作品にトム・クルーズさまが出演していること知りませんでした。
「え？これ、トム・クルーズさまやん」ってびっくりしました。
当時はやっぱりティモシー・ハットンさまだとかショーン・ペンさまなんかのほうがメジャーな役者さんだったんですね。
「アウトサイダーズ」にトム・クルーズさまが出ていたのを知ったときもけっこうびっくりしましたが。
パパの採点。１００点満点で８０点です。
タップスってのは、映画の冒頭、ジョージ・Ｃ・スコットさまが戦没した卒業生の名前を読み上げる場面がありまして、そのときに何度も出てくる言葉です。
「だれそれ、タップス、いついつ…」みたいな使い方。
「没」みたいな訳しかたするんでしょうか。

このタイトルが、この映画のどんよりとした世界そのものを象徴しているような気がします。

未知との遭遇

１９７７年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　リチャード・ドレイファス、フランソワ・トリフォー、テリー・ガー

私と同世代の方なら、誰でも音楽室のピアノで「ラシソソレ～」なんて弾いた覚えがある、または弾いている奴を見た覚えがあるのではないでしょうか。
人類と宇宙人とのロマンあふれるファーストコンタクトを描いた、スピルバーグ監督のアーリーな時期の秀作でございます。
電気技師のドレイファスさま。
彼は不可解な街の停電を調べるうち、上空を通過する巨大なＵＦＯを目撃します。
で、彼はＵＦＯを研究することにはまってしまうわけですな。
会社をクビになったり、嫁さんに逃げられたり。
まあ、しかし、それはそれ。ＵＦＯ好きな好事家たちの仲間に入れば寂しくもなく、むしろ楽しいわけで。
そんな感じで彼はますます研究に没頭していくわけでございます。
これまでＵＦＯ事件にかかわった人たちの記憶に残っている「山」の景色が不思議なほど一致しておりまして、実はそこはＵＦＯが着陸する場所なんじゃないかって話になります。
しかしその山はなぜか国家が立ち入りを制限していたりします。
危険を承知でその山の中に潜入したドレイファスさまたち。
彼らはそこで驚愕の光景を目の当たりにします…
って、わずかな記憶を頼りに書きましたが。
細部の筋立てとか間違ってたらごめんなさい。
めっちゃ前に見た映画なんで。
クライマックスのＳＦＸはやっぱり見事。スピルバーグ監督の力量をまざまざと見せつける結果となった作品です。
パパの採点。１００点満点で７５点です。
でも、宇宙人ってどうなんでしょうか。
良い宇宙人と悪い宇宙人、ファーストコンタクトまでに判断するって難しいような気がします。
この映画とか「Ｅ．Ｔ．」みたいな宇宙人だったらいいけど、「サイン」とか「宇宙戦争」なんかの宇宙人だったらドレイファスさま、ひどい目にあってると思うし。
「インデペンデンスデイ」なら光線直撃でしょうなあ。
「Ｖ」みたいなはなからダマシ目的の宇宙人だと間違いなく騙されてるだろうし。
「未知との遭遇」は慎重にいきたいものですね。

何がジェーンに起こったか

１９６２年アメリカ映画
監督　ロバート・アルドリッチ
主演　ベティ・デイビス、ジョーン・クロフォード、ヴィクター・ブルーノ

ほんま、すごい映画ですよ。
ジャンルとしては、サイコスリラーとホラーの中間になるのかなあ。
ほんま、めっちゃ怖い映画。
とりあえずベティ・デイビスさまが怖い。
もうねえ、存在そのものがめっちゃ怖い。そこにいてるだけでめっちゃ怖いです。
ベティ・デイビスさまが演じるのは、往年の名子役「ベイビー・ジェーン」でございます。
彼女はもうすっかり年をとりまして、芸能界から引退。
事故で足が不自由になった姉・クロフォードさまとでっかい屋敷に住んでおります。
デイビスさまはもう、めっちゃ過去の栄光にすがりながら生きています。
閉塞的な状況の中、度を過ぎた飲酒なんかのせいもありまして、次第に彼女はカムバックの幻想を信じはじめます。
で、自分のカムバックの邪魔をしているのは、車椅子の姉なんだって考えはじめるわけですな。
もう、ここからはノンストップホラーの様相を呈してまいります。
徐々に彼女は姉に対していやがらせをするようになり、やがてそれが暴力へと発展していきます。
そして見るも無残なクライマックスが待っているわけでございますです。
もう、とにかくベティ・デイビスさまに尽きますわ。この映画。
とにかく半端じゃない存在感でございます。
この人の怪演があってこそはじめてこの作品がすげえ恐ろしい傑作となり得たんじゃないかと思います。
パパの採点。１００点満点で８５点です。
この映画のあまりにもどんよりしたラスト、本当、どうにかならなかったのかなあって思います。
他にやりようあったんじゃないかなって思うんだけどなあ…

禁じられた遊び

１９５２年フランス映画
監督　ルネ・クレマン。主演　ブリジット・フォッセー、ジョルジュ・プージュリー、リシュアン・リュベール。

映画本編ももちろんですが、主題曲もひたすら有名な作品。
曲はナルシソ・イエペスでしたっけ。クラシッククギターのみならず、フォークギターやエレキギターやってるロック小僧でも、ほとんどの人がこの曲弾いたことあるんじゃないでしょうか。って勝手に思うくらい有名な曲でございます。
んで、映画のほうは「心に残る名画ベスト〇〇」みたいな本とかがあったら、常に上位ランクされるくらいの傑作。
いかにもフランスらしい、って書き方したら語弊があるかもしれないけど、そういう傑作名画でございます。
舞台はドイツ軍の侵攻にさらされる戦時下のフランス。
少女フォッセーさまの両親はドイツ軍に殺されておりまして、彼女は死んだ小犬をかかえたままどうすることもできなくなっております。
そんな彼女の目の前に現れたのが少年プージュリーさまですな。
彼はフォッセーさまを家に連れて帰ります。
二人で遊ぶうち、フォッセーさまは、人は死んだらお墓に入ること、そしてそのお墓には十字架を飾ったほうがよいことなどを知ります。
死んだ小犬にお墓を作り、そしてそこここで見つけた生き物の死骸のためにお墓を作ってあげることに熱中しはじめます。
やがてプージュリーさまはフォッセーさまのために、本物のお墓に飾られてある、本物の十字架を盗んで、フォッセーに贈りはじめます…
もうねえ、めっちゃどんよりします。
いい作品には違いないんですが。うるっとくるんですが。
こういう作品、あまり得意じゃないし、好んで見ないジャンルであります。名作には違いないんだけど…
パパの採点。１００点満点で７５点です。
作中であまりにもかわいかった主人公のブリジット・フォッセーちゃん。
後に美しく成長しまして、アラン・ドロンさま＋チャールズ・ブロンソンさま主演の「さらば友よ」なんて映画に出演したりします。
「さらば友よ」にしたって私が見たのは小学生の頃だからなあ。
ブリジット・フォッセーさまもすっかりおばはん、いや、おばあさんになってるんでしょうなあ。
オーメンのダミアン君もすっかりおじさんになったもんなあ。

って思ってたら、実は「ニューシネマ・パラダイス」の完全版にご出演されていたご様子。
フォッセーさま、すでに60歳を軽く越えておられるようです。
そらそうやわな。

華の乱

１９８８年東映作品
監督　深作欣二
主演　吉永小百合、松田優作、緒形拳、松坂慶子、石橋蓮司、風間杜夫

情熱の歌人・与謝野晶子の半生を綴った深作欣二監督の文芸大作でございます。
深作さまって基本はアクションの人なんですが、「蒲田行進曲」にしても「上海バンスキング」にしても「火宅の人」にしても、実にほっこりと仕上げてくれますね。
「蒲田…」とか「上海…」なんかは、ところどころに入るアクションっぽい描写が逆に鮮烈で、すっげえよかったです。
「華の乱」はねえ…
時代が時代だけに、日露戦争とか関東大震災なんかの描写がちょこっと入るは入るんですが、そんなに印象的な入りかたはしてこなかったです。
晶子＝吉永さまと、有島武郎＝松田さまの出会いのシーンで、短くバイクアクション（になるんだろうなあ）が入ったくらい。
もうちょっと動きのある映像見たかったんですけど。
まあ題材が題材なだけに、アクションシーン入れようがなかったのかな。
歌人、晶子＝吉永さまは、家族を捨てて、妻子持ちの与謝野　寛＝緒形さまのところに嫁ぎます。
当然、奥さん＝西川峰子さまは出て行きます。
で、乳房がどうのこうのって強烈な歌を残すわけですな。与謝野＝緒形さまはけっこう強烈な鬱病を患っておりまして、晶子＝吉永さまは何から何までやらなきゃいけない、みたいな日々を送っておりましたが、そんな中、作家の有島＝松田さまと出会うわけですな。
で、ときめいちゃう。
松田さまのそばには雑誌編集者の池上さまなんかがおるわけです。
池上の旦那さんが成田三樹夫さま。この人も好きな役者さんやあ～
緒形さま、愛人を作って家を出て行ったりしまして、次第に吉永さまの心は松田さまにひかれていきます。
んで、吉永さまと松田さま、結ばれる。
しかししかし御存知の通り、松田さまは池上さまと心中しちゃう。
緒形さまは愛人を亡くし舞い戻る。みたいなあ。
ここらへんの時代、極端に弱いですから、事実がどうだったとか、今回の映画のための創作がどのへんからどのへんまでなのかとかちょっとわからないです。
まあどっしりとした映画見せてもらったなあって印象が残りました。
パパの採点。１００点満点中７５点。
んまあねえ、どっしりとしすぎてて性に合わないって映画もありましてね～

どこがどう悪いとかはないんですが、ちょっと苦手な映画でした。
大正期の女優を演ずる松坂慶子さまがめっちゃよかったです。
松坂さまの名演技に五点献上でございます。

９デイズ

２００２年アメリカ映画
監督　ジョエル・シューマッカー
主演　アンソニー・ホプキンス、クリス・ロック

原題は「バッド・カンパニー」。
おお、ポール・ロジャースとかがいきなり「キャント・ゲット・イナフ」とか歌いだしそう。
アンソニー・ホプキンスさまがめっちゃくちゃかっこええ、スパイ映画の秀作。
「羊たちの沈黙」あたりの作品で、めっきり変態俳優っぽくなってしまったホプキンスさまですが、「表面は冷たく接しているように見えるけれども、実は情に深いスパイなんやで、わしは」みたいな複雑な芝居で実力を見せつけてくれたような作品でございます。
ホプキンスさまはＣＩＡのエージェント。
ロシアのマフィアが売りさばこうとしている小型の核爆弾がありまして、武器商人としてロシアンマフィアに近づき、そのブツを押さえようという作戦を進めております。
作戦の中心人物がこれもＣＩＡのエージェント、ロックさま。
しかしロックさまは取引直前（１０日前ですな）、同じ核爆弾を手に入れようとしているテロリストに撃たれ、命を落としてしまいます。
取引はロシアンマフィアとの仲介役の武器商人を演じていたロックさまなしには成立しない。
困ったＣＩＡは死んだロックさまに双子の弟（もちろんロックさま）がいたことを調べ上げ、彼に９日間、死んだ兄の代役を務めるようにもちかけるわけです。
ところがこの弟ロックさまは働きもしないでコンサートチケットのダフ屋で生計をたてているような不良青年。
ＣＩＡは「世界を破滅から救うかもしれない男」を総力をあげて鍛え上げることになるわけです。
そして二人は取引の日を迎えるわけですが…
シナリオがちょっとご都合主義なのが気になりますが、それはそれ。
いいじゃないですか。ホプキンスさまもロックさまも運が良かったんだから。
多少のご都合主義的な偶然が続くのは、この際大目に見ましょう。
パパの採点。１００点満点中８０点。
とにかくホプキンスさまがめっちゃいいです。
ちょっとコメディタッチのこんな作品でも、存在感を示しながらめっちゃいい芝居する。
さすがの名優ですね。ホプキンスさまのアクションシーンってのもあまり見てないような気がしますね。
そういう意味では貴重な作品なのかもしれません。

日本の黒い夏・冤罪

２０００年日活作品
監督　熊井　啓
主演　中井貴一、寺尾　聰、石橋蓮司

タイトルだけ見て、てっきり終戦直後から高度成長時代あたりのころに実際にあった事件を映画化したものだと思っておりました。
ところがどっこい。めっちゃ最近の事件を描いた作品だったんですね～　びっくりしました。
題材はまだまだ記憶に新しい、松本サリン事件でございます。
そこらへんの予備知識全くない状態で見た映画ですので、めっちゃ驚きました。
映画はこの「松本サリン事件」の通報者で、それがために犯人ではないかと警察に聴取をうけ、さらにはマスコミによって犯人扱いされた一市民が、「冤罪」によって苦しめられる様子を描きます。
物語は、松本市の地元の高校の放送部が、この「松本サリン事件」についての取材を行うってところから始まります。
マスコミ各社は軒並み彼らの取材を断るわけですが、唯一中井さまがデスクを勤める新聞社だけが彼ら高校生の取材に応じます。
物語は取材記者やデスクが、高校生の質問に答えながら、当時の状況を振り返る回想形式で進んでいきます。
通報者寺尾さまは、自らもサリンの被害にあい、重篤な健康被害を受けた妻もいます。
しかしながら、若干の薬品知識と、さらには家の納屋に薬剤を保管していたという理由だけで、警察には犯人扱いされてしまうわけですね。
やがて少しずつ、真実が明らかになっていきます。
警察内部にはかなり早期の段階から、犯人グループはこの疑われている寺尾さまではなく、彼とは無関係のカルト教団ではないかとの情報を握っているわけですが、その事実はマスコミには明らかにはされない。
マスコミはマスコミで、ろくな裏付け取材もなしに寺尾さま犯人説を流しつづけます。
かくして「マスコミによってつくられた犯人寺尾さま」は、結局真犯人が明らかになるまで、容疑者扱いの冤罪に苦しみ続けることになるわけでございます。
なんかねえ、マスコミのありかたとか報道のありかたとか、めっちゃ考えさせられる作品でございます。
本当、難しいテーマなんだけど。
パパの採点。１００点満点中９０点。
淡々と描かれがちな題材なんですが、演技巧者をうまく配置することで見ごたえのある作品に仕上がっております。
中井さまと石橋さまが特にいいですね。

また、事件そのものを時系列順に描かずに、回想形式でランダムに並べたところも効果的。
サリン事件の悲劇的状況がクライマックスで描かれるあたり、ほとんどパニックサスペンスみたいで、かなり見ごたえがありました。

マルコヴィッチの穴

１９９９年アメリカ映画
監督　スパイク・ジョーンズ
主演　ジョン・キューザック、キャメロン・ディアス、ジョン・マルコヴィッチ、チャーリー・シーン、ショーン・ペン、ブラッド・ピット、ウイノナ・ライダー、スパイク・ジョーンズ

本当にアメリカって国は面白い。いきなりこんな映画が飛び出してくるわけですから。
ほんまわけわからん映画です。
主人公のキューザックさまは操り人形師でございます。
街角で、子供相手にエロ人形劇を披露してその父親にしばかれる、みたいな。
しかしいつまでも食えない人形劇なんてしていられなくなりまして、キューザックさまは就職することになります。
めっちゃ変な会社なんだけど。そこの会社で書類整理をしていたときに、彼が見つけた不思議な穴。
その穴は、俳優ジョン・マルコヴィッチさまの視点の中に入ってしまう穴、というかマルコヴィッチさまの脳の中につながる穴だったわけですね。
まあ、マルコヴィッチさまが体験できるわけです。
数分間だけど。
で、マルコヴィッチさま体験が終わると、川原に放り出されると。
けっこうわけわからん設定ですが。
やがてキューザックさまは、マルコヴィッチさまの精神と同調する方法を見つけ、「数分間」のマルコヴィッチさま体験時間を延長することに成功します。
俳優マルコヴィッチさまはいつしかキューザックさまに乗っ取られてしまって…
なんてけっこうとんでもない映画。
自分の精神の中に立ち入られていることに気づいたマルコヴィッチさま本人が、自ら穴の中に入り、自分自身の精神世界に入り込むなんてえややこしい場面がありましたが、そのシーンが絶品。
レストランにいる客やボーイ、ピアニストにシンガーみんながマルコヴィチさまで、しゃべる言葉が「マルコヴィッチ、マルコヴィッチ」。
もう、脳みそがとろけそうになるようなシーンでございましたです。
パパの採点。１０点満点中８０点。
監督のスパイク・ジョーンズさまと親交の深い俳優さんや監督さんが大挙出演。
チャーリー・シーンさまだとかショーン・ペンさまだとかブラッド・ピットさまだとかデビッド・フィンチャーさまだとか。
チャーリー・シーンさまとブラッド・ピットさまは見つけることができたけど、あとの人は見つけられなかったです。

とにかくジョン・マルコヴィッチさまの怪演を見るだけでも十分に価値のある作品でございます。

ロボコップ

１９８７年アメリカ映画
監督　ポール・ヴァーホーヴェン
主演　ピーター・ウェラー、ナンシー・アレン、ロニー・コックス

この３６５日映画紹介本もそろそろ二冊目が終わろうとしております。
いやあ、頑張りました。パチパチパチ。
そういうことで、ここからはまだご紹介していないお気に入り作品をぼっつらご紹介してまいりますね。
二冊目３５８本目の作品は「ロボコップ」。
寝違えで首が痛くて、ギクシャク歩いてるときなんかは、「あの子、ロボコップみたい」なんて言われたりしました。
近未来のアメリカ。
警察を民営化しようなんて動きが出てまいりまして、警察組織は巨大企業の傘下に入っております。
ハイテク企業のこの会社、治安維持ロボットを開発中。
警官のウェラーさまは麻薬密売マフィアを追ううち、マフィア一味に捕らえられ、惨殺されてしまいます。
治安維持のためのロボット警官の導入を進めていたハイテク企業は、彼の脳や身体の一部を利用して、人間型のロボット警官を試作します。
このロボット警官＝ロボコップの活躍を描くのがこの作品。
ロボコップ、大活躍するわけですが、ときどき人間時代の警官ウェラーさまの記憶がフラッシュバックしたりして、ロボットのくせに苦しんだりします。
そうこうしているうちに、警官ウェラーさまを殺した麻薬マフィア一味の麻薬精製工場に突入することになったロボコップ。
しかし彼はその工場で、一連の事件の黒幕が「警察を傘下におさめたハイテク企業の重役」であることを知り、単身、その重役逮捕に向かいますが…
私的にはけっこう、というかかなり好きな作品でございます。キャラクター設定もかなりおいしいですわな。
ラストもヒネリが効いていてなかなかよかったです。
作品途中で「死んだかもしれんなあ」って誰もが思ってしまったナンシー・アレンさまですが、残念ながら女ロボコップに転生することなく、普通の婦警さんとして続編「ロボコップ２」にご出演されております。
パパの採点。１０点満点中９０点。
勇壮なテーマ曲もけっこういけております。
この作品があまりにも面白かったんで映画はこの後、シリーズ化されまして、さらにさらにキャ

ラクターだけを引き継いだテレビドラマなんかも製作されたりします。
まあそれだけ面白かったってことでしょうね。

ダイハード

１９８８年アメリカ映画
監督　ジョン・マクティアナン
主演　ブルース・ウィリス、ボニー・ベデリア、レジナルド・ベルジョンソン、アラン・リックマン

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介です。二冊目３５９本目は「ダイハード」。
この映画を見た当時、私はブルース・ウィリスさまのこと知りませんでしたが、とにかくこの人、この作品一作でスターダムにのしあがりました。
ロサンゼルスにそびえたつ日系企業の超高層ビル。
完成間近のこのビルに、ウィリスさまの妻ベデリアさまが勤めることになっております。
クリスマスイブの夜、完成披露パーティーの日。
ビルにテロリストが乱入し、高層階を占拠。
妻に会いにこのビルを訪れていた刑事マクレーン＝ウィリスさま。
不穏な雰囲気をいち早く察し、テロリストに拉致されるという難を逃れて、たった一人で完全武装のテロリスト集団と戦うことになります。
ウィリスさまの活躍っぷりはもうほとんどスーパーマンなんですが、この作品を特に印象深く仕上げたのは、「クリスマスイブなのに、何で俺はこんなひどい目にあわなきゃいけないんだよお」みたいな独り言をぶちぶち言いながら戦うところあたりでしょうか。
スーパーヒーローでもやっぱりそうなんや。
私だってそうやなあ。
めっちゃひどい仕事押しつけられたときだって、ぶちぶち言いながらでも結局仕上げちゃうもんなあ。
これを文句言わずにやったらかっこいいだろうに。
なんて思いながら、すっごく親近感持ちながら見てしまうスーパーヒーローでございます。
孤立無援で戦うウィリスさまに味方するのは、最初にウィリスさまと警察無線でやりとりした警官、ベルジョンソンさまでございます。
二人のやりとりもけっこうイカシテます。
ウィリスさまにむかって「君はよくやっているが、事態を複雑にしているぞ」なんて平気で言ってしまうオマヌケＦＢＩもええ感じ。
ちなみにＦＢＩの行動は完全にテロリストグループに読まれていたりします。
「ひょっとしてこのＦＢＩってテロリストとグルなんとちゃうか」って思うくらい阿吽の呼吸のマヌケっぷりです。
ひょっとしたらこのマヌケなＦＢＩが裏返しになって…
パート２の「あの場面」につながったのかも…
パパの採点。１００点満点中９０点。

この作品でテロリストのリーダーを演じていたアラン・リックマンさまは、後にハリー・ポッターシリーズでスネープ先生を演じることになります。
もっちゃりしたあのしゃべりかたは、このころすでに完成されていたようです。

ロッキー

１９７６年アメリカ映画
監督　ジョン・Ｇ・アヴィルドセン
主演　シルベスター・スタローン、タリア・シャイア、バート・ヤング、カール・ウエザース、バージェス・メレディス

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介です。
二冊目３６０本目は「ロッキー」。
この映画、なんで紹介してないんやろ、みたいな映画、けっこうあったりして。
この映画なんかまさにその典型ですよね。
二年間数珠つなぎにさえひっかからなかったってのがすごいなあ。
シルベスター・スタローンさまを一躍スターダムにのしあげた記念碑的傑作でございます。
プロボクサー・ロッキー＝スタローンさまは、ファイターとしてはすでにピークを過ぎた三十歳近いボクサーでございます。
場末のリングで賭けボクシングの選手なんかやっております。
彼には彼女がいてまして、それがシャイアさま。
で、その兄がヤングさま。
そんなロッキー＝スタローンさまに、人生最大のチャンスが到来するわけです。
チャンピオン・アポロ＝ウエザースさまの、建国記念イベントに組み込まれていた大きな試合の相手が突然怪我で欠場することになりまして、ウエザースさまの対戦相手にスタローンさまが指名されたわけでございます。
ロッキー、鍛える。
音楽、流れる。
ロッキー、走る。
音楽、流れる。
ロッキー、サンドバッグ（このサンドバッグがヤングさまの勤める肉屋の肉だったりします）叩く。
音楽、流れる。
みたいな。
圧倒的不利な下馬評の中、ロッキーはリングに立ちます。
で、ゴングが鳴る。
うひょおおおお。よろしいなあ。
とにかく素直に楽しんで、素直に感動していただいたらいいかなと思える作品でございます。
パパの採点。１００点満点中９５点。
誰でも知っているテーマ曲が素晴らしいですね。
この曲がかかると、限界までいっててもさらに腕立て五回くらいできるから不思議です。

なぜか元気になれる曲。これほど物語世界とシンクロしてしまう曲も珍しいですよね。
とりあえずこのテーマ曲に五点献上です。

ジャッカルの日

１９７３年アメリカ映画
監督　フレッド・ジンネマン
原作　フレデリック・フォーサイス
主演　エドワード・フォックス、エリック・ポーター、デルフィーヌ・セイリグ、ミシェル・ロンスダール

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介です。
二冊目３６１本目は「ジャッカルの日」。
フレデリック・フォーサイスさま原作のベストセラー小説の映画化でございます。
えっとですねえ、１９９７年にブルース・ウィリスさまとリチャード・ギアさまの主演で「ジャッカル」って映画がありました。
この映画、本作「ジャッカルの日」を解体再構成したみたいな内容の映画でありまして。
途中の描写とか、かなり似たところとかあったわけなんですが、後半とかはまるで別物でしたね。
ほとんどアクション映画の「ジャッカル」、サスペンス映画の「ジャッカルの日」。
どちらがいいかは好みの問題でしょうが、私は「ジャッカルの日」のほうが好きですね。
フランスのドゴール大統領の暗殺を狙う一派がおりまして、その一派は数度にわたり、大統領暗殺を計画して失敗しておりました。
んでその一派は、警察や軍に顔の知られていないスナイパーを雇い、その男に大統領暗殺を依頼します。
男のコードネームはジャッカル＝フォックスさま。
ジャッカルは高性能のライフルを準備し、着々と準備をすすめます。
そんなジャッカルは暗殺準備のなかで、自分自身を怪しんだ人をも殺していくわけですな。
暗殺をもくろむ一派のメンバーを逮捕し、暗殺計画に気付いたフランス警察の警視ロンスダールさまは、ジャッカルを暗殺犯としてではなく、別件の殺人犯として指名手配します。
でもこのジャッカルってのは実にクレバーなわけですな。
巧みに変装し、ついにはフランスの開放記念日、暗殺計画の決行日を迎えます。
果たしてジャッカルの暗殺は成功するのか…
ってか、ドゴール暗殺の事実はなかったわけですから、結局、暗殺は失敗するわけですが。
ここらへんが実在の人物を使ってフィクションを構築する限界かもしれませんが。
パパの採点。１００点満点中９０点。
もう、めっちゃ好きな作品です。
とにかくエドワード・フォックスさまに尽きますね。
この人、これ以外の作品ではあまりお見かけしておりません。
もっともっと活躍していただきたい俳優さんです。

トータル・リコール（１９９０）

１９９０年アメリカ映画
監督　ポール・ヴァーホーヴェン
主演　アーノルド・シュワルツェネッガー、レイチェル・ティコティン、シャロン・ストーン、マイケル・アイアンサイド

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介です。
二冊目３６２本目。「トータル・リコール」。
Ｐ・Ｋ・ディックさま原作の短編小説を、渾身のキャストスタッフで映画化した作品。
とにかくＳＦＸがめっちゃいかしております。
んでもって、物語が進行していくにしたがってどんどんハードに展開していくストーリーもかなりのもの。
もうねえ、作品が始まった時点ではこんな結末は全然想像できませんでした。
そういう意味ではかなりびっくりした作品でございます。
めっちゃ未来のお話。
人類は火星に進出。
完全に気圧がコントロールされた密閉式のドームを建設し、資源採掘とかをしております。
主人公はシュワルツェネッガーさま。
あたりまえですわな。
彼は地球で働く労働者ですが、なぜか火星で女性＝ティコティンさまと事故にあう夢ばかり見ます。
彼の妻はストーンさま。「氷の微笑」でブレイクする直前でございます。
というかこの作品でブレイクしたというか。
彼は通勤途中、「夢の脳内旅行」、リコールの広告に魅せられまして、フラフラっと申し込んでしまいます。
脳内旅行の先は火星。
しかしこの「脳内ツアー」に入るまでに、彼の体に拒否反応が起きるわけです。
どういうことかというと、彼の今の人生そのものが刷り込まれた記憶で、それが原因で拒否反応が起こってたんだってことがわかります。
彼はそもそもは火星の悪の支配者組織のナンバー２。
支配者を裏切り、反乱勢力について囚われた男だったんですね。
しかし彼は支配者のことを知りすぎている。で、まだ利用価値があるってことで、仮の記憶を植え付けられ、監視されていたと、そういうことらしい。
ここらあたりから、物語がひたすら入り組んでまいりまして、予想外の方向に進んでまいります。
ラスト近くの盛り上がりは素晴らしい。とにかく楽しめました。

パパの採点。１００点満点中９０点。
敵役のマイケル・アイアンサイドさまってけっこう好きな役者さんでございます。
昔は悪役専門だったんだけど、最近はけっこう善玉も演じるよになりましたね。
こういう渋い役者さんの活躍の場が増えるのはうれしいですね。

レオン

１９９４年アメリカ映画
監督　リュック・ベッソン
主演　ジャン・レノ、ナタリー・ポートマン、ゲイリー・オールドマン、ダニー・アイエロ

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介です。
二冊目３６３本目。巨匠リュック・ベッソン監督のアメリカ進出第一作。
ベッソン監督と二人三脚でがんばってきたジャン・レノさまの評価をも一気に高めた傑作でございます。
この作品を見たとき、ジャン・レノさまのことほとんど知りませんでしたが、この作品以降の活躍は今さらここで書くまでもないほどでございますね。
主人公の少女を演ずるのがポートマンさま。
彼女は家族を麻薬組織に殺されてしまいます。
彼女が頼ったのは隣人で、孤独な殺し屋のレオン＝レノさま。
孤独な少女と孤独な殺し屋。
二人の心が交流をはじめたとき、事態は大きく動きはじめ、やがて強烈なラストシーンにつながってくわけですね。
クールで、それでいて優しさを隠しきれず、さらにその優しさをどう表現していいか迷う殺し屋をレノさまが好演。
微妙な年齢のかもしだす微妙な雰囲気を、これまたポートマンさま好演。
んでもってゲイリー・オールドマンさまのキレっぷりもなかなかいいです。
退廃的というか、破滅的というか、そういった空気が漂うなか、美しくも激しい「愛」の形が鮮烈に描かれます。
なかなか楽しめた作品でございます。
パパの採点。１００点満点中８５点。
他のお気に入り作品に比べると、若干評価低めかもしれませんが、それは決してこの作品が面白くないとかではなくてですねえ、他の作品が好きなだけでございまして。
そもそも私ってこういうどんより系の作品苦手でして。
好みの問題でございますので、この評価はあくまでも個人的評価なんだってことでお許しいただきたいと思います。

ザッツ・ダンシング

１９８５年アメリカ映画
監督　ジャック・ヘイリーＪｒ
主演　ジーン・ケリー、ミハイル・バリシニコフ、サミー・デイビス・Ｊｒ

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介です。
二冊目３６４本目。
古今東西のダンス映画のハイライトシーンを集めたダンス版「ザッツ・エンターテインメント」。
この映画が製作された１９８５年当時って、私、劇団生活の真っ只中でございました。
劇団ってところは、当然ダンスのスキルとかそれなりに要求される世界でございましてですねえ。
ちょうど同じ年に、かの傑作「コーラスライン」を見まして、「ミュージカル熱」というより「ダンス熱」が最高に高まっている時期にこの作品を見まして、「うわわわわっ」って思いました。
とはいえ、今ではこの「ザッツ・ダンシング」で感動しまくったダンス映画は、ほとんど本編を見ているような気がしておりまして、そういう意味では私にとってのこの作品は「ダンス映画の鑑賞ガイド」って扱いになってしまっております。
大事な作品には違いないんですが、「この作品で感動したのは、『赤い靴』のダンスシーンです」なんて書いても…
ねえ。
イマイチ「ああ、そうなんですか」って印象もたれて終わり、みたいな感じがしまして。
それならこの作品わざわざ見なくても「赤い靴」見ればいいわけであって。
しかしですねえ、ダンスの名手たちによって繰り広げられるダンスシーンの連続ははやり圧倒的。
ダンスってかなりレベルの高い肉体芸術なんだなあって、改めて思ってしまいました。
「ダンスの凄み」を感じたいなら、個々の作品を見るよりもこの作品でしょうね。
パパの採点。１００点満点中８０点。
けっこう年代に忠実に、ダンスシーンが収録されております。
クライマックスでマイケル・ジャクソンさまのダンスなんかがでてきまして、「ああ、やっぱりこの人天才だったんだなあ」って、改めて思ってしまいました。

ザッツ・ショック

１９８４年アメリカ映画
監督　アドリュー・クーエン
主演　ドナルド・プレザンス、ナンシー・アレン

まだご紹介していないお気に入り作品のご紹介。
二冊目３６５本目。
これはホラー版「ザッツ・エンターテインメント」。
「ハロウィン」シリーズのドナルド・プレザンスさまと、「殺しのドレス」のナンシー・アレンさまが案内人となって、ホラー映画のダイジェストを見せてくれます。
二人は映画館の中におりまして、他の観客たちといっしょにホラー映画を楽しみながら、進めていくって形が、けっこう芝居がかってて大好きです。
紹介されるのは「シャイニング」だとか「ジョーズ」だとか「鳥」「ナイトホークス」「殺しのドレス」「暗くなるまで待って」だとかの、ホラーというよりサスペンス映画がほとんど。
もちろん「悪魔のいけにえ」だとか「ゾンビ」だとか「ハロウィン」なんかの純粋なホラー映画も紹介されてはおりますが。
この映画のすばらしいところは、一本の映画のショックシーンを紹介して、次の映画…ってつなぎかたではなく、複数の映画のショックシーンを巧みに編集して、その作品がもっていたショックシーンとは別の、新しいショックシーンを創造しているところです。
もう、驚くような効果的な編集を見せてくれております。
これを見て「この映画面白そうやなあ」って思ってその映画を見て、「あれ、けっこう普通やん」って思った映画、けっこうあったりして。
この「ザッツ・ショック」の編集に関していえば、紹介している映画本編よりもスリリングで面白い編集がされてたりしまして、めっちゃ楽しめました。
パパの採点。１００点満点中９５点。
クライマックスでプレザンスが言います。
（ショックシーンのあとに）「これはただの映画です。…しかしそのうちに、あなたは映画館を出て、家に帰らなければなりません。恐らく…一人で」
おお、怖い。
怖いけど、面白い。
いやあ、映画っていいなあ。そう思える作品でございます。

あとがき

えっと、長々とやってまいりました３６５本の映画紹介、この作品をもちましてめでたく二冊目の３６５本目のご紹介が終わりました。
同一作品を二回紹介したってことはありませんので、これで７３０作品をご紹介したことになります。
いやあ頑張った。
で、三冊目に突入。
果たしてどこまで続けることができるのかあまり自信もありませんが、まだご紹介していない作品とかけっこうありますので、皆様第三集もよろしくおつきあいくださいませ。